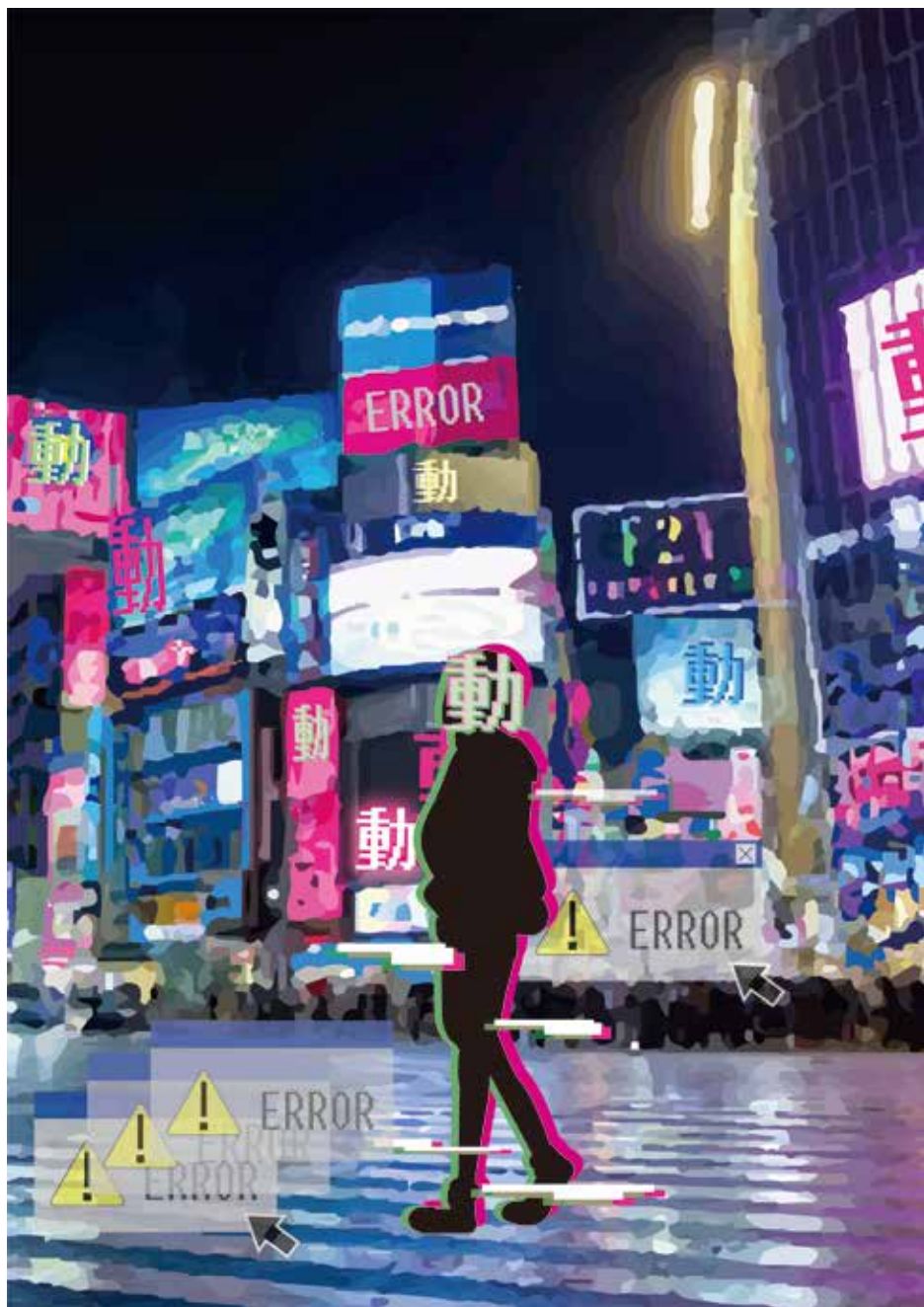


2025

# 青森商業教育

## MERCURY



青森県高等学校商業教育研究会  
青森県高等学校教育研究会商業部会

題字 / 奈良 尹 (元青森県高等学校商業教育研究会会長)  
表紙 / 青森県立黒石高等学校 情報デザイン科3年 江利山 ひより

## 目 次

【巻頭言】	1
「青森の未来を拓く、変革期の商業教育 ～生成 AI 時代における「実学」の再定義に向けて～」 青森県高等学校教育研究会商業部会長 青森県高等学校商業教育研究会会長 青森県立青森商業高等学校校長	田中正也
【特別寄稿】	
1 「つなぐ言葉、つなげる心、つながる世界 ～韓国・済州高等学校との国際交流～」	3
青森県立弘前実業高等学校 教諭 長谷川 善弘	
2 「地域と共に創る学びの場 — イオンモール合同学園祭と産業高校体験フェスを通じて」	10
青森県立八戸商業高等学校 教諭 岩間 由香子	
【令和7年度 第70回 青森県高等学校商業教育研究大会】	
1 全体発表	
「会計分野における指導と評価の一体化 ～戦略的思考で考える科学的根拠によるアプローチ～」	13
会計分野研究委員会 青森県立三沢商業高等学校 教諭 佐藤 雅哉 青森県立八戸商業高等学校 教諭 村上 啓子	
「科目『ネットワーク管理』について～実践力を高めるための授業改善～」	16
ビジネス情報分野研究委員会 青森県立青森商業高等学校 教諭 伊藤 大貴 青森県立大間高等学校 教諭 三橋 壮大	
2 分科会発表	
第1分科会 マーケティング・マネジメント分野研究委員会 「青森県から全国・世界を取りに行くマーケティング 実践編」	20
講師 タグボート株式会社 代表取締役 水口 清人 司会者 青森県立八戸商業高等学校 教諭 下田 幸大	
第2分科会 会計分野研究委員会 「最新会計基準から視える重要なカギ」	26
講師 東京CPA会計学院 山内 樹 司会者 青森県立弘前実業高等学校 教諭 小中 喜貴	
第3分科会 ビジネス情報分野研究委員会 「生成AIを活用した授業づくり ～AI時代を主体的に生き抜く生徒の育成～」	32
講師 ITラボ株式会社 代表取締役 新山 則和 司会者 青森県立三沢商業高等学校 教諭 附田 真菜	

3 講演					
演題	「DX時代のリーダー育成とプロジェクトマネジメントを考える」	………			38
講師	城西大学		副学長	栗田 るみ子 氏	
<b>【研究委員会報告】</b>					
マーケティング・マネジメント分野研究委員会		青森県立八戸商業高等学校	………		42
会計分野研究委員会		青森県立弘前実業高等学校	………		44
ビジネス情報分野研究委員会		青森県立三沢商業高等学校	………		46
教育課程等研究委員会		青森県立青森商業高等学校	………		50
総合的科目研究委員会		青森県立青森商業高等学校	………		51
研究誌編纂委員会		青森県立青森商業高等学校	………		53
<b>【令和7年度高大連携推進の取り組み】</b> …………… 55					
<b>【県商研主催事業報告】</b>					
1 全国商業教育指導者研修会					
	青森県立弘前実業高等学校	教諭	西舘 大輔	………	72
2 産業・情報技術者等指導者養成研修（商業）					
	青森県立大間高等学校	教諭	三橋 壮大	………	77
3 産業・情報技術者等指導者養成研修（情報）					
	青森県立八戸商業高等学校	教諭	榭 祥吾	………	82
<b>【商研ニュース】</b> …………… 86					
<b>【研修に参加して】</b>					
1 「中堅教諭等資質向上前期研修を終えて」					
	青森県立青森商業高等学校	教諭	伊藤 大貴	………	97
2 「中堅教諭等資質向上前期研修を終えて」					
	青森県立三沢商業高等学校	教諭	附田 真菜	………	98
3 「中堅教諭等資質向上前期研修を終えて」					
	青森県立大間高等学校	教諭	三橋 壮大	………	99
4 「中堅教諭等資質向上後期研修を終えて」					
	青森県立八戸商業高等学校	教諭	榭 祥吾	………	100
5 「中堅教諭等資質向上後期研修を終えて」					
	青森県立弘前実業高等学校	教諭	柴崎 健太郎	………	101
<b>【役職定年を迎えて】</b>					
1 「黒高と言えば「情報デザイン科」					
	青森県立黒石高等学校	校長	木立 徹	………	102
2 「商業教育、すべてに感謝！」					
	青森県立三戸高等学校	教頭	土岐 一行	………	103
<b>【新採用となって】</b>					
「新採用となって」	青森県立三沢商業高等学校	教諭	鶴ヶ崎 礼奈	………	104
<b>【令和7年度商業部会・活動概要】</b> …………… 105					
I 研究会の概要	II 研究活動の概要	III 各種競技大会	IV 各種検定試験		
<b>【編集後記】</b>					

## 巻頭言

# 青森の未来を拓く、変革期の商業教育 ～生成 AI 時代における「実学」の再定義に向けて～

青森県高等学校教育研究会商業部会長  
青森県高等学校商業教育研究会会長

田 中 正 也

(青森県立青森商業高等学校校長)



青森県の商業教育に携わる校長先生をはじめ、商業科教員の皆さまにおかれましては、日頃より青森県高等学校教育研究会商業部会及び青森県高等学校商業教育研究会の諸行事に対し、多大なる御尽力と御協力を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

さて、昨今、私たちが身を置くビジネスの世界は、かつてないほどの激流の中にあります。デジタル・トランスフォーメーションの波は、もはや単なる業務効率化の手段にとどまらず、企業の存立基盤そのものを大きく変えようとしています。そして今、その変革の中心にあるのが、「生成 AI」という破壊的でありながら創造的なテクノロジーの出現です。こうした激動の時代において、我々商業教育に携わる者が、どのような羅針盤を持ち、いかにして生徒たちを導いていくべきか、今一度立ち止まり、確認していく必要があると強く感じています。

### 1 商業教育の方向性：スキル習得から「価値創造」へ

これまでの商業教育は、簿記、情報処理、マーケティング等の各分野において、正確な事務処理能力や専門知識の習得を重視してきました。これらはビジネスの「共通言語」であり、その重要性が揺らぐことはありません。しかしながら、単純な計算や定型的なデータ分析、伝票作成といった業務は、今やAIが瞬時に、かつ正確にこなす時代となっています。

これからの商業教育が目指すべき方向性は、単なるスキルの習得にとどまらず、それらを道具として使いこなし、新たな「価値」を創造する力を育成することにあります。AIには担うことのできない、「共感に基づいた課題の発見」「多角的な視点による意思決定」「倫理観を伴う責任ある行動」といった、人間ならではの強みを、商業という実学を通して磨き上げていくことこそが、私たちに課せられた新たな使命ではないでしょうか。

### 2 生成 AI との共生：思考を止める道具ではなく、思考を拡張する翼へ

特に生成 AI の活用については、教育現場において期待と不安が交錯しているのが実情です。「生徒が自ら考えなくなるのではないか」「不正に利用されるのではないか」といった懸念は、教育者としてごく自然な感覚であると思います。しかし、私たちはこの技術を遠ざけるのではなく、将来ビジネスの最前線で不可欠となる「武器」として、正しく向き合う必要があります。

これからの授業では、AIを単なる「答えを出す機械」として扱うのではなく、「思考を深め

るための対話相手」として活用する場面を意識的に増やしていったらどうでしょうか。AI が生成した情報の真偽を確かめるファクトチェック、提案内容を批判的に検討するクリティカル・シンキング、より良い回答を引き出すための問いを立てるプロンプト設計——これらの過程そのものが、現代に求められる高度な情報活用能力であると考えます。「AI に使われる人材」ではなく、「AI を使いこなし、高い付加価値を生み出す人材」を育成するための試行錯誤を、先生方と共に進めていきたいと思えます。

### 3 生徒に対する指導の在り方：「伴走者」としての教師

こうした変化の中で、私たち教員の役割もまた、大きな転換期を迎えています。かつての「正解を教える存在」から、生徒と共に問い、考え、悩む「伴走者（ファシリテーター）」へと意識をシフトしていくことが求められています。生徒たちに、「商業を学ぶことは、社会を創ることにつながる」という実感や高揚感を与えられているのでしょうか。検定試験合格という「点」の目標だけでなく、その先にある社会貢献や自己実現という「線」の物語を示せているのでしょうか。

生徒が AI を活用して斬新なビジネスモデルを提案したとき、あるいは既存の商慣習に疑問を投げかけたとき、それを「前例がない」と退けるのではなく、「面白い。さらに深めてみよう」と背中を押せる存在でありたいものです。生徒の失敗を受け止め、その挑戦を称える文化を、まずは私たち教員自身が育てていくことが重要だと考えます。

### 4 青森の未来を担う誇り

青森県は現在、人口減少や若者の県外流出といった大きな課題に直面しています。だからこそ、商業高校で「生きた経済」を学んだ若者たちが、デジタル技術を武器に、地元の伝統産業をアップデートし、新たな起業の流れを生み出し、青森の経済に新たな活力をもたらしてくれることを期待しています。

先生方が日々教室でかける一言一言が、数年後の青森の商店街を、企業を、そして地域社会そのものを変えていきます。私たちは単に就職の準備をさせているのではありません。青森、そして日本の「未来の設計図」を描く若者たちを社会へ送り出しているのです。

変化の激しい時代は、見方を変えれば「商業教育が最も輝く時代」でもあります。社会の仕組みが大きく変わる今だからこそ、実学である商業教育の価値は、かつてないほど高まっています。先生方ご自身も変化を恐れず、学び続けることを楽しんでいただきたいと思います。先生方の前向きな挑戦の姿こそが、生徒にとって最大の教材となります。

「商業教育に大事なこと。ANG。」

ANGとは、「明るく、仲良く、元気よく」。

私たちもまた、地域社会や地域経済に貢献できる人材、そして地域から真に求められる人材を育成するため、覚悟をもって「明るく、仲良く、元気よく」、商業教育に邁進してまいりましょう。

## 【特別寄稿】

### つなぐ言葉、つなげる心、つながる世界 ～韓国・済州高等学校との国際交流～

青森県立弘前実業高等学校 教諭 長谷川 善弘

#### 1 はじめに

本取組のきっかけには、「生徒の視野を広げたい」という思いがあった。本校では商業教育の特色を生かし、マーケティング、簿記・会計、情報処理などの知識や技能の習得をもとに、商業の見方や考え方を通じて社会や経済の構造を理解し、主体的に課題を発見・解決する力の育成を重視している。商業教育は、単なる職業教育にとどまらない。経済活動の本質を捉え、地域社会や国際社会とのつながりを意識した学びを可能にする教育領域であり、特に近年はグローバル化の進展により、商業活動は国境を越えて展開されており、国際的な視野を持つことは地域に根ざした人材育成においても欠かせない要素となっている。こうした背景を踏まえると、生徒が実際のビジネスや国際活動に触れる機会を設け、教室内では得がたい実践的なスキルや判断力を養う必要性が高まっている。商業教育の本質は、理論と実践の往還にある。現場に根ざした経験が加わることで、生徒の理解は深まり、応用力が育まれる。そのような教育的ニーズを抱えていた折、県から国際教育に関する事業の紹介があった。国際交流や異文化理解は商業教育と親和性が高く、生徒の視野を広げるうえでも理想的なテーマである。本校の課題意識とも合致しており、学びの幅をさらに広げる絶好の機会になると判断し、本取組の実施に至った。

#### 2 今年度の取組

##### (1) 講演1 日本貿易振興機構 青森貿易情報センター

日本貿易振興機構（JETRO）青森貿易情報センターから講師をお招きし、国際取引や貿易実務の基礎について講義をしていただいた。講義では、世界経済の動向や日本企業の海外展開の最新事例を交えながら、貿易の仕組みや国際ビジネスに求められる視点、そして海外市場で活躍するために必要なスキルや心構えについて、分かりやすく解説していただいた。講義後の振り返りでは、「日本と世界をつなぐ仕事がしたい」「文化や商習慣の違いを理解することの大切さを実感した」「青森の特産品を海外に広めたい」といった声が多く寄せられた。中には、「はと笛を輸出できないかと真剣に考えた」「韓国との交流に向けて、相手国のニーズをもっと調べたい」「関税の仕組みがニュースとつながって理解できた」といった具体的な気づきも見られた。また、「JETROという組織の存在を初めて知った」「英語や文化理解の重要性を実感した」「貿易はモノだけでなく、書類や契約、信頼関係も含まれることを学んだ」など、貿易に対する理解が深まったことがうかがえる感想も多く、生徒たちは、国際社会における日本企業の役割を理解し、自らもグローバルな視点をもって行動する重要性を実感していた。



## (2) 講演2 JAアオレン 青森県農村工業農業協同組合連合会

JAアオレン（青森県農村工業農業協同組合連合会）から講師をお招きし、地元企業の視点から見た貿易や海外展開の実際について講義していただいた。講話では、青森県産りんご製品の輸出に関する具体的な取り組みを紹介していただき、海外市場における需要の変化、現地の嗜好に合わせた商品開発、品質管理の徹底など、日々の努力と工夫の積み重ねが国際取引を支えていることを学ぶことができた。生徒たちは、ハラル認証を取得してイスラム圏に輸出を進める戦略や、密閉搾り製法による高品質なジュースづくり、搾りかすの再利用によるSDGsへの貢献など、企業の挑戦と工夫に強く関心を寄せていた。また、海外の取引先との信頼関係を築くうえで、誠実な対応や継続的な品質維持がいかに重要であるかが強調され、「地域ブランドの力は、日々の信頼の積み重ねによって生まれる」という言葉に深くうなずいていた。この講話を通して、生徒は地元企業が持つ国際的な可能性を実感するとともに、地域資源を世界に発信する意義を理解した。飲み比べ体験を通じて品質の違いを実感したり、国ごとのPR戦略の違いに気づいたりすることで、地域経済と国際社会のつながりを具体的にイメージするきっかけとなった。さらに、自らの課題研究や文化祭での販売活動にも活かしたいという声も多く、学びが実践へとつながる貴重な機会となった。



## (3) 講演3 キャラバン合同会社

海外でホテルを経営するキャラバン合同会社の代表を講師に招き、「相手国を知る」というテーマのもと講義をしていただいた。観光・宿泊業における多国籍のお客様との関わりを通じて、文化的背景や価値観の違いを理解し、相手を尊重する姿勢の重要性について、具体的な経験談を交えて語られた。講師は「国際社会で最も大切なのは相互理解である」と繰り返し強調。言語を学ぶだけではなく、相手の立場に立って考えることが真のコミュニケーションにつながると述べた。この言葉は生徒の心に深く響き、講義後の振り返りには「相手を知る努力が信頼関係をつくる」「文化の違いを受け入れることが共存の第一歩」といった気づきが多く見られた。生徒たちは、国際ビジネスにおいて求められるのは取引技術だけでなく、人と人とのつながりを築く力であることを理解し、異文化を受け入れる柔軟な姿勢の重要性を学んだ。また、途上国でのビジネスの可能性や、日本の少子高齢化・労働力不足といった課題にも目を向け、地域と世界をつなぐ視点を持つことの意義を実感していた。本講義は、生徒一人ひとりが「グローバルな時代に生きるとはどういうことか」を考える貴重な機会となり、将来への意識変容を促す学びの場となった。



#### (4) 海外交流【韓国 済州高等学校】

韓国の高校生とのリモート交流を2回実施した。今回の交流は、両校の生徒が互いの文化や価値観を共有し、国際的な視野を広げることを目的として企画されたものである。交流はオンラインで行われ、韓国側の高校生は日本語を流暢に話し、会話が円滑に進んだことが大きな特徴であった。言語の壁を感じさせない自然なやり取りにより、双方の生徒が積極的に発言し、活発なコミュニケーションが展開された。1回目のリモート交流では、本校生徒が制作した缶バッジに関する意見交換を実施した。韓国の高校生からはデザインやコンセプトに対する率直な感想が寄せられ、色使いやモチーフの意味に関する質問も多く出された。このやり取りを通じて、生徒は自らの作品を他者の視点で捉え直す機会を得ることができ、創造的な発想をさらに広げるきっかけとなった。続いて、津軽弁を題材としたクイズ形式のアクティビティを行った。画面越しに出題された方言の意味を韓国の高校生が推測する場面では、笑顔と笑い声があふれ、交流は大きな盛り上がりを見せた。韓国側の生徒も積極的に回答し、地域文化への関心を示す姿が印象的であった。このプログラムは、言語や文化の違いを楽しみながら学ぶという交流の目的に沿った効果的な取り組みとなった。2回目の交流では、高校生同士ならではの自由な会話の時間を設けた。好きな音楽や趣味、最近ハマっていることなど、等身大の話題を共有することで、互いの生活や価値観に触れることができた。こうしたやり取りを通じて、国境を越えた共感が生まれ、距離が縮まる瞬間が数多く見られた。今回の交流は、言語・文化・価値観の相互理解を深める貴重な機会となった。生徒にとって、国際社会で求められるコミュニケーション能力や柔軟な思考を育む実践的な学びの場となったことは大きな成果である。以下に、生徒の感想をまとめたものを示す。

#### 《生徒の感想まとめ》

##### 今回の交流で一番印象に残ったことは何ですか？

- ・今回の交流で最も印象に残ったのは、韓国・チェジュ高校の生徒が日本語をととても流暢に話していたことです。発音や表現が自然で、会話がスムーズに進んだことに驚きました。
- ・趣味や流行について語り合い、お互いの好きなことを共有できた時間はとても楽しく、距離が一気に縮まったように感じました。
- ・1対3の少人数での交流では、韓国の方言や文化について深く知ることができ、教科書では学べないリアルな情報を得られたことが大きな収穫でした。
- ・通信環境が不安定な場面もありましたが、そのような状況でもジェスチャーや表情、気持ちを込めたやり取りで意思を伝えられることを実感しました。言葉だけでなく、相手に伝えたいという思いがあれば、コミュニケーションは成立するというのを改めて学びました。この経験を通じて、言語や文化の違いを超えて人とつながる楽しさを強く感じることができました。

##### 韓国の高校生との交流で、驚いたことや新しく知ったことはありましたか？

- ・韓国の高校生との交流で驚いたことは、まず韓国の高校生の下校時間が日本よりも早いという点です。日本では夕方まで学校にいたことが多いですが、韓国では比較的早く帰宅する習慣があることを知り、生活リズムの違いに新鮮さを感じました。
- ・制服の着方が自由であることにも驚きました。日本では着こなしに一定のルールがありますが、韓国では個性を表現できるスタイルが認められているようで、文化の違いを実感しました。
- ・韓国にも方言があることを知り、特に済州島の方言は言葉が短くなる特徴を持ち、韓国語の中でも難しいといわれていることに興味を持ちました。普通の韓国語と済州島のなまりが大きく異なる

ることにも驚き、日本の方言との共通性を感じました。加えて、方言が若い世代で使われなくなっている点は、日本と同じ課題だと気づき、言語文化の保存というテーマに共通の悩みがあることを知りました。

- ・韓国の高校生が日本語を流暢に話していたことも非常に印象的でした。国が違っても共通点を見つけられること、そして言語や文化を超えてつながることができるという実感は、今回の交流の大きな魅力でした。

#### 交流前と比べて、韓国や国際文化へのイメージはどのように変わりましたか？

- ・交流前は、韓国といえばK-POP やコスメといった限られたイメージしか持っていませんでした。しかし、今回の交流を通じて、その印象は大きく変わりました。韓国の高校生と話してみると、日本のサブカルチャーが韓国でも広く浸透していることを知り、驚きとともに親近感を覚えました。
- ・韓国の高校生が日本語をとっても丁寧に話してくれたことも印象的で、言語の壁をほとんど感じず、同世代として自然に楽しく会話できたことが嬉しかったです。
- ・異文化交流は難しいものだと思っていましたが、実際には共通点が多く、思った以上にスムーズにコミュニケーションが取れることを実感しました。文化の違いを楽しみながら会話できたことで、国際交流は特別なものではなく、身近で魅力的な体験だと感じるようになりました。この経験を通じて、もっと他の国の人も話してみたいという気持ちが芽生え、世界に目を向けるきっかけになったと思います。

#### この交流を通じて、どんな力（コミュニケーション力、異文化理解、協働力など）が身についたと思いますか？

- ・今回の交流を通じて、最も身についたと感じるのはコミュニケーション力です。言葉だけでは伝わらない場面もありましたが、そのときにはジェスチャーや簡単な英語を使って意思を伝える工夫をしました。こうした経験を通じて、「伝えたい」という気持ちを形にする力が強くなったと思います。
- ・1対3の対話やグループ活動では、初対面の相手に積極的に話しかけることが求められ、勇気を出して自分から会話を始める力も養うことができました。
- ・韓国の文化や価値観を理解しようとする過程で、異文化理解の力も深まりました。日本との違いだけでなく、共通点を見つけることで、相手をより身近に感じることができました。
- ・会話を円滑に進めるために協力し合う場面も多く、協働力を発揮する良い機会になったと思います。言語や文化の壁を越えて、相手と協力しながらコミュニケーションを取る経験は、今後の国際交流や社会生活において大きな財産になると感じました。

#### 交流で使った日本語・韓国語などの言語について、どんな気づきがありましたか？

- ・驚いたのは、韓国にも方言があるということです。特にチェジュ島の方言は、言葉が短くなる特徴を持っていて、日本の津軽弁と似ていると感じました。どの国にも訛りや方言が存在することから、文化的なつながりを実感できました。
- ・普通の韓国語と済州方言の違いが大きく、韓国語の中でも難しいといわれていることを知り、方言の奥深さに興味を持ちました。
- ・日本語の「なんの」「どの」といった言葉は、韓国の高校生には伝わりづらく、英語で「what」を

使う方がわかりやすいということに気づきました。英語はやはり国際的に通じやすく、韓国の高校生の英語発音がとてもきれいだったことにも感心しました。

- ・韓国語は日本語よりも早口に聞こえ、日本語の「つ」や「す」は韓国の人にとって発音しづらいことも知りました。また、「流行」という日本語がうまく伝わらず、簡単な言葉に言い換えて説明する難しさを感じました。言葉の選び方ひとつで理解度が変わることを実感し、コミュニケーションにおける工夫の重要性を学びました。
- ・津軽弁のイントネーション程度の違いなら相手に伝わることもわかり、言葉だけでなくジェスチャーや表情など、非言語的な要素が大切だということを改めて感じました。

#### 「国際交流は自分にとってどんな意味があるか」を一言で表すと？

- ・色々な価値観を理解できる
- ・経験
- ・視野を広げる
- ・新しい自分を見つける
- ・新しい体験
- ・考え方を広げる活動
- ・成長
- ・世界観

#### 今後、韓国や他国の高校生と交流する機会があれば、どんなことをしてみたいですか？

- ・もっと体験型の活動を取り入れたい。例えば、オンラインだけでなく、ゲームや絵を描くなど趣味を共有する時間を設けることで、言葉の壁を越えて楽しく交流できると思います。
- ・郷土料理を学んで一緒に作る体験や、互いの国の食べ物を試食する企画も魅力的だと感じた。食文化を通じて、その国の暮らしや価値観をより深く理解できると感じました。
- ・韓国語をもっと学びたい、普段の会話や地域のことを知りたい。
- ・実際にその地域に行ってみたい。
- ・韓国で流行しているものを取り入れながら、津軽弁を広める商品開発など、共同プロジェクトに挑戦したい。

#### この経験を、学校生活や将来の進路にどう活かしたいですか？

- ・大学進学後に留学や観光に関する研究に海外の視点を取り入れたい。
- ・交流を通じて顔の表情や身振り手振りの重要性を実感したことで、将来の仕事やプレゼンテーションの場面で役立てたい。言葉だけでなく、非言語的なコミュニケーションの力を身につけたことは、社会に出てからも大きな強みになると思います。
- ・多様な意見を理解し、相手を思いやる姿勢を学校生活や地域活動に活かしたい。
- ・異文化交流で培った柔軟な考え方や協働する力は、クラスでの話し合いや地域との連携活動にも応用できるはず。

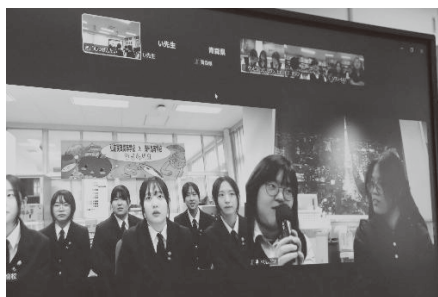
## 今回の交流をもっと良くするために、どんな工夫が必要だと思いますか？

- ・今回の交流では接続が不安定な場面があり、スムーズな会話を妨げる要因となったため、安定した環境を整えることが重要です。
- ・事前準備の質を高めることもポイントです。具体的には、質問や話題をあらかじめ決めておくことで、沈黙の時間を減らし、より多くの意見交換ができます。
- ・時間配分をしっかりと考え、自己紹介・テーマトーク・フリートークなどの流れを明確にすることで、交流がよりスムーズになります。
- ・言語面では、日本語・韓国語・英語の基本表現を事前に準備し、簡単なフレーズ集を共有することが効果的です。
- ・互いの文化や地域について予習しておくことで、会話の幅が広がり、深い理解につながります。
- ・交流時間をもう少し長く設定し、最初の会話で勇気を出して積極的に話しかけることも大切です。初めの一歩を踏み出すことで、より深い交流が生まれ、相手との距離が縮まります。

## 津軽弁缶バッジが到着したときの様子（済州高等学校日本語専攻科1年生）



## オンライン交流の様子



### 3 おわりに

今回の取組を通じて、生徒は地域や国際社会との関わりを意識しながら、「自ら考え、行動する力」を着実に高めることができた。地域企業との連携や海外交流など、多様な学びの機会を通じて、生徒は単なる知識の習得にとどまらず、実社会やビジネスの現場で求められる問題解決力、協調性、そして多様な価値観を理解し受け入れる力を養うことができた。これらの経験は、生徒一人ひとりが「自分の学びが社会や地域とどうつながっているのか」を実感しながら、課題に対して主体的に取り組む姿勢を育む大きな契機となった。また、各取組で得た経験は互いに関連し合い、学びの連続性や広がりを実感する場面も多く見られた。たとえば、地域企業でのフィールドワークやインタビュー活動で得た知見が、海外交流の場面での異文化理解や国際的な視点の獲得につながるなど、学んだことを次の学習や活動に応用する力が自然と育まれていった。このような「学びの循環」は、生徒の内発的な学習意欲を高めるとともに、学びを点ではなく線や面として捉える力を育てている。さらに、同じ学びの場で得た経験や気づきを仲間と共有し、意見を交わす中で、協働して考える力や建設的なコミュニケーション能力も向上した。生徒同士が互いの視点を尊重しながら対話を重ねることで、学びの質がさらに深まり、個々の成長が促進された。こうした一連の学びのつながりは、生徒の主体的な学習態度を強化するとともに、自分自身の成長を具体的に感じ取る貴重な機会となっている。今後も、地域や国際社会との接点を意識した実践的な学びを継続的に展開することで、生徒がより広い視野を持ち、自らの可能性を広げていけるよう支援していきたい。



## 【特別寄稿】

### 「地域と共に創る学びの場 — イオンモール合同学園祭と産業高校体験フェスを通じて」

青森県立八戸商業高等学校 教諭 岩間 由香子

#### 1 はじめに

青森県南地域では、若者の県外流出という課題が顕在化している。その背景には、進学や就職の選択肢が限られているという認識や、地域の魅力を十分に知る機会の不足がある。こうした状況を踏まえ、本校では「地域と共に学び、地域の未来を担う人材を育成する」ことを目指し、今年度は2つの取り組みに参加した。1つ目は、イオンモール下田主催の「合同学園祭 学×食 みんなの SCHOOL FES」である。このイベントは、イオンモール下田が地域コミュニティのハブとなり、高校・大学・地域企業が一堂に会することで、若者が進路や将来について考える機会を創出することを目的としている。本校は課題研究で開発した商品やアプリのマーケティング活動を行うとともに、教育活動の特色を地域に発信した。2つ目は、特定非営利活動法人はちのへ未来ネット主催の「産業高校体験フェス」である。次世代を担う子どもや親子に、産業・専門高校の魅力を伝えることで、将来の夢や高校選びにつながる体験を提供した。本校はここでも、課題研究の成果を発表し、地域住民や小中学生に商業教育の可能性を示した。これらの活動は、地域と学校が連携し、互いに学び合う場を創出することで、青森県南地域の未来を切り拓く第一歩となった。

#### 2 取り組み

##### (1) 合同学園祭 学×食 みんなの SCHOOL FES

主 催：AEON MALL 下田

日 時：令和7年7月6日（日） 10：00～16：00

場 所：イオンモール下田・駐車場

参加生徒：3学年商業科 8名、3学年情報処理科 8名

内 容：①学校紹介 ポスター展示（学校紹介、学科紹介）、学校案内等の配布  
②開発商品の販売 ブラックベリーフィナンシェ（432ファクトリー）  
ブラックベリーどらやき（432ファクトリー）  
つるこまんじゅうブルーベリー味（（有）しんぼり）  
ICHIGO ICHIE NANBU（（有）しんぼり）  
八戸郷土かるた（八戸市教育委員会）

③開発アプリの体験会 南部弁クイズアプリの体験

生徒感想： 今回の活動を通して、単に商品を売るだけでなく、「どうしたらお客様に足を止めてもらえるか」「どんな声掛けが効果的か」など、お客様の立場に立って考えることの大切さを学んだ。活動の初めは「いらっしやいませ」と呼びかけるだけだったが、少しずつ慣れてきて、「このような商品を販売しています」など、タイミングや言い方を工夫できるようになった。その結果、お客様の反応が少し変わることに気づいた。また、声を出し続けることや笑顔で対応することの難しさも実感した。さらに、チームで役割分担や声掛けの連携がうまくいったときには、販売がスムーズに進むことを体験した。しかし、販売後に金額の集計を行った際、金額が一致していないことに気づいた。次回の「はっち」での販売では、商品の数量がさらに多くなるた

め、金額の確認がとても重要だと改めて感じた。今後は、お金の受け渡しの際にお互いにしっかりと確認するなど、今回よりも慎重に取り組みたいと思う。



## (2) 産業高校体験フェス

主 催：特定非営利活動法人 はちのへ未来ネット

日 時：令和7年7月20日（日） 10:00～14:00

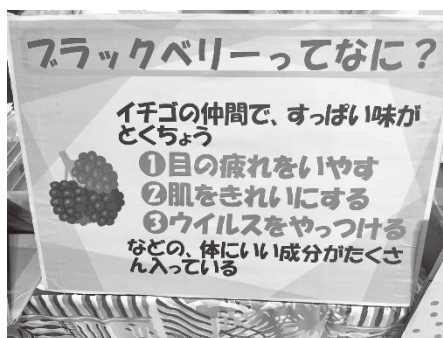
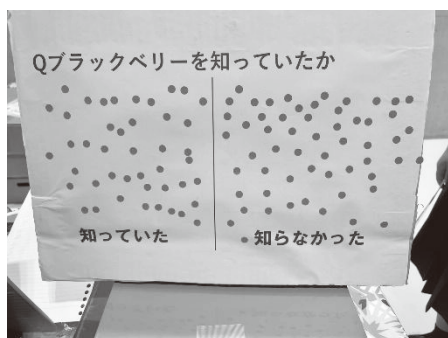
場 所：八戸ポータルミュージアムはっち、マチニワ

参加生徒：3学年商業科 8名、3学年情報処理科 8名

内 容：①学校紹介 ポスター展示（学校紹介、学科紹介）、学校案内等の配布  
②開発商品の販売 ブラックベリーフィナンシェ（432ファクトリー）  
ブラックベリーどらやき（432ファクトリー）  
つるこまんじゅうブルーベリー味（（有）しんぼり）  
ICHIGO ICHIE NANBU（（有）しんぼり）  
八戸郷土かるた（八戸市教育委員会）  
③開発アプリの体験会 南部弁クイズアプリの体験

生徒感想： 今回の産業高校体験フェスでは、前回とは異なる場所である「はっち」で販売を行った。これまでとは違う環境だったため、どのように商品をアピールすればいいのか、どんな工夫をすればお客様に興味を持っていただけるのかを、より深く考える必要があった。前回の販売とは雰囲気も客層も異なっていたため、最初は戸惑いもあった。しかし、環境に合わせて柔軟に対応する力が、販売活動において重要であることを学んだ。これまでは全員が販売スペースの中でお客様を待つ形が多かったが、今回は積極的に声をかけたり、商品の魅力を伝える工夫をしたりと、自分たちから動くことの大切さを実感した。実際に声をかけたお客様から「おすすめはありますか？」と尋ねられたとき、自分の言葉が届いていることに気づき、とても嬉

しく感じた。今回の経験を通して、ただ商品を並べるだけでなく、どのように売るか、どのようにすれば手に取ってもらえるのかを考えて行動することの重要性を学んだ。今後の活動でも、この学びを生かしていけるよう心がけたい。



### 3 おわりに

今回の2つのイベントを通して、生徒たちは「学びを社会に発信する」経験を積むことができた。単なる商品開発や研究発表にとどまらず、地域の人々と対話し、フィードバックを得ることで、学びの質を高めることができたと考える。特に、生徒の意識には大きな変化が見られた。これまで「課題研究は学校内で完結するもの」という認識が強かった生徒たちが、地域社会とつながることで、自分たちの学びが誰かの役に立つという実感を得た。また、販売戦略を考える力、金銭管理の重要性、環境に応じた柔軟な対応力など、具体的なスキルの向上も確認できた。さらに、地域の課題や魅力を知ることによって、「地元で活躍する」という選択肢を前向きに捉える生徒も増えた。

今後は、こうした地域連携の機会をさらに広げ、学校教育と地域社会が共に成長できる仕組みづくりを進めていきたい。最後に、今回の活動にご協力いただいたイオンモール下田様、はちのへ未来ネット様、そして地域の皆様に心より感謝を申し上げます。

## 1 全体発表

### 【会計分野研究委員会】

「会計分野における指導と評価の一体化

～ 戦略的思考で考える科学的根拠によるアプローチ ～」

発表者	青森県立三沢商業高等学校	教諭	佐藤 雅哉
	青森県立八戸商業高等学校	教諭	村上 啓子
司会者	青森県立三沢商業高等学校	教諭	浅水 伸之
記録者	青森県立三沢商業高等学校	教諭	鶴ヶ崎 礼奈

### 1 はじめに

本研究は、商業高校における会計分野の授業を対象とし、学習評価に関する根本的な課題に迫ろうとするものである。特に焦点を当てたのは、「思考力・判断力・表現力」という学習指導要領においても強調されている資質能力の育成と評価である。知識や技能については従来から小テストや定期試験、あるいは検定試験などで評価する方法が体系化されてきたが、思考や判断、表現といった力は、頭の中の過程や言語化の仕方に大きく左右されるため、目に見える形で捉えることが難しい。そのため、教師にとっても「本当に評価できているのか」という不安がつきまとい、評価の妥当性が常に課題となってきた。

そこで本研究では、会計数値という客観的で測定可能なデータを媒介とし、生徒にその数値を用いた思考や判断の根拠を記述させることによって、不可視のプロセスを「可視化」しようと試みた。そのうえで、具体的な授業実践を通じて、その方法がどの程度有効であるか、また生徒の学習意欲や教師の授業改善にいかなる影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的としている。この試みは単に会計教育にとどまらず、「思考の可視化と評価」という普遍的な教育課題への一つの応答であるともいえる。

### 2 研究の背景と課題

本研究の背景には、前年度に行われた「会計分野における思考力・判断力・表現力の育成方法」に関する研究がある。その研究においては、思考や判断、表現を引き出す指導方法の工夫が検討された。しかし、育成した力をどのようにして適切に評価できるかという点については十分に扱われず、課題として残されていた。今年度はその問いを正面から取り上げ、評価方法に焦点を当てることとなった。

思考や判断、表現は目に見えないため、評価は非常に困難である。実際、会計分野の授業では、仕訳や決算処理のように正解が明確な作業と異なり、会計数値を根拠に意思決定や考察を行う活動では、生徒によって多様な解答が現れる。このとき教師がどの観点を重視するかによって評価が変動しやすく、評価の客観性や公平性が担保されにくい。

こうした課題に対応するため、本研究では会計数値を用いた記述活動を導入した。数値を活用して考察させることで、生徒の思考プロセスを言語化・数値化させ、教師がそれをもとに評価を行う仕組みである。この方法は「不可視のものを可視化する」ための具体的方策であり、評価に対する生徒の納得感を高める効果も期待された。本研究はこの試みの有効性を、授業実践を通じて明らかにしようとするものである。

### 3 研究仮説と評価の基本方向性

研究を進めるにあたり、学習評価の基本的な方向性として三つの観点が確認された。第一に、評価は生徒自身の学習改善につながるものであるべきである。つまり、評価を受けたことで自らの学びの課題や次の学習目標が明確になり、改善に向かう契機となる必要がある。第二に、評価は教師の授業改善に役立つもので

なければならない。生徒の実態を把握することで、指導方法の改善や授業デザインの修正につながる事が期待される。第三に、教育的必要性や妥当性が認められない評価方法については、慣習にとらわれず見直す柔軟さが必要である。

さらに評価の性質を整理すると、「指導に生かす評価」と「記録に用いる評価」という二種類が存在することがわかる。前者は形成的評価にあたり、生徒の理解度に応じた指導の改善や学習支援に直結する。後者は総括的評価にあたり、学習到達度を把握し、成績処理や進級判定などに用いられる。これらを適切に使い分けることが、効果的な学習評価の前提条件となる。この前提を踏まえ、二つの仮説が立てられた。

仮説① 生徒が会計数値を用いて意思決定を行う過程を見取ることで、思考力・判断力・表現力を評価できるのではないか。

仮説② 教師が二種類の評価を適切に使い分け、生徒にフィードバックすることで、生徒が学習の方向性を具体的に把握し、改善につながるのではないか。

#### 4 授業実践と評価方法

授業実践では、生徒に対してビジネス課題を提示し、それを会計の知識や技術を駆使して解決させる活動が行われた。ここで重視されたのは、唯一の正解を求めるのではなく、複数の可能性から最適解を導き出す力を養うことである。これにより、生徒は現実社会のビジネスに近い意思決定の過程を体験できるようになった。

思考は二種類に分けられた。第一は「なぜ～なのか」を問うことで知識を深める思考であり、これは知識・技能の評価によって測定された。第二は、課題を発見し解決に導く思考であり、これは思考力・判断力・表現力の評価対象とされた。この二分化により、基礎的知識の習得と応用的な思考力の発揮を明確に切り分けて評価することが可能になった。

評価方法は二段階で構成されている。第一段階は指導に生かす評価であり、教師が生徒の思考過程を肯定的に捉え、コメントとしてフィードバックする。これにより生徒は「自分の考えが認められた」という実感を持ち、主体的な学びにつながる。第二段階は記録に用いる評価であり、ビジネス場面を想定した課題を与え、会計数値をもとに最適解とその理由を記述させた。論理的思考を促すため、理由の記述を必須とし、根拠の明確化を徹底させた。授業ではさらに、目標の可視化、グループワークによる意見交換、根拠を説明する時間の確保といった工夫が施され、表現力の育成が意図的に組み込まれた。

#### 5 評価結果と考察

授業後の評価は、会計専門委員と授業担当者がそれぞれ独自に行い、ABC評価と会計数値への着目の有無を基準とした。その結果、同じ基準を用いても評価結果にばらつきが見られ、特に授業担当者が「C評価」と判断した生徒が多かった。これは、担当者が生徒の思考過程をより細やかに把握していることや、授業中の発言や態度を踏まえて評価しているためと考えられる。

評価の差が生じた要因としては、教師が重視する資質能力の違いがあると分析された。例えば、ある教師は論理性を重視し、別の教師は独創性や柔軟な発想を重視するといった違いである。また、評価基準の文言が曖昧であったことも要因とされた。一方で、生徒側の反応としては多くが自らの評価に納得しており、その理由は担当者が評価基準と理由を丁寧に説明したことにあつた。発表者は「評価は正確さ以上に、生徒が納得できるかどうかが重要である」と結論付け、評価に対する生徒の納得感が学習意欲の向上に直結することを強調した。

#### 6 仮説検証と新たな仮説の提示

仮説①については、会計数値を用いることで思考力・判断力・表現力を可視化できることが一定程度立証された。しかし同時に、教師間で評価に差が生じることが明らかになり、「適正な評価が常に保証されるわけではない」という限界も浮かび上がった。そのため仮説は修正され、「会計数値を根拠に意思決定を行い、その過程と成果を認めることで、生徒にとって妥当性のある評価が可能になる」という新たな定義が提示され

た。ここでは、絶対的な「正しい評価」ではなく、生徒が納得できる「妥当な評価」を重視する姿勢が強調されている。

仮説②については、指導に生かす評価と記録に用いる評価を適切に使い分け、フィードバックを行うことで、生徒の学習改善に効果があることが立証された。実際に、生徒は学習の方向性を把握しやすくなり、思考の変化を実感し、学習意欲が高まったという成果が確認された。教師側にとっても授業改善に有益な知見が得られた。特に「どの数値に着目すればよりの確な判断ができるのか」といった具体的なコメントが効果的であることが示された。

## 7 まとめと今後の展望

研究の成果として第一に挙げられるのは、会計数値を用いて思考を記録させ、そのプロセスを評価することで「思考の可視化」が実現した点である。第二に、会計数値の理解を前提とする定量分析から、企業活動を多面的に捉える定性分析への切り替えが求められることが明らかになった。これは著書『ビジネススクールで身につける会計×戦略思考』の筆者である大津氏が提唱する「会計力」と「戦略思考力」に対応するものである。第三に、ビジネス課題を解決するための戦略的思考を授業の中心に据えることが、思考力・判断力・表現力の育成に大きく寄与することが確認された。

また、評価は単に単元や学期末に学習成果を判定するための総括的評価にとどまらず、学習のプロセスを捉えて生徒の理解を深める形成的評価の意義が再確認された。特に「指導に生かす評価」の質を高めることが重要であり、評価を通じて生徒が「苦手をどう克服するか」ではなく「苦手とどう向き合い、改善していくか」を考える機会を提供することが求められる。その結果、生徒が主体的に学ぶ態度を育み、将来に生きる力を形成することにつながると結論付けられた。

## 8 教師の重要な仕事（教科指導・生徒指導・進路指導）

最後に、研究活動を通じて発表者が導き出したのは、教師の重要な仕事は大きく三つに整理できるということである。第一は教科指導である。単なる知識伝達にとどまらず、生徒の知的探究心を刺激し、会計やビジネスに対する関心を引き出すことが求められる。第二は生徒指導である。これは一人ひとりの個性を発見し、その良さや可能性を伸ばすことを目的としている。そのためには、教科指導の中に生徒の特性を生かす授業デザインを組み込むことが重要である。第三は進路指導である。キャリア教育の視点から、生徒が「この授業を学ぶ意味」を実感できるようにすることが大切であり、日常的な授業の中に進路指導の要素を織り込む必要がある。このように本研究は、会計分野における学習評価方法の検討にとどまらず、教科指導・生徒指導・進路指導を一体化させた教育活動全体の質的向上に大きな示唆を与えるものであった。

### 【ビジネス情報分野研究委員会】

「科目『ネットワーク管理』について  
～ 実践力を高めるための授業改善 ～」

発表者	青森県立青森商業高等学校	教 諭	伊 藤 大 貴
	青森県立八戸商業高等学校	教 諭	三 橋 壮 大
司会者	青森県立三沢商業高等学校	教 諭	浅 水 伸 之
記録者	青森県立三沢商業高等学校	臨時講師	佐々木 萌

#### 1 はじめに

本専門委員会は、昨年度、「生徒へより効果的に科目ネットワーク管理を指導するためには、指導力の向上や指導者不足を解消することが課題」であると認識した。

共通した実習環境を構築したことを起点にして、各校で同様の実践的な授業を実施できるのではないかと考えた。

この取り組みには、セキュリティに関する内容を継続的に学習する意欲や能力を育むこと、そして、ネットワーク利用者にセキュリティポリシーや安全な利用方法をわかりやすく説明し、関係者と適切に連携できるリーダーシップが育成できるのではないかという展望が見込める。

実習室を活用して情報セキュリティ管理の授業実践を行う上では、学校間連携やアイデアの共有に努め、各科目間においても連携することでビジネスの場面で役立つ生徒を育てることを目標に設定した。

#### 2 研究の背景と課題

青森県では「2040年に目指す若者が未来を自由に描き、実現できる社会」の実現に向けてDXを極めて重要な要素と位置づけており、こうした背景から、本専門委員会では「本県のDX推進事業を支援、将来にわたって地域で活躍できる人材の育成」を主な方向性とした。

そのためにも、授業において情報セキュリティに興味・関心を持たせるための工夫が必要である。一般的に行われてきたような講義型の授業は生徒の主体性を欠き、受動的な学習に陥ってしまう傾向が強いため、生徒自身が現状を把握して、主体性を持って学習に取り組むために実践的な学びを行うことを専門委員会で確認した。

#### 3 研究仮説

科目横断的で実践的な学びの実施を前提とし、本研究では次の二つを仮説とした。

仮説① 実際のインシデント対応を想定した実習を行うことで、判断力や応用的な対応スキルを伸ばさせることができるのではないか。

仮説② ポートフォリオの活用により、学びに向かう姿勢を刺激し、主体性が向上するのではないか。

#### 4 授業実践

インシデント対応を例に、講義型授業と実習を交えながらの授業を行うことを考えると、座学で学んだ知識を実習でアウトプットすることにより知識の定着のみではなく、適切な判断力や対応力の育成につながることを期待される。

また、前年度の授業実践によって浮上した課題の改善を図るため、他の商業科目との連携を強化することとし、課題解決能力を育成するためにも教科横断的な学びを取り入れることを決めた。どの教科と連携するかについて本専門委員会で検討した結果、まずは商業科目内における科目横断を第一段階として実施することとした。

企業にとっての損害は何かという議論の中で損害賠償に関する話題が多く挙がったため、商業科目内では

「ビジネス法規」の関連性が高いという結論に至った。学習内容をより現実的なビジネスシーンと結びつけ、多面的に理解できるよう指導内容を再構築した。加えて、以下二点が具体的な取り組みである。

(1) 学びのポートフォリオの作成と導入：生徒一人ひとりが「自身の学習過程、発見、疑問点、成長を可視化するツール」として活用可能である。これにより、与えられた知識を吸収するだけでなく、答えを模索する能動的な学習者へと変容することが期待できる。また、こうしたツールの活用により、評価の材料として生徒の主体的な取り組みを客観的かつ継続的に評価できる体制の構築も目指すことが可能になる。

(2) 仮想インシデント訓練：単なる知識の確認にとどまらず、生徒が現実的な状況下でその知識を以下に応用できるかを試すために行う。

事前にアンケート調査を行った結果、生徒の57%が情報セキュリティを「常に意識している」と回答した。そこで、フィルタリング機能の有無、ウイルス対策ソフトのインストール状況、情報セキュリティ意識の有無をクロス分析してみたところ、セキュリティ対策を講じていないにもかかわらず、約30%の生徒が「自身の注意と努力によって情報は保護可能である」という認識をしていることが明らかになった。

近年のサイバーセキュリティ脅威は、極めて高度化・多様化しており、個人の注意力や一般的な知識だけでは対応が困難であることを踏まえると、生徒の一部は潜在的なリスクを過評価し、誤った安心感を抱いている恐れがある。

このことは、社会で通用する情報セキュリティ人材の育成を目指す今後の教育カリキュラムを検討する上で、重要な指針となりうる。仮想インシデント訓練を行った授業は、こうした意識と現実のギャップを埋めるために実施された。座学によって知識や対処法、情報漏洩のリスクに関して学んだにもかかわらず、生徒たちの様子に危機意識を感じることはできなかった。

各校において共通の指導方針と評価の方向性を設定するため、単元指導評価計画表を作成した。一時間目を規制やコンピュータウイルスについての振り返り、法律についての学習に使い、二時間目を仮想インシデント訓練と設定した。

## 5 評価方法と効果検証

授業前後での生徒の意識変容を確認するため、アンケート調査を行った。要点は以下の通りである。

- ・自分のスマートフォンにはフィルタリング機能を付けていますかという項目では、実習後に割合が増加した。
- ・自分のパソコンにセキュリティソフトをインストールしていますかという項目では、生徒個人が所有していない場合においても、その役割や必要性を理解し導入すべきであるという回答が見られた。
- ・スマートフォンで利用しているアプリケーションのアップデートはこまめにチェックしていますかという項目では、「月に一回以上行っている」と回答した生徒が授業後には83%となった。(自動アップデートの可能性が高い)
- ・スマートフォンのバックアップを取っていますかという項目については、実習後に飛躍的に割合が向上した。(紛失だけではなく窃取されることを意識した結果だと推察される)
- ・あなたはいくつアカウントを持っていますかという項目について、1～3個と答える生徒が6割を超えた。(複数のアカウント所有が当たり前であることから回答に疑問が残る)

インシデント対応における順序について的小テストでは、実習前には全問正解者がおらず、全問不正解者が23%という結果であった。この結果は生徒が十分な対応方法を有していないことを示している。パソコンやスマートフォンがウイルス感染している状況を見たことがあるかについての項目に対して、約二割の生徒が「見たことがある」と回答していたことから、適切なインシデント対応がなされていないことが明らかになった。実習後には全問不正解者がゼロになったことから、この点については大きな改善が見られた。

実習後には、九割の生徒が適切なインシデント対応について理解を示した。この成果は単なる知識の習得にとどまらず、実践を通じて危機意識を醸造したことを意味する。

テーマについての関心は高まりましたか、どのような部分について高まりましたかという項目に対する回

答をテキストマイニングにまとめてみたところ、最も多かったキーワードは「インシデント」であった。その他「セキュリティ」や「パスワード」のように関連する単語が多数挙がっている。これは生徒がインシデントに対して一定の危機感を抱くようになり、具体的な行動に目を向けるようになったという変容だと捉えられる。

次に、学びのポートフォリオについて検証する。4校合同で授業を作成したことによって、各校での理解度に大きな差が生まれなかったと考えられる。テキストマイニングを用いて、一時間目及び二時間目の学びに関するキーワードの分析を行った。一時間目に最も頻繁に出現したキーワードから各種法律を意識している様子がうかがえる。一方、二時間目には「LANケーブル」が最も多く出現し、実習で登場した語句を重要だと生徒が理解していることが確認できる。

生徒が主体的に学習に取り組めるよう、授業内容に加えて、さらに興味を持って学習したい内容を記述させることで、教員側がそのニーズを把握することに努めた。生徒の記述の中には、企業で実際に行っているインシデント対策についてさらに学習したいといったものもあることから、主体的に社会と関わろうとしている姿勢が垣間見られる。また、生徒はLANケーブルの場所と抜き方などについて多くの疑問を持っており、理解を深める姿勢が継続していることが確認された。これらの回答から、生徒側のニーズと教師側が提供するものが適切に合致したと言える。

仮説②については一定の成果が見られた。しかし、生徒がいかに主体的に取り組んでいようとも、教師側のアプローチが不足すれば今回のような結果は見込めないという課題が残った。こうした結果を受けて、本専門委員会では、授業の観点や進め方について今後も協議が必要であると結論付けた。

## 6 課題と考察

現行の授業評価において、生徒の主体的な学習態度を適切に測ることは困難であるという課題がある。座学と実習で複合的に構成されている科目においては、教員による生徒の行動観察に頼らざるを得ず、その評価は客観的な評価として残りにくい、主観性の高いものになりがちである。

このような課題を克服する方策として、学びのポートフォリオの導入と活用が有効である。座学後にポートフォリオを提出させ、その後実習を行うといった学習サイクルを構築することで、生徒の学習態度を可視化し、評価を可能にする環境を整えることができる。

例えば、授業前に教員側で学びのキーワードを設定し、授業後に生徒が記述したキーワードとの一致度を基準に段階評価を行う方法も考えられる。これは、生徒が自らキーワードを探究しようとする主体的な学習態度の一側面を明確に評価する手法である。ただし、ポートフォリオの内容を適切に評価するためには、その内容を精査することが不可欠である。

各校の教員が密に連携し、共通の評価基準や評価ガイドラインなどを作成することで、教員間のばらつきを抑え、より公平で、信頼性の高い評価が実現可能になる。生徒の振り返りアンケートには、「本当に起こったら何もできないと実感した」という回答や、「座学での学びと実践での学びは全く違った」といった内容があった。ここからは、生徒自身がいかに危機意識を欠き、知識を単なる知識としてのみ学習していたかについて見取ることができた。

また、自らの今後の社会における情報セキュリティへの危機意識を認識したことで、主体的に学ぶ姿勢が見られた生徒が存在していたことは予想以上の効果が認められたと評価されると考える。このことから、仮説①についてもアンケート結果やワークシートの記載内容を鑑みても効果が認められるため、立証されたとと言える。

教員の振り返りアンケートからは、個々の教員が単独では実施困難であった実習内容が、協働によって実現可能となり、その結果教員自身の指導スキルが向上するとともに、教員間の専門的なネットワーク構築にもつながったといった回答や、科目横断的な学習に取り組むことで、自身の指導領域が広がったとの回答も複数あった。

## 7 まとめと今後の展望

実践的評価手法の確立と共有については、実習を伴う学習活動における評価方法を体系的に検討し、教員間での共通理解と標準化を推進する必要がある。また、指導内容の標準化と普及については、科目ネットワーク管理を担当する教員の増加に対応し、授業内容の共通指導フレームワーク、モデルカリキュラム、または標準的な単元設計指針を確立することが喫緊の課題である。

今後はこれらの課題解決に注力するとともに、全4校に整備された共通の実習環境を最大限に活用した授業実践を推進していく。今回の授業は、生徒が失敗から学ぶことを意図して設計された。生徒の感想の中には、「もっと演習をやっていきたい」というような演習の重要性を理解しているものや、「実社会に出たら・・・」というものもあった。

社会に出ると失敗が許されない場面も少なくないからこそ、生徒であるうちに、安全な環境で「できない」という場面に直面させ、失敗を経験させることは将来を見据える上で非常に重要である。実学が、実社会に出て役立つ知識や技術を学ぶことだとしたら、「理解はしていたが実践できなかった」という生徒の声は、「商業は実学である」という理念に即していないとも考えられる。

また、インシデント訓練において「LANケーブルを抜いたつもり」という記述もあった。高度な情報社会の到来とDXの加速に伴い、教育現場における情報教育の在り方がこれまで以上に重要性を増す中、このような生徒の声は、実学の必要性と生徒の危機管理の薄さを痛感させられた。

科目ネットワーク管理を通じて育てたい能力と人材像から考えると、それはまだ生徒の利用側の視点が強いことを表していると考えられる。ビジネス法規と横断的な学習をしたことにより、生徒から顧客への被害を考える感想もあったことから利用者意識から管理者意識への変容を見ることができた。普通高校における情報科目と、商業科における情報科目との差別化については、それぞれの校種が果たすべき役割や育成すべき人材像を明確に定義することが課題となる。

本研究では、商業科としてどのような人材を育成しなければならないのかについて議論を始め、土台として実践内容を考案した。今後もDX時代を背景としたICTによる業務効率化を主導できる人材の育成を目指し、単なる知識・技術の伝達にとどまらない、実務に即した教育の展開が求められる。そのためにも、常に社会の動向にアンテナを張り、地域社会が真に求めるIT人材の育成に向けて、引き続き本県の情報処理教育の発展に尽力していきたいと考えている。

## 2 分科会発表

### 【マーケティング・マネジメント分野研究委員会】

#### 第1分科会 「青森県から全国・世界を取りに行くマーケティング 実践編」

講師	タグボート株式会社	代表取締役	水口 清人
司会者	青森県立八戸商業高等学校	教諭	下田 幸大
記録者	青森県立北斗高等学校	教諭	鈴木 有紀

### 1 概要

本研究委員会は「生徒の主体的な学習に向かう態度の育成および授業方法の提案」を研究のテーマとしている。分科会においては、魅力的な経営実践を行っている地元企業の経営者を招き、自社の事業内容や経営方針について講話をいただくことで、生徒の興味・関心を喚起する教材研究の一助としている。

今年度は、タグボート株式会社代表取締役・水口氏を講師に迎え「青森県から全国・世界を取りに行くマーケティング実践編」と題した講演会を開催した。昨年度に引き続き講師を務めていただいた本講演ではこの1年間における自社の変化、今後の5年計画、さらにはクラウドファンディングへの挑戦について、具体的かつ実践的な内容が語られた。

水口氏は、地域社会の課題解決に貢献する企業としての姿勢を示しつつ、青森県産りんごを基軸とした事業展開の展望について、豊富な経験と情熱をもって詳細に説明した。講演後の座談会では、参加した教員との活発な質疑応答が行われ、実りある学びの機会となった。

### 2 講演内容

#### (1) タグボート株式会社の概況と変化

##### ①資本金の増加

昨年5,000万円だった資本金が8,000万円に増加した。

「いよいよ我が社だけではなく、外部の資本も入りまし」と述べ、青森みちのく銀行のホールディングカンパニーが出資するファンドや、地元テレビ局からの出資があったことを報告。これにより「自分だけの会社というだけではなく、地域を巻き込んだ事業を行い、地域課題を解決するための役割として会社を運営していく」という決意が示された。

##### ②自社商品の受賞歴

昨年より掲げていた世界でのコンペティション参加状況について、2025年1月、ジャパンフードセレクションで最高賞を受賞するなど、自社製品の味に対する国内外からの評価が徐々に始まっている。

##### ③水口氏のキャリアと強み

40歳まで青森県を中心にホテル・旅館・ホテルブライダルホールなどサービス業に身を置いてきたが、食品製造業へ転身した。一般的な製造業が「物を安全に作って流通にかけて売り上げを上げ利益を出す」作業であるのに対し、サービス業出身の自身がもたらす化学変化が差別化と個性であると強調。「製造業だけをしていた人は急にホスピタリティの部分を強化しようということはなかなか難しい」と述べ、自身のキャリアがファン作りや事業の急成長にどう生かされるかを説明した。



## (2) 事業展開の根幹をなす3つの柱～TUGBOATが目指したいミライ～

水口氏は、事業の「背骨」であり「根っこ」となる3つの大きなポイントを挙げた。

### ①青森県から世界への挑戦

「青森県からチャレンジしても報われないことを打破できる1人のプレイヤーになれば」という強い思いがある。青森にこだわりながら世界中の人から外貨を稼ぎ、地域からの挑戦が成功することを示したい。

### ② 交流人口・関係人口の増加

人口減少が続く青森において、地域を豊かにするためには「交流人口、関係人口をどう増やしていくか」が重要。自社事業を通じて、工場見学に全国・世界から顧客を呼び込み、青森りんごを使った酒造メーカーとして観光客をもてなし、ファンになってもらい、地域での宿泊・消費を促すことを目指す。

### ③Uターン人材の受け皿となる企業

東京や大阪、仙台など都市部へ進出した子どもたちが青森に帰りたと思った時に「東京と変わらない、またはそれ以上の給料、環境、ブランドをつくり、青森で仕事をして、東京よりも誇りに思える企業であろう」という目標を掲げる。その目標達成のために高利益幅を作り、海外から外貨を稼ぎ、青森県内で東京以上の給料を出せる会社を目指している。具体的な目標として「青森みちのく銀行や県庁職員よりも3年以内に給与を高くしてみせる」ことを掲げ、実際、過去2年間は年7%程度の給与水準向上を実現している。

## (3) 主要商品と戦略～提供商品と今後のラインナップ計画～

### ①CRAZY CIDER (シードル)

自社のりんご実酒製造・販売の先駆け商品。現在、オークチップを使用した大人向けのシードルが好調で、日本最大級のシードルコンペティションに出品中である。2024年に「MEETS」という新ブランドを販売開始。台湾産マンゴー、グアバなどを使用し、新たなシードル文化を創造していく。



### ②CRAZY DAYS WHITE DREAM EDITION (樽熟成していない透明なアップルブランデー)

昨年の講演で紹介した商品。現在流通が非常に伸び、青森空港や新青森駅では観光客だけでなく、出張者のお土産として購入されている。

### ③CRAZY DAYS GOLD DREAM EDITION プルドニエル・ポム・ド・イブ (瓶入りりんごブランデー)

今年1月、日本で初の量産化による販売を開始し、1週間で完売。33,000円という価格ながら需要が高く今年1,000本の仕込みを計画している。地域観光を支える青森県のギフトとしても秀逸である。

### ④CRAZY DAYS APPLE HIGH BALL (缶入りアップルハイボール) ※新規開発商品

アルコール度数7%のりんごの缶入りハイボールの全国展開を計画し「まず知ってもらおう」ための戦略商品として開発。裏ラベルに青森県産りんごと書いてあるだけで、着色料や香料を一切使用していない。先週試飲会で訪問した香港にもハイボール文化が根付いており、海外での手応えを感じたと語っていた。

### ⑤もり桜カリオペ (VTuberとのコラボレーション商品)

「ホロライブ」というVTuberとのコラボで、桜の花びらが入ったりキュールを開発。330mlで8,800円と高価格ながら、台湾に1,000個出荷。VTuberは世界を舞台に活動しており「日本は1億2,000万人だが世界は80億人で80倍のマーケット。その中でも特にこういったVTuber圏が活発なのは豊かな北米や中国・台湾など」と語り、委託事業で経験値を蓄積している。

#### (4) 経営戦略と成長計画

##### ①投資と効率化

2年間で2億円の資金を調達し、イタリア製のリンゴ搾汁機、スロベニア製の2,000Lタンク6基、フランス製フレンチオーク樽100基(225L)を導入。今後、ものづくり補助金の申請により、缶の充填機や炭酸ガス設備の導入も計画、製造能力の向上と人件費の抑制による高利益体質を目指す。

加工用りんごの価格が過去4年の1,000円/箱から4,000円/箱に高騰しているが「価格には転嫁させたくない」という方針。機械化を進め、将来的には価格を下げて地元の人にも気軽に買ってもらえる商品に育てたいと考えている。

##### ②ブランデーの熟成と競争力

サントリーの「山崎」や「白州」のように、多様なバリエーションの原酒(ミズナラ、オーク、栗の木などの樽材、焼き時間、シェリー酒を仕込んだ樽など)を作り、ブレンドすることで最高のアップルブランデーを製造、世界コンペティションでの受賞を目指す。「ゴールドを取ると世界中から今度オンライン・オフライン問わず発注が入ってくる。本当に面白い」と述べ、2年後のゴールド実現を目標としている。

##### ③海外進出戦略

地方から海外マーケットを狙うベンチマーク企業として尊敬しているオカムラ食品工業株式会社の経営者とも縁を結び、勉強させてもらっている。国内市場は日本の人口減少が続くため、海外市場へ目を向ける。「青森県はその日本の中でもワースト2番目の人口減少の加速度で僕はその中で仕事している」と述べている。世界の人口はまだ数十年伸び、特にアジアは豊かになる。「もはや香港の人の方が東京の人より豊か」という香港での体験から、海外市場の可能性を実感した。温暖化は漁業だけでなく農業にも影響を与えており、持続可能な事業形態を考える必要があると考える。

円安は国内原料を使った商品を海外に輸出する際、有利に働く。「日本で製造された良質な車が世界に出たのはやはり円安の力。性能が良くて、しかもお得に買えるから」と同様の戦略を食品分野で展開する。

ターゲット国は、台湾、香港、シンガポール、マレーシアといった温暖なアジア諸国。これらの地域では青森りんごの認知度が高く、「高級なフルーツのひとつ」として認識されている。

日本からのシードルマーケットは470億円に対し、ブランデー輸出は2億9,000万円と非常に小さい市場だが、敢えてここに挑む。理由は、日本でアップルブランデーを作っている企業が少なく、競争相手が少ない(ブルーオーシャンである)こと、そして缶ハイボールを製造しウイスキー市場に参入することで市場を拡大できると考えている。日本だけでなくヨーロッパやアジアでも若者の低アルコール飲料の人気の高まっており、香港での試飲会では、缶入りハイボールが好評で手応えを得た。

350ml缶は軽量で流通に強い。瓶と比較して仕入れ値が半額以下であり、輸送コストも抑えられるため扱いやすくなる。国内の大手流通業者を介さず、八戸からコンテナやパレットで直接海外に輸送することにこだわる。これにより、価格転嫁や輸送コストの増加を抑え、価格を海外で適正に保つ。

##### ④新規製造工場と観光事業

第1工場を製造所として全面活用し、新たに資材置き場と樽貯蔵庫、そして「タップルूम(醸造所に併設された試飲・販売スペース)」を建設。タップルूमからは岩木山や夕日が臨め、りんご畑を臨むロケーションである。夜は宴会やパーティーも可能であり、日中はショップとして活用する。

「日本全国、またはアジア、世界にファンをいかに作るか」を目的として、工場見学ツアーをオンラインで予約可能にし、すでにじゃらんや楽天からの予約が入り始めている。シードルやブランデーの製造工程、青森のりんご産業150年の歴史、会社の未来像の展示を案内し、原酒の飲み比べ体験も提供する。

フランス・ドイツでの蒸留所巡りの経験から、地域経済への貢献を重視。工場見学を通じて地域に観光客を呼び込み、宿泊や飲食を促すことで、地域全体に経済効果をもたらし、地域からの応援を得やすくする。「金融機関もファンドも、地域の友達からもかなり熱い応援をいただいている。工場はそのためのツール」と述べた。

#### ⑤クラウドファンディングと広報戦略

1回目(2024年1月～)は2,100万円、2回目(2025年12月～)は2,200万円以上の支援を集めた。これにより金融機関からの間接融資だけでなく、直接の資金調達も実現。この1年で2億円程度の資金を動かした。

今年9月12日から3回目のクラウドファンディングを開始する。開始前からキャンプファイヤーのお気に入りランキングで上位を獲得しており、注目度の高さを示している。今回の目標は3,000万円、最終的には4,000万円を目指す。

「りんごのテーマパーク事業」と題した今回のクラウドファンディングの目的は「全国海外からたくさんの人を青森県に呼び寄せるために、ただの工場見学ではなく、りんご風呂の体験、レストランを予約するとりんごのコース料理を食べられるなど、とにかく全てにおいてりんごを感じられるような、温泉施設とりんご酒工場を合体させてテーマパークを作って人を呼び込む」と説明した。

クラウドファンディングは資金調達だけでなく「認知を取る。ファンを作る。テストマーケティング」など多様な目的で活用している。芸能人や平川市長など、産官学金、そして芸能界も巻き込んだ全力を尽くして地域を盛り上げるためのプロジェクトである。クラウドファンディングを実施することによって「現在5万人くらいにリーチされている」とリーチ力の広さを強調した。

### 3 座談会での質疑応答

#### (1) 缶入りアップルハイボールの販売計画

まず青森県内でテストマーケティング（ユニバーズ、道の駅などで販売）を行い、その後、来年春に大手卸売業者と連携し、全国展開を目指す。コンビニエンスストアでの販売は段階的に進める。今年12月頃には県内で購入可能になる見込みである。

#### (2) ノンアルコール飲料の可能性

アルコール度数0%の飲料も検討中。将来的には、糖度の低いりんごを使った度数2～3%の低アルコールシードルも開発したい考えがある。

#### (3) 缶入り商品の利益率

缶入りハイボールは360円で販売予定。利益率は約4割で、流通に乗せると1～2割程度になる見込み。「1割の利益で良いのでまずは皆に知ってもらい、その先の階段を登るように僕らの高利益率商品にシフトしてくれればそれで良い」と思っており、まずは認知度向上と顧客獲得を優先する戦略であると説明した。

#### (4) 大手企業によるM&Aの可能性について

「青森にこだわったりんご酒メーカー」という言葉が使えなくなるため「あえてそれはしない」と明確に回答。「人々は青森出身の経営者による青森の会社に成功して欲しいのであって、大手企業の傘下になったクレイジーサイダーには興味がない」と地元へのこだわりを強調した。

#### (5) りんご農業の課題と取り組み

青森県全体のりんご生産量の16～18%程度が加工用である。りんご農家や中間の協力者との関係構築によ



り、自社においてもおおむね量は足りていたが、8月は一時的に在庫が切れた。今年の収穫分に関しては不安定な天候のため、仕入れに苦労する可能性を懸念している。

加工用専門のりんご栽培は、生食用りんごとは異なる栽培方法（摘果しないなど）であり、既存の農家からは理解が得られにくい現状がある。しかし、「この地域にこれから必要なことは高密度栽培や僕らのような加工用専門のりんご栽培といった、多種多様な生産スタイルをこの地域に確立しないと青森のりんごが本当に沈んでいく」と、多様な栽培スタイルの確立の必要性を訴えた。

#### (6) りんごかすのアップサイクルへの取り組み

クラウドファンディングでボイラーを購入し、搾汁後のりんごかすを乾燥させ、アップサイクル業者へ廃棄物であるりんごかすを提供することを考えている。乾燥したりんごかすは家畜の餌や肥料、さらにレザーなどの素材として活用できるようになる。自社の温泉の廃熱（52℃の源泉）を活用して乾燥させることで、CO<sub>2</sub>排出量も抑えた弊社らしい循環システムを構築したい。

#### (7) 教育現場への期待

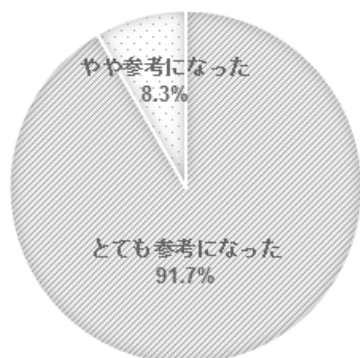
水口氏の講演が教科書通りの内容だけでなく、実際の経営者の生の声として生徒の学習意欲向上に繋がっているとの感謝の言葉が述べられた。特に、青森にこのようなチャレンジングな企業があることを高校生に広め、青森に雇用を作る意欲のある企業として認知度を高めることへの期待が示された。

教師からの「忘年会シーズンに、青森県限定で他地域に先駆けて新商品を販売し、SNSで盛り上げる」という提案に対し、水口氏も「面白い」と前向きな姿勢を示した。

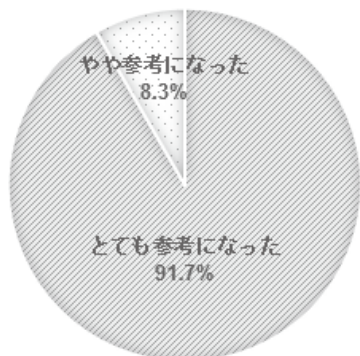
## 4 まとめ

### (1) 分科会終了後のアンケートから

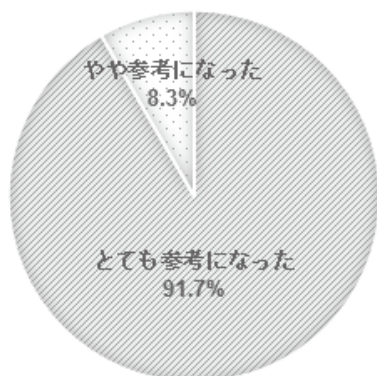
①今回の講演会は、今後の教科指導の参考になったか。



②座談会で直接ご質問等ができる機会は、今後の教科指導の参考になったか。



③高教研分科会での教員対象研修会実施は参加しやすかったか。



④その他（文章記述による回答）

- ・ビジネスのリアルな部分を聞くことができ、授業での事例として県内企業を話すことができる。青森県で活躍できることを気づかせることができると思う。
  - ・貴重なお話をお聞きすることができて非常に有意義であった。青森県には世界に誇れる企業や商品がたくさんある。子どもたちの学びに活かす材料やヒントがたくさんあった。
  - ・来年も同様の講師でいいのではないか。課題研究に繋がるような協力が得られれば良いと思う。
  - ・人口の減少する青森県で勝負する熱意と意欲、またそのための準備、行動力を学んだ。
  - ・青森県内から世界を目指して取り組んでいる企業の実態を知る機会となり、有意義な講演会であった。
  - ・今回は前回からの事業報告ということで、今後の展望のお話中心だったが、事業を展開していく上で、どのようなマーケティングをしていたか知りたいと思った。それが授業教材になるのではと考える。
- といった意見があげられ、本研究委員会の目的に合致する有意義な時間であった。

(2)終わりに

水口氏の講演は、青森県という地域に根ざしながらも、グローバルな視点と革新的なアイデアで事業を展開する情熱に満ちた内容であった。人口減少、温暖化といった地域や社会の課題を直視し、それを乗り越えるための具体的な戦略と行動力が示された。特に、自社の成長が地域経済の活性化やUターン人材の創出に繋がるという強い信念が印象的であった。今後のタグボート株式会社の発展と、それが青森県にもたらす好循環に期待が寄せられる。

【会計分野研究委員会】

第2分科会 「最新会計基準から視える重要なカギ」

講師	東京CPA会計学院		山内	樹
司会者	青森県立弘前実業高等学校	教諭	小中	喜貴
記録者	青森県立青森商業高等学校	教諭	吉岡	香織
	青森県立青森商業高等学校	教諭	棟方	明日香

1 はじめに

2023年12月5日にOECD（経済協力開発機構）から生徒の学習到達度調査2022年調査（PIISA 2022）の結果が公表された。このPIISA調査とは、義務教育終了段階の15歳の生徒が持っている知識や技能を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測ることを目的とした調査で、OECDがおおむね3年ごとに実施している。2022年調査には、81の国・地域から約69万人が参加し、日本からは183校、約6000人の高校1年生が調査の対象となった。この調査は2022年6月から8月までの期間に実施された。主な調査分野は、数学的に推論し、数学的な概念、手順、事実、ツールを使って、事象を記述、説明、予測する能力である「数学的リテラシー」、現象を科学的に説明し、科学的探究を評価・計画し、データと証拠を科学的に解釈する能力である「科学的リテラシー」、情報を探し出し、理解し、評価・熟考する能力である「読解力」の3分野である。

前回の調査であるPIISA2018では、日本は、「数学的リテラシー」1位（OECD加盟国37カ国の順位、以下同じ）、「科学的リテラシー」2位、「読解力」11位と、「読解力」に関しては、課題を多く抱えている結果となった。そこで、文部科学省は基礎的な言語能力の向上を目指した動きになり、各地域や学校でさまざまな取り組みが行われた。その結果、今回のPIISA2022では、日本は、「数学的リテラシー」1位、「科学的リテラシー」1位、「読解力」2位と、「読解力」が大幅に向上した結果となった。

しかし、この調査結果とは逆に別の課題が浮き彫りになったようだ。その2つをここで紹介する。まず、一つ目は「動機付け」についてである。生徒が学習するにあたって、指導者の生徒に対する動機付けは非常に重要である。この動機付けがうまく成功すれば、各自の学習は進み、良いパフォーマンスが発揮される。逆に、動機付けが失敗に終わると、生徒も学習意欲が低下し嫌々ながら学習を余儀なくされ、パフォーマンスは上がらないままになってしまう。場合によっては、この科目は嫌い、授業を受けてもわからないから出たくないなど負の感情が先行し、不登校につながるケースも考えられる。それぐらい指導者にとっては、この「動機付け」には神経を遣うことと思う。この「動機付け」には、「道具的動機付け」と「内発的動機付け」がある。前者は、「教科学習が将来に役立つと考えられることによる学習意欲」であり、後者は、「教科の学習自体が楽しいという学習意欲」である。この後者の動機付けについて、日本は、OECD平均よりもかなり低い結果となってしまった。また、自律学習（指導者の指導によって学習するのではなく、自らが自分のネジをまいて学習すること）の意識もOECD加盟国の37カ国中34位という結果になった。

このように良い結果がある反面、教育における大切な「動機付け」や「自律学習」については、課題を残す結果となっている。改めて、会計指導者である我々は、複式簿記会計に内在する魅力を考える必要性を感じている。

## 2 「具体」と「抽象」

私なりに複式簿記会計に内在する数ある魅力の一つを紹介させて頂く。それは、「具体」と「抽象」だと思う。複式簿記会計を支える5つの要素のうち資産・負債・資本は具体概念、収益・費用は抽象概念だ。複式簿記会計は、この2つの概念を常に念頭に置かなければ、取引を記録することができない。しかも、このうち可視化できないものは、抽象概念だ。複式簿記会計を使って記録計算するということは、常に可視化できない抽象概念も意識しなければならない。そこに魅力を感じている。この具体と抽象が我々の生活でも様々な局面で役に立つ。

例えば、指示した側が「あれ？言ったことが伝わってないな」と思う時は、指示された側は「もっとアドバイス欲しいな」と思っている。このような状態はコミュニケーションギャップが起きている。この場合、指示した側の指示の出し方は「抽象」であり、指示された側は「具体」を期待している。指示と期待に齟齬が生じている。この他に指示した側が「もう少し考えて成果を上げて欲しいな」と思う時は、指示された側は「ひとつひとつの指示が細かいな」と思っている。この状態もまた、コミュニケーションギャップが生じている。この場合、指示した側の指示の出し方は「具体」であり、指示された側は「抽象」を期待している。やはりここも同様に齟齬が生じている。

まとめると、期待が「具体」であればあるほど、指示も「具体」で行い、期待が「抽象」であればあるほど指示も「抽象」で行えば、コミュニケーション障害は取り除ける。では、期待と指示の「具体」レベル又は「抽象」レベルが一致すれば良いのだろうか。それは、違う。指示も期待も「具体」であればあるほど、失敗は少ないものの新しい革新的なアイデアは生まれにくい。なぜなら、指示も「具体」で期待も「具体」であれば、指示された側は言われたことしか行動にうつさず、それ以上の頭を使わないからだ。これに対して指示も期待も「抽象」であればあるほど、失敗のリスクが大きい反面、画期的なアイデアが生まれる可能性も高い。なぜなら、指示された側は「抽象」なので、大きな枠の中で具体的に考えて行動しようとするためだ。リスクを最小限に抑えたい局面なら、「具体」×「具体」で、リスクをとり革新的な変化を求める局面なら、「抽象」×「抽象」の組合せが理想だと思う。まず、指示する側は期待側の抽象度または具体度を適切に図り、それに合わせた指示を行うとコミュニケーションギャップを抑止でき、さらに、行動結果（産物）の質に応じて、「具体」か「抽象」の組合せを使用することが理想である。

このように、複式簿記会計で自然と利用している「具体」と「抽象」の発想をうまく活用すると、普段の生活で円滑なコミュニケーションを図ることができる。これもまた、複式簿記会計が備えている魅力ではないだろうか。

## 3 リース基準の変遷

1993年に公表された「リース取引に係る会計基準」は、まず、リース取引をファイナンス・リース取引（F/L）とオペレーティング・リース取引（O/L）に分類する。前者をさらに所有権移転F/Lと所有権移転外F/Lに分類し、所有権移転F/Lは売買処理（資産と負債が両建てされる会計処理）、所有権移転外F/Lは原則：売買処理、例外：賃貸借処理（リース料の支出時に支出額を費用処理）、後者は賃貸借処理を行う。当時の会計基準のポイントは、所有権移転外F/Lに例外処理が存在したことだった。

しかし、当時の会計基準の所有権移転外F/Lに例外処理が認められていたことについて、以下の問題意識があった。

- (1) 会計上の情報開示の観点からは、ファイナンス・リース取引については、借手において資産及び負債を認識する必要性があり、特に、いわゆるレンタルと異なり、使用の有無にかかわらず借手はリース料の支払義務を負い、キャッシュ・フローは固定されているため、借手は債務を計上すべきである。
- (2) 本来、代替的な処理が認められるのは、異なった経済的実態に異なる会計処理を適用することで、

事実をより適切に伝えられる場合であるが、例外処理がほぼすべてを占める現状は、会計基準の趣旨を否定するような特異な状況であり、早急に是正される必要がある。

したがって、その問題を解決するためにも、1993年に公表された会計基準を一部変更するかたちで2007年に「リース取引に関する会計基準」を公表した。この基準にF/Lはすべて売買処理することになった。新たな会計基準を公表したが、国際的な会計基準はO/Lを売買処理する基準となっており、我が国の会計基準と国際的な会計基準とでは溝がありながらも会計実務はすすんでいた。

今回、この溝をうめる（比較可能性を確保）するために、既存のリースの会計基準の一部改正というかたちではなく、新たに「リースに関する会計基準」を2024年に公表した。特に借手において重要な変更を3つのポイント（リース定義の拡大、リース期間の定義変更、すべてのリースをオンバランス化）にしぼって説明する。もちろん、この他にもリース契約締結後の事後的な契約の見直しがあった場合のルール化もある。

#### 4 リース定義拡大

新基準では、リースの定義を「特定された資産の使用を支配する権利を一定の期間にわたり、対価と交換に移転する契約または契約の一部」としている。これまではリース取引がリース会計基準の対象だったが、この定義変更により、リース取引はもちろん、賃貸借契約もリースに該当し、新基準が適用されることになった。以下、具体的にリースの定義のポイントを説明する。

まず、「特定された資産」というところである。これに該当する条件は(1)対象の資産が契約で特定できること、(2)貸手の都合で資産の入替えができないことである。駐車場を例にとるとわかりやすい。例えば、駐車場の賃貸借契約を締結したとする。ここで、駐車場のオーナーから駐車場の区画番号が付与され、オーナーの都合で変更できないとする。この場合は、借手は使用する物件の特定ができることになるため、双方の条件を充足していることになる。これに対して、オーナーから空いている駐車場ならどこでも駐車可能であり、場合によってオーナーの都合で変更ができるとする。この場合は借手が使用する物件が特定できないことになるため、双方の条件を充足していないことになる。

次に「使用を支配する権利」についてである。これは、借手が特定された資産について何ら制約を受けることなく自由に使用し、当該資産から得られる経済的利益を享受する権利を指す。例えば、ガスタンクに入っているガスを使用する賃貸借契約を締結したとする。このガスタンクのうち99.9%を借手が使用できる状態だと、当該資産を独占的に使用でき、キャッシュを獲得できるため、使用を支配する権利を得ていることになる。これに対して、ガスタンクのうち70%を借手が使用でき、残りの30%を別の借手が使用する場合は、借手が当該資産を独占的に使用できず、別の借手の影響を受けるため、使用を支配する権利を得ていることにはならない。ポイントは、借りる資産を独占的に使用する権利を得たかどうかになる。

このように、リースの定義が新たになったことをうけ、これまで、通常の賃貸借契約、ネットワークサービス契約、造委託契約、倉庫保管サービス、物流委託契約、電力供給契約、エネルギー供給契約、使用許可申請などのリース契約になっていない取引がリースに該当し、新基準の適用になる可能性が大いにあることに注意が必要だ。隠れリースを見つけていくことが実務上、大きな課題となりそうである。

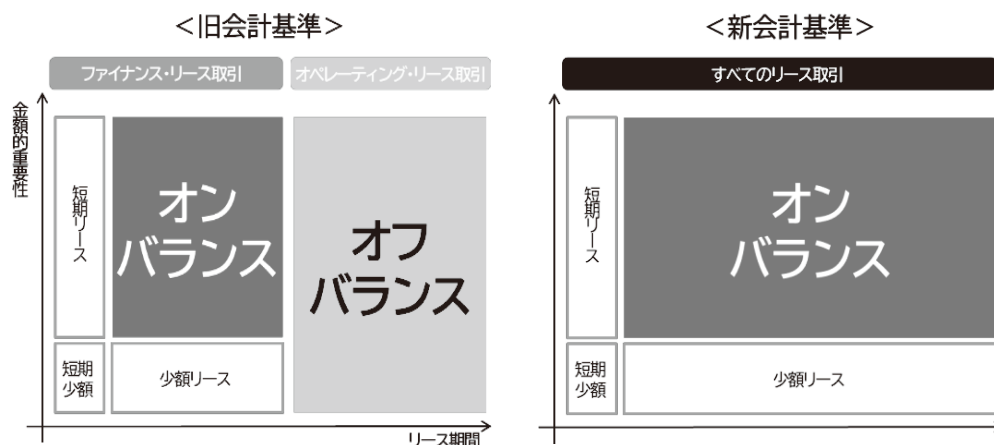
#### 5 リース期間の変更

これまでリース期間は、リース契約の解約不能期間とされていた。新基準では、リース期間を「借手が原資産を使用する権利を有する解約不能期間に(1)借手が行使することが合理的に確実であるリースの延長オプションの対象期間と(2)借手が行使しないことが合理的に確実であるリースの解約オプションの対象期間を加えた期間」と定義している。例えば、契約期間が1年6ヶ月で、1年経過すると解約できるオ

プションと契約終了後に1年延長できるオプションがついている場合を考えてみたいと思う。仮に借手が解約オプションを確実に行使しない、延長オプションを確実に行使する場合、これまでの基準を適用すると、リース期間は解約不能の1年間であるが、新基準を適用するとリース期間は2年6ヶ月となる。このリース期間は後の資産の配分時に重要な要素となってくるので、期間決定の際は、十分に注意が必要である。

## 6 オンバランス化

これまでオンバランスがどのような変化をしたかは、以下の図のとおりである。

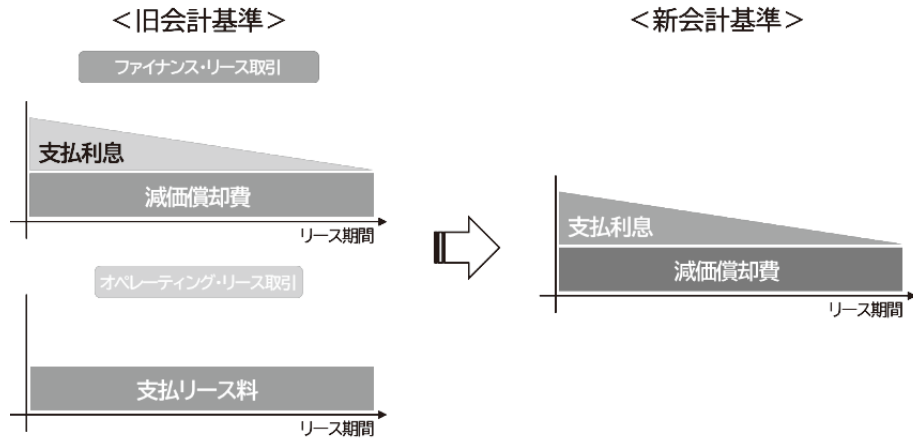


上図のように、大きく変更されたところは、リースに該当する取引を借手は、F/LとO/Lに区別せず、使用する権利の支配が移転していれば、すべて売買処理がされ、オンバランス化されることになった。つまり、これまでオフバランス化されていたO/Lも売買処理がされるということである。

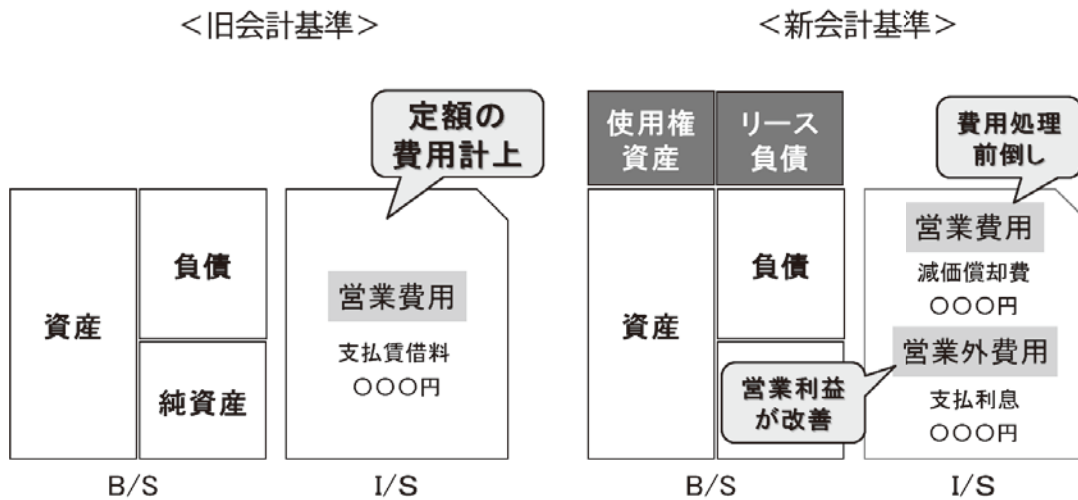
具体的な会計処理をみってみる。賃借料毎年100、賃貸期間3年、息相当額60（1年目30、2年目20、3年目10）の契約を締結したとする。資産の配分方法は便宜上、定額法とする。当該取引がリースに該当する場合は、これまで賃貸借処理されていたケースも売買処理されることになる。

▼契約時			
(借) 使用权資産	240	(貸) リース負債	240
▼リース料支払時			
(借) 支払利息	30	(貸) 現金	100
(借) リース負債	70		
▼決算日			
(借) 減価償却費	80	(貸) 使用权資産	80

上記のように、これまで賃借料100を支払った時点で支出額を費用として100を計上してきたが、新基準では費用総額が110となり、費用の前倒しの現象がおきることになる。契約期間全体でみると費用の総額は変わらないが、下記の図のように契約初期では、これまでと比べて費用が多額に計上されることになる。



まとめると以下のようなになる。



加えて、勘定（表示）科目の変更も以下にまとめておく。

リース資産→使用権資産、リース債務→リース負債に変更され、支払リース料は使用されなくなる。また、貸手のリース投資資産とリース債権については、新基準に代わっても貸手側は、従来通り、リース取引をF/LとO/Lに分類し、所有権移転と所有権移転外とに区別するため、引き続き当該勘定科目は使用することになる。

表示方法については、これまでの基準では、「リース資産については、原則として、有形固定資産、無形固定資産の別に、一括してリース資産として表示する。ただし、有形固定資産又は無形固定資産に属する各科目に含めることもできる」と規定されていた。新基準では、この原則と例外の規定が撤廃され、(1)対応する原資産を自ら所有していたと仮定した場合に表示するであろう科目に含める方法か(2)対応する原資産の表示区分において使用権資産として区分する方法のいずれかで表示することになった。表示科目に変更はあるものの、表示の仕方については大きな変更はない。

## 7 オンバランス化による影響

これまでみてきたように、リースに該当する契約が拡大し、資産と負債を両建てする売買処理の範囲が拡大することにより、実務上、さまざま業界が影響を受けることになる。特に、資産を購入するのではなく、賃貸借契約により貸手から同資産を借りている場合が特に大きな影響を受けることになる。

小売業の場合は、賃借不動産の資産化でバランスシートが急拡大することになる。ドラッグストアやスーパーなどはチェーン展開している企業が多く、賃貸物件に数多く出店しているケースが一般的だからで

ある。そうした状況に危機感を覚え、影響の分析に取り組み始めている企業もあるようだ。

運輸業の場合は、高額資産を一括負債計上することで自己資本比率が急低下する。航空会社が使用する旅客機は自社保有とリースの2種類あるが、1機あたりの金額が高額であるため、リースをした場合は、資本効率を高めるためにO/Lが活用されてきた。しかし、これが新基準では資産として計上されるため、自己資本比率が大幅に低下する可能性がある。これは船舶を使って荷物を運ぶ海運も空運と同じような状況である。この問題を解決するためには、増資をはじめとする新たな資金調達が必要となっていく。

不動産業の場合は、新規契約増にもかかわらず減益になる可能性がある。例えば、サブリース事業を行っている企業は、旧基準では、受取家賃から支払家賃を差し引いて利益が一定になっていたが、新基準ではこれまでみてきたように費用の「前加重」となり、損益計算書に大きな影響を及ぼす。つまり、サブリース事業に関しては、会計のルールが利益の実態を歪め、真の実力を表さなくなってしまう。何のための会計のルールなのだろうか。

物流・倉庫業の場合は、通常の業務委託契約では業務委託費でまとめられており、倉庫の賃料や設備の利用料、人件費といった細かい内訳については示されていないが、新基準ではこうした細かい内容について精査し、資産に計上するか否かを判断しなければならず、膨大な時間が必要となる。

このように、新基準は幅広い業界にインパクトを与えるのみならず、一部においては企業実態を適切に表さないという問題も含んでいる。

## 8 おわりに

新リース基準は、「資産を使用する権利に対する支配の移転」に着目した使用权モデルに基づいた会計基準である。新基準の適用により、リースに関しては、国際的な会計基準と遜色のない状態になった。これにより国内外の比較可能性が確保されることになる。現在の会計基準全体を俯瞰すると、リースの新基準、企業結合基準、連結基準、金融商品基準なども「支配」という概念をベースに様々な基準が整備され、基準同士の矛盾がなく首尾一貫した体制になりつつある。今後も「支配」を中心とした会計基準の整備がされていくと考えられる。指導者たるものは、時代とともに変化する会計ルールについても常にブラッシュアップしていく必要がある。

【ビジネス情報分野研究委員会】

第3分科会 「生成 AI を活用した授業づくり ～ AI 時代を主体的に生き抜く生徒の育成～」

講師	ITラボ株式会社	代表取締役	新山 則和
司会者	青森県立三沢商業高等学校	教諭	附田 真菜
記録者	青森県立青森商業高等学校	教諭	布施 正太郎

1 はじめに

事前アンケートの結果、こんなにも使っている方がいるとは思っていなかった。私は小学校の先生や中学校の先生ともやりとりさせてもらっていますが、ほとんど使っていない印象があった。初心者の基本的な話からスタートしようかなと思っていたが、今回のアンケートの結果から必要ないと思った。実際に生成 AI を活用する部分を中心に、また近くの先生とワークショップのような活動もできればと思う。

2 生成 AI の概要と活用事例

アンケート結果によると、最も多く使われている生成 AI は「ChatGPT」であった。次に多かったのが、Microsoft 社の「Copilot」である。多くの先生方が Windows 環境で作業されていると思われるが、Mac を使っている方もいるかもしれない。Excel などの Office 製品は業務でも使われているため、今日はそのあたりを中心に操作していただく予定である。

授業において、生徒を育てることが目的であるのは言うまでもないが、その「育てる」ということは、単に知識を教えるだけでなく、社会で通用する力を身につけさせることでもある。

現在、企業の多くではセキュリティが非常に厳しくなっている。Microsoft 製品を中心に使っている企業では Teams が主流であり、Google 系のサービスを使っている企業では Google Meet や Google Chat が使われている。つまり、企業によって使えるツールが異なっており、生成 AI の導入にも制限がある。

生成 AI についても、すべての種類を自由に使える企業はほとんど存在しない。多くの企業では、特定の生成 AI ツールに絞って活用しているのが現状である。個人利用であれば、画像生成にはこの生成 AI、文章にはあの生成 AI というように使い分けができるが、企業ではセキュリティや運用ルールの関係でそうはいかない。

まずは、生成 AI の基礎知識について簡単に触れておく。代表的なものとしては、ChatGPT などがある。ChatGPT は自然な会話を通じて情報を引き出すことが得意であり、例えば保護者向けの Q&A を作成する際にも活用できる。想定される質問に対して、問題のない回答例を生成し、それをベースに自分たちの学校に合わせて修正することで、業務の効率化が図れる。

業務の効率化は、企業でも教育現場でも重要な課題である。先生方も授業以外の業務に追われることが多く、そうした部分を生成 AI で補うことができれば、負担軽減につながる。

GitHub Copilot についても触れておく。これはプログラミングに特化した生成 AI であり、GitHub 上でコードを生成し、実行・修正することができる。業界ではすでに広く使われており、特に本格的なプログラマーにとっては非常に有用なツールである。

ただし、初心者がいきなり GitHub Copilot を使ってプログラムを作成するのは難しい。教育現場では、より簡単なツールを使って、まずは生成 AI によるコード生成を体験することが重要である。

生成 AI は、日々進化を続けており、ブラッシュアップされながら、より現実的な活用が可能になってきている。後ほど、実際に体感してもらう予定である。

最近では、画像に特化した生成 AI、動画に特化した生成 AI など、専門性の高い生成 AI が登場している。基本的には、生成 AI は「テキスト」「画像」「音声」「動画」の 4 つの形式が柱となっており、これらが主な分類とされている。

生成 AI ごとに得意分野が異なるため、本来は用途に応じて使い分けるべきだが、セキュリティの制約などにより、現場では自由に選べないケースも多い。現時点で、すべての形式に対応できる万能な生成 AI は

存在していない。したがって、目的に応じて、特化型の生成 AI を選んで活用するのが現実的な方法である。

教育現場における生成 AI の可能性として、授業の作成やプランニング、質問例の作成、テスト問題のベース作成などが挙げられる。これらは、実際に活用している先生もいるだろう。

テスト問題の作成には時間がかかる。毎回、完全に新しい問題を考えるのは現実的ではなく、多くの先生が過去の問題や全国模試の問題を参考にしている。参考資料を自分で探し、時間をかけて作成することが「良いこと」とされてきたが、時代の流れとしては効率化が求められている。

生成 AI を使って「盗用する」のではなく、効率よく問題を探し、そこから生徒の学習内容やレベルに合わせて調整することが重要である。これにより、作業時間を短縮できる。

企業でも、ビジネス文書の作成に生成 AI を活用することがある。文書作成を苦手とする社員に対して、上司が「文書を作って」と指示を出すのが、質の低い文書が出てくるともある。その際、「ビジネス文書の本を読み」と言われるが、生成 AI の活用は否定される傾向がある。しかし、書籍を読むことが許されるなら、生成 AI を使うことも許されるべきである。教育現場でも同様で、テスト問題の作成に過去の資料を参考にすることは一般的である。生成 AI は、その参考資料を効率よく探す手段として活用できる。

また、事務作業の自動化にも生成 AI は有効である。例えば、会議の議事録作成では、音声を録音し、それを文字起こしして要約する作業がある。Google の音声認識を使えば、かなり精度の高い文字起こしが可能であり、生成 AI を使えば、無駄な会話を省いて、指定したページ数で要約することもできる。これにより、議事録の作成時間が大幅に短縮され、起こし忘れも防げる。

生徒に対しては、効率化だけを伝えるのではなく、生成 AI を活用した上で、自分で考える時間や修正する時間を確保することが重要である。これにより、生成 AI が学習能力を下げるという懸念は払拭される。

文章作成能力についても、幼稚園から高校まで、何らかの参考資料をもとに学んできたはずである。人間は見聞きした情報を脳内に蓄積し、それを活用して文章を作成する。生成 AI は、そのプロセスを少しだけ手助けする存在である。

企業では、時間をかけすぎると怒られることもあり、効率化が重要視される。教育現場でも、個別学習支援に生成 AI を活用することで、生徒一人ひとりの理解度に合わせた指導が可能になる。これまでは教員の経験に頼っていた部分を、生成 AI が補完することで、より精度の高い個別指導が実現できる。

創造的活動の支援として、プログラミング学習や研究プロジェクトにも生成 AI は有効である。プログラミングは言語であり、考えたことを言葉としてアウトプットする作業である。人間が理解できるように指示を出す必要があるが、生成 AI を使えば、プログラムの解説も細かく行ってくれる。

例えば、素数判定のプログラムを生成 AI に作成させ、その解説を見ながら学ぶことで、プログラムの構造を理解できる。より高度なミラーラビン法なども、生成 AI がわかりやすく説明してくれる。高校では専門学校ほど時間をかけられないため、効率的な学習が求められる。

生成 AI との対話を繰り返すことで、最終的に完成したプログラムが得られる。その過程を生徒に体験させると、どの部分が誤っていたのか、どこを修正すればよかったのかが明確になる。修正後に再実行し、問題が解決されたとき、生徒は「こういう部分が想定されるのだ」と理解できるようになる。

通常であれば、プログラムの構造を一から設計し、試行錯誤を繰り返す必要があるが、生成 AI との対話を通じて、画面上で短時間にそのプロセスを体験できる。これは非常に効率的であり、限られた授業時間の中で有効な手段である。

生成 AI はツールであり、道具である。適切に活用することで、対人教育の補助として機能する。触れてみることで、新たな気づきや発想が生まれる可能性がある。

では、実際に生成 AI を体験してもらいたい。Windows には初期状態でプログラムが搭載されており、アプリケーションを起動することで利用可能である。また、Google Chrome などのブラウザを使っても、生成 AI にアクセスできる。

Microsoft 社の Excel や Word にも Copilot が搭載されており、学校の PC 環境でも利用可能な場合が多い。Excel のセルに入力することで、生成 AI を活用した処理も可能である。

今回は、素数を判別するプログラムを作成する。「素数を判別するプログラムを作成してください」と生成 AI に入力するだけで、Python での実行プログラムが表示される。表示されたプログラムには、ポイント解説も付いており、なぜそのような構造になっているのかが理解できる。

本来、授業では一行ずつ解説しながら統合していくが、生成 AI を使えば、完成されたプログラムを先に提示し、それを分解・解説することで、理解を深めることができる。さらに、「このプログラムの解説をしてください」と入力すれば、詳細な説明が得られる。

例えば、より高度な素数判定法として「ミラーラビン法」がある。生成 AI に「ミラーラビン法で作成してください」と指示すれば、概要とともにプログラムが提示される。

このように、同じ素数判定でも、手法によって構造が大きく異なることがわかる。

このような違いを生徒が理解するには、まず完成されたプログラムを見てから考える方が効果的である。ゼロから書かせるよりも、既存のコードを解析・修正させる方が、全体像を把握しやすく、学習効果も高い。

実際、企業でも新人に対しては、ゼロからプログラムを書かせるのではなく、既存のコードを解析・修正させることでスキルを育てている。高校では専門学校のように時間をかけられないため、効率的な学習が求められる。

プログラムには正解が一つではなく、書き方も人によって異なる。生成 AI はその違いを提示し、比較・検討する材料を提供してくれる。これにより、生徒は「なぜこのような書き方になるのか」「どうすればより良くなるのか」を考えることができる。

次に、資料作成の実践として「青森県の農業における課題と解決策」についてレポートを作成する。生成 AI に「青森県の農業における課題と解決策についてレポート形式で作成してください」と入力することで、現状や課題が整理された情報が得られる。

この情報をもとに、授業では「調べる」「当てはめる」「考える」というサイクルを構築できる。レポート作成の目的は、単に文章をまとめることではなく、課題を発見し、解決策を考える力を育てることである。

さらに、「青森県のリンゴの生産状況を追加してください」と指示すれば、より具体的なデータが提示される。ここで重要なのは、生成 AI が提示するデータをそのまま信じるのではなく、必ず検証することである。

19 8月

素数を判別するプログラムを作成してください。

AI により生成

素数を判別するプログラムは、任意の整数が素数かどうかをチェックするものです。以下は、Python で書かれたシンプルな例です。

生成されたコード >

このプログラムのポイント：

- 2 は素数なので特別扱い。
- 偶数は 2 以外すべて素数ではない。
- 3 以上の奇数については、平方根までの奇数で割り切れるかをチェック。

もし他の言語 (例：JavaScript, C, Java など) での実装が必要でしたら、お知らせください。また、GUI 付きや複数の数を一括判定するバージョンなども作成できます。どうでしょうか？

参考資料    

このプログラムの解説をしてください。

AI により生成

この Python プログラムは、与えられた整数が素数かどうかを判定するものです。以下に、各部分の詳しい解説をします。

関数定義：is\_prime(n)

生成されたコード >

- n は判定対象の整数です。
- この関数は、n が素数なら True、そうでなければ False を返します。

素数の定義に基づく条件分岐

生成されたコード >

- 1 以下の数 (0, 1, 負の数) は素数ではないので、False を返します。

生成されたコード >

特に数値に関しては、「何年度のデータか」「出典はどこか」を確認する必要がある。生成 AI は平均値や推定値を提示することがあるため、授業ではそのデータを生徒に検証させることが重要である。

企業でも、生成 AI を使って提案書やプレゼン資料を作成することが増えているが、数値のチェックには非常に多くの時間をかけている。これは、信頼性のある資料を作成するために欠かせないプロセスである。最近、職場のスタッフ同士が休憩中に雑談をしていた。その中で「誰に相談しようか」という話になり、最年少のスタッフ（21 歳）が「友達に聞こう」と言って ChatGPT に質問した。結果、総理大臣の名前が間違っていた。これは、ChatGPT の学習データが 2023 年までで止まっていたためである。アップデートがされていなかったため、古い情報が返ってきた。

このように、生成 AI はパターンや手順を取り込むのは得意だが、具体的な内容、特に数値や固有

名詞については疑ってかかる必要がある。疑うからこそ調べる必要が生まれ、調べることで学習につながる。このプロセスこそが、生成 AI を教育に活用する上で最も重要なポイントである。

次に、生成 AI を活用する際の懸念事項やリスクについて触れる。最も多く挙げられるのがプライバシーの問題である。生徒や教員の個人情報、意図しない形で漏洩する可能性がある。これは「絶対にない」とは言えないため、十分な注意が必要である。

例えば、入力する際には個人情報を含めないようにすることが重要だ。私自身は、ChatGPT と Copilot に登録している名前をそれぞれ別名にしている。法人利用の場合は、個人情報に紐づかないように工夫している。生徒に利用させる場合も、専用のメールアドレスを発行するなどの対策が有効である。完璧に防ぐ

青森県の農業における課題と解決策についてのレポート構成を作成してください。

AI により生成

以下は、青森県の農業における課題とその解決策についてのレポート構成案です。最新の県の施策や研究成果を踏まえて、体系的にまとめています。

## レポート構成案：「青森県の農業における課題と解決策」

### 1. はじめに

- 青森県の農業の重要性（地域経済・食料供給・環境保全）
- レポートの目的と構成概要

### 2. 青森県農業の現状

- 主な農産物（りんご、にんにく、なごいも、水稲など）
- 農業産出額と全国順位
- 地域ごとの特色（津軽・南部・下北など）

### 3. 農業における主な課題

- #### 3.1 担い手不足・高齢化
- 若年層の農業離れ

### 4. 解決策と取り組み

#### 4.1 スマート農業・農業 DX の推進

- ICT・AI・ロボット技術の導入支援
- トヨタ式「現場カイゼン」手法の活用
- デジタルリテラシー向上の研修

#### 4.2 担い手育成と人材確保

- 若者・企業の農業参入支援
- 地域農業振興計画による人材戦略

#### 4.3 品目別プロジェクトによる収益力強化

- 「青森りんご」次世代継承プロジェクト
- 「にんにく」「なごいも」など儲かる産地づくり

### 5. 今後の展望と提言

- 地域ごとの課題に応じた柔軟な政策設計
- 若者・女性・多様な人材の活躍促進
- 持続可能な農業のための教育・研究の強化

### 6. まとめ

- 青森県農業の課題は多岐にわたるが、県の施策と地域の連携により解決の糸口が見えてきている。
- 今後も地域資源を活かした農業の発展が期待される。

この構成をもとに、具体的なレポート本文の執筆も可能です。必要であれば、図表の作成や PowerPoint 資料化もお手伝いできます。どう進めましょうか？

3 件の参照

方法は現時点では存在しないため、「気をつけるしかない」というのが現実である。

著作権についても注意が必要だ。教育目的であれば、通常の著作権の扱いとは異なる場合もあるが、事実と異なる情報が提示される可能性があることを前提に使うべきである。生成 AI の出力結果は、まず疑ってかかるべきであり、特に数値は必ず検証する必要がある。

また、公平性の観点も重要である。生成 AI を活用して効率よく成果を出す生徒と、ゼロから努力して成果を出す生徒の間で、評価のバランスをどう取るかは教育現場の課題である。どちらの生徒も適切に評価されるよう、教員が意識して対応する必要がある。

セキュリティクラウドを通じて様々なサービスにアクセスしているため、環境面の配慮も必要である。生成 AI は、入力された内容を学習する仕組みを持っているため、同じ質問を繰り返すと、回答の質が低下することがある。一般的には、10～15 回のやり取りを目安に一度会話を切り、新たに質問を始める方が良いとされている。

Copilot や ChatGPT などの設定画面では、「やり取りを学習データに含めない」という項目がある。これを有効にすることで、誤った情報が学習されるリスクを減らすことができる。授業で使用する際には、こうした設定を確認しておくことが望ましい。

佐賀県の高校では、Copilot を活用して Python のプログラミング授業を行っている。普通科 1 年生を対象に、Surface と Copilot を用いて 3D ゲームのプログラミング学習を実施している。教師が直接教えるのではなく、生徒が Copilot と対話しながら問題解決を行う形式である。生徒は、生成されたプログラムを見て「どこを修正すればよいか」を生成 AI とやり取りしながら理解を深めている。

六ヶ所高等学校では、「教科・地域・ICT でつながる深まる授業の創造」というテーマで、国語科・公民科・外国語科・芸術科において、Google スプレッドシートを活用した情報整理やグループ検討を行っている。2023 年 11 月に発表された事例であり、今後同様の取り組みを再現する際には、生成 AI によるデータ分類が活用される可能性が高い。

このように、既存の学習テーマに生成 AI を組み込むことで、従来とは異なる視点からのアプローチが可能になる。生徒の表現力や発想力を引き出す新たな手段として、生成 AI は有効である。

長崎北高校では、英語の授業で生成 AI を活用し、スピーチ原稿の作成を行っている。また、仕訳練習問題の自動生成にも活用されており、マーケティング分野では、仮想データを用いた経済効果のシミュレーションなども行われている。

生成 AI の活用は、単なる効率化にとどまらず、生徒の思考力や創造力を育てるための有力な手段となり得る。今後の教育現場において、どのように取り入れていくかが重要な課題である。

生成 AI は、データ分析に非常に優れている。特に、経済や会計、マーケティングなどの分野では、タイムデータや統計情報をもとにした分析が効果的かつ効率的に行える。例えば、企業の売上データを授業で活用する際、会計ソフトに取り込んで可視化することで、資料作成や意思決定の支援が瞬時に可能となる。

マーケティング分野では、生成 AI による分析・解析が特に得意である。総務省などが公開しているリアルな統計データを活用することもできるし、仮想の地域や人口を設定して、経済効果のシミュレーションを行うことも可能である。例えば、「人口 1 万人の地域で新しい店舗を開いた場合、どのような経済効果があるか」といった問いに対して、生成 AI は仮定に基づいたデータを提示してくれる。

商品企画においても、ターゲット層や地域を設定し、1 年後・2 年後・3 年後の売上予測を立てることができる。ターゲットを変更すれば、シミュレーション結果も変化する。重要なのは、シミュレーションそのものではなく、その背景にある考え方や数値の根拠を生成 AI が解説してくれる点である。

マーケティングの授業時間内でこれらをすべて扱うのは困難だが、生成 AI を活用することで、より深い理解と実践的な学びが可能になる。高校生は経済的な感覚がまだ十分に備わっていないことが多いため、こうした支援は非常に有効である。

情報処理の教科書にも、問題解決の手順として「情報の収集・整理・分析・解決案の立案・評価・実行」といった流れが示されている。例えば、窓口業務の待ち時間を最適化するために、平均処理時間を分析するという事例がある。しかし、現場では単純な平均だけでは対応できない複雑な要素が存在する。

コンビニのレジを例にとると、店舗によって並び方が異なる。スキルの異なるスタッフが配置されている場合、並び方やレジの位置によって処理効率が変わる。こうした現場のリアルな要素は、経験がなければ想定できない。生成 AI に「どのようなリスクがあるか」「どのような要素が影響するか」と質問すれば、想定外の視点を得ることができる。

このように、生成 AI は生徒が考えつかない視点を補完する「もう一人の友達」として機能する。生成 AI との対話を通じて、「そうだったのか」「そんな考え方があるのか」と気づきを得ることができる。

授業の中で、生成 AI を活用する場面を考える際には、自分の教科に限定せず、他教科の視点も取り入れると新たな発想が生まれる。例えば、ブレインストーミングのように、異なる教科の先生同士でアイデアを出し合うことで、思いもよらない活用方法が見えてくる。

発想法の一つとして「オズボーンのチェックリスト」がある。これは、発想を広げるための質問項目を整理し、それに対して答えを出していくことで新しいアイデアを生み出す手法である。従来は人間が質問を考えていたが、今では生成 AI にその役割を担わせることができる。

例えば、「他の教科で生成 AI を活用できる授業は何か？」と生成 AI に尋ねると、質問項目が一覧で出てくる。それに対して答えを整理していくことで、新しい発想が生まれる。さらに、生成 AI に「20 代の視点」「30 代の視点」「40 代の視点」で考えてみると指示すれば、それぞれの年代に応じた情報や考え方が提示される。

このように、生成 AI は 1 対 1 の対話だけでなく、仮想的に複数人の視点を取り入れたブレインストーミングも可能である。教育現場での活用方法は無限に広がっており、今後の授業設計において大きな可能性を秘めている。

状況によっては、生成 AI との対話を 1 対 2、あるいは 1 対 3 の形式にすることも可能である。単純な 1 対 1 のやり取りではなく、複数人の仮想的な視点を取り入れることで、より多角的な発想が生まれる。

このような対話形式は、コミュニケーションが苦手な子どもにとっても有効である。他者との会話が難しい子どもでも、生成 AI を通じて「友達との会話のような体験」ができる可能性がある。これまで得られなかった発想や気づきを、生成 AI との対話から得ることができるかもしれない。

### 3 まとめ

本来であれば、こうした活用が授業の中でどのように効果的であるかを、具体的に提示できれば理想的だった。しかし、現時点では、まだ十分な事例が揃っているとは言えない。セキュリティに関しても、絶対的セキュリティはない。そこを意識した上で、提示される情報も嘘がたくさんある。それも想定した上で、いいところをうまく使っていく。なぜなら道具であるから。授業だけでなく、校務の部分で活用してほしい。効率よく活用して浮いた時間を生徒のために活用してほしい。

### 3 講演

#### 「DX時代のリーダー育成とプロジェクトマネジメントを考える」

講 師 城西大学 副学長 栗 田 るみ子  
記録者 青森県立三沢商業高等学校 教 諭 向谷地 史 拓

#### 1 はじめに

栗田先生は冒頭で、前日実施されたグループ活動が非常に活発であったことに言及し、「すごい集団が東北にいる」と家族のLINEに送ったエピソードを紹介し、今回の講演のテーマであるプロジェクトマネジメントを意識すべき部分が、すでに今回の受講者には無意識に備わっているのでは、と述べた。しかし、今後様々な面で人を率いていかなければならないことを考えると、それを意識的なものにしていくことが重要であると示唆した。

続いて、ご自分が教育工学の研究を30年以上進めてこられた背景について説明があった。教育工学は大まかに言うと、その時代に即した「道具」をどのように教育に活かすかの研究であり、時代はまさにAIの利活用に突入していると話す。例えばAIの使い方（How to）だけでは、AIをどのように使い、どのように自分の仕事や勉強に活かすかが重要だといった内容である。そして、新しい技術や新しい道具を手に入れるということは、新しい言葉を正しく理解しなければならないとし、日常的な言葉や情報化社会で使われているいくつかの言葉を丁寧に説明した。今回のテーマ「DX時代のリーダー育成とプロジェクトマネジメント」の中心理論であるPMBOKの全体像についての説明を切り口に、話題はデジタル社会の変遷へと展開する。

#### 2 デジタル社会の変遷

第三次AIブームとされる現代において、インターネットの歴史は古く1950年後半まで遡る。

インターネットの技術が急激に普及しはじめたのは1995年であり、そして2010年には世界のインターネット人口は20億人を超え、日本では世帯普及率が90%、人口普及率は80%になっている。このような急速な進展の中、AIをテーマにした映画は多数制作されヒットしてきた。ここでいくつかの映画を紹介する。

「アイロボット」は2035年を舞台としたもので2004年公開された。これはSF作家のアイザック・アシモフの書籍が原作となっている。1968年制作された「2001年宇宙の旅」では、巨大化したHALコンピュータが描かれている。2001年公開の映画「AI」は、「お母さんが好き、お母さんが喜ぶことをする」とプログラムされた10歳のロボットを主人公にしている。2023年公開のファイル交換ソフトの開発をテーマにした「Winny」は日本の映画であるが、デジタル社会の変遷を学ぶのに参考にできる。このような映画作品を授業で取り上げて倫理教育や科学技術教育を行うことは有効的ではないかと栗田先生は述べた。

#### 3 DX時代のリーダー育成

AIは質問者に最適値を出してくれるが、人間は相手に合わせた最適値を出す。AIはまだ私たちの手元にある道具として届いたばかりであり、それをうまく使いこなす必要がある。大事なことは、道具ではなく人であり、「あの人がいたら何とコメントしてくれるかな」という関係作りが重要だと説明し、情報過多の時代において、自分に必要な情報を選択し、また真実を見抜く力も益々必要な時代であると話した。

更に、DXとは何か、どの様に改革を推進していくのかについての説明に移る。DXは「デジタル化して、なおかつ新たな価値を創出する」ことで、これまでの価値とは全く異なる価値を生み出し、概念や感覚を変え、意識改革をする「革命」でもあるとの説明とともに、DXは簡単なことではなく、「お金、知恵、重要

な情報、優秀な人材、変革への協力、理解、お金の賢い使い方」が必要であるという。そして変革へのステップである、デジタイゼーション、デジタルライゼーション、デジタルトランスフォーメーションの言葉の意味を説明した。これら3つの取り組みと同時に、「あの人に聞いてみよう、あの人は時々面白いこと言うよね、あれはなかなか面白いじゃない」というような人間関係を築くことが重要と話し、道具が中心ではなく、全てにおいて「人が中心」であると説明する。また、新しい発想に役立つ理論として、カニバリゼーションについて紹介した。つまり、自社の最も収益を上げているヒット商品を潰すくらいの革新的な発想と実現力が必要であるということであり、この事例としてAmazonの書籍販売からネット通販への転換を紹介した。

言葉の意味	6
<b>デジタイゼーション</b> <small>Digitalization</small> これまでアナログで行っていた業務をデジタル化する。プリンターを使う。WiFiを使う。携帯を使う。DXへむけての初めの一歩！ <b>必要性</b>	
<b>デジタルライゼーション</b> <small>Digitalization</small> デジタル化することで、合理化し、更に飛躍した使い方。プリンターをどのように利用、活用するか。DXへむけての2歩目！ <b>合理化</b>	
<b>デジタルトランスフォーメーション</b> <small>Digital Transformation</small> デジタル化により新たな価値を創出する取り組み。新規行動。アイデアの実現 DXにより大きく前へ！ <b>人が中心</b> <small>＝変革への協力が必要、変革への理解が必要、費用が必要</small>	

更に、マネジメント、リーダーシップなどの言葉の意味や具体的な事例について説明し、プロジェクトマネジメントの説明へと進み、1987年に米国で策定されたPMBOK (Project Management Body of Knowledge) を説明した。これはプロジェクトマネジメントを進めるための教科書のようなもので、現在7回の改定があり、その時代に合わせて項目の変更がある。12の項目全てにおいて動詞で記述されており、非常に具体的であることを強調した。

2006年に経済産業省が策定した「社会人基礎力」についても説明をし、社会人基礎力の「基礎」はベースではなく、「基盤」の意味で、ファンダメンタルと解釈するようにと解説する。つまり、基盤はステージによって異なるわけで、先生としての基盤、生徒としての基盤、母親としての基盤、社会人としての基盤など、それぞれのシーンに合わせた基盤が必要なのである。

#### 4 マネジメントの応用

日常的には耳にしえない経営学の3つの言葉の説明があった。KGI (重要目標達成指標)、KFS (重要成功要因)、KPI (重要業績評価指標) であり、KGIは「ゴールの設定」、KFSは「成功要因」、KPIは「達成状況を測る中間指標 (マイルストーン)」と考えることで、例えば、夏休みに本を十冊読む目標設定に対し、KFSやKPIを具体的に明確にする必要があること、頭の中で整理ができよう目標を立てること、ひとつずつ確認して、目標を達成できるように支援してあげることが重要であることを説明した。これらを授業で取入れるといいのではないかと提案した。

プロジェクトマネジメント成功の5つのポイントとして、以下の5つが大事である。

- (1) ぶれない目標を作る。
- (2) やるべきこと (タスク) を明確にする。
- (3) いつ、誰が、何をやるのかを明確にする (明確化・具体化)。
- (4) 詳細な計画を立てる。
- (5) KGI、KFS、KPIを設定する。

これらは日常生活や個人の目標達成にも応用可能なものであると感じる。

## 5 PMBOKと教育

PMBOKは経営学の重要な理論でありプロジェクトを成功させる学習に使えるとして、童話を例にあげた著書からいくつか取り上げて具体的に説明する。

1つ目の例は「桃太郎」である。桃太郎はリーダーであり、鬼退治の目標達成のため、犬・猿・雉といった「特技」を持つ仲間を選び鬼退治に成功したのだが、これら全体は1つのプロジェクトである。「誰がいつまでに何をすべきか」「誰が得意なのか」を考えた結果であり、「弱みも強みに」なる可能性を秘めている。

説明の途中では、生成AIツールのSlidoで会場からリアルタイムに意見を収集して桃太郎の性格を参加者に記述させ、その結果を大きなスライドで瞬時に集計した。特に多かった意見は桃太郎の性格は「戦略的な性格」「正義感が強い」「優しい」「勇敢」という言葉があげられた。

2つ目は「シンデレラ」である。この物語からは「失敗への向き合い方」や「人との付き合い方」「意思決定」を学ぶ教材として不平や不満をどう乗り越えるかについて学習することができる。自分の意見を相手に直接伝えるにしても、どのように伝えるかを考えることが重要で、それが問題解決の糸口となること、失敗への向き合い方や人との付き合い方などについてどのように考えるか示唆しているものである。

3つ目は「3匹のこぶた」を例に挙げた。「成功への近道は段取りと判断」の重要性を示す物語である。間違った目標設定は、その時点で失敗を意味するという重要な意思決定について、要求をしっかりと確認し、手順を立ててスタートすること、いわゆる「段取り」が重要であることが確認できる。

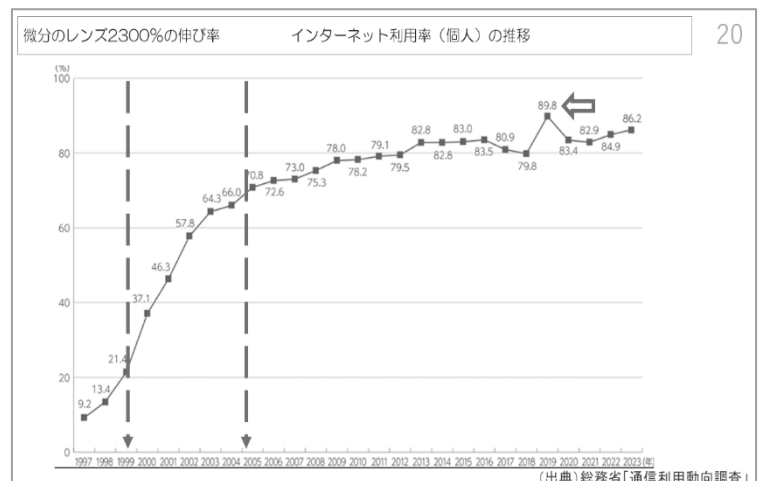
これらは、PMBOKの概念を子どもにもわかるようにまとめた「童話で分かるプロジェクトマネジメント」の書籍の内容を取り上げたものである。

PMBOKは12の原則	10
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「スチュワードシップ」である</li> <li>2. 協働的な「チーム」の環境を作る</li> <li>3. 「ステークホルダー」と効果的に連携する</li> <li>4. 「バリュー」に焦点を当てる</li> <li>5. 「システム」の相互作用を認識する</li> <li>6. 「リーダーシップ」を示す</li> <li>7. 状況に基づいた「テラリング」を行う</li> <li>8. プロセスと成果物に「クオリティ」を組み込む</li> <li>9. 「複雑さ」に対処する</li> <li>10. 「リスク」対応の最適化を認識する</li> <li>11. 「適応力」と「回復力」を持つ</li> <li>12. 将来の状態を達成するために「変革」する</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Stewardship / スチュワードシップ (管理責任)</li> <li>2. Team / チーム</li> <li>3. Stakeholders / ステークホルダー (利害関係者)</li> <li>4. Value / worth / 価値</li> <li>5. Systems Thinking / システム思考</li> <li>6. Leadership / リーダーシップ</li> <li>7. Tailoring / テラリング (立て直しカスタマイズ)</li> <li>8. Quality / 品質</li> <li>9. Complexity / intricate 複雑さ (VUCA)</li> <li>10. Risk / リスク</li> <li>11. Adaptability and Resiliency / 適応力と回復力</li> <li>12. Change / DX 変革</li> </ol>

## 6 情報収集と時代の変化への対応

1990年代後半から2000年代前半にかけてのITバブル期におけるインターネット利用者の驚異的な成長は、伸び率のグラフであるように、微分のレンズを確認することができる。

楽天やジャストシステム、ユニクロ、Apple、Amazonの創業者を例にあげて2300%の伸び率とともに、デジタルディスラプターの事例を説明した。彼らは皆、当時の業務内容から他に目を転じ、新規に起業した人物である。成功の要因は洪水のように押し寄せる情報の波から「ダイヤモンドを見つける力」を持った人々であろうと考えられる。



## 7 教育現場でのテクノロジー活用と評価基準

授業や会議での意見交換、クイズ、アンケートなどに活用できる無料ツールとしてSlidoの活用方法を紹介する。これにより、リアルタイムで参加状況や回答を可視化し、インタラクティブな学びを促進できる。また、Excelを用いた重回帰分析などの要因分析によるエビデンスは重要であること、商品開発や販売などの時にも「なんとなく」ではなく、データを元に意思決定することも意識してほしいと話された。そして、教育現場では、文部科学省が推進する評価基準としてルーブリックを導入することは重要であるとの説明があった。

大学ではシラバスとルーブリックを必ず作らなければならない。これによって、教員は「どこをどのように評価するか」を明確にし、学生・生徒は「なにをやれば良いか」というマイルストーンを設定できる。「生徒が頑張る方向を見せる」ツールであるので進めてほしいと述べた。

## 8 まとめと未来への提言

時代の変化のタイミングを逃さず、社会の変化だけでなく、自分自身の人生の変化のタイミングを見極め、進めることが重要である。栗田先生は「日々の活動は次のステージへの準備であり、チャンスへの道です」と話し、「先生方に、未来のリーダーとなる子どもたちを育ててくださることを期待します。そのためには、先生方自身も「まだまだ成長期」として意識改革に取り組んで頂きたい」と力強く述べた。

最後に、AIの時代だからこそテクノロジーの学問に加え、文系の広い知見が重要となるとして「今こそ国語、哲学、美術、音楽、文学であり、あらゆる分野の知見が不可欠である」と説明した。具体的には、心に響く文学や古典を読む時間が重要と強調された。

講座終了後、受講者からは、内容が専門的な部分もあったが、具体的でわかりやすかったこともあり、時間があっという間に過ぎ、実り多い講座であったとの声等が非常に多く聞かれた。

# 研究委員会報告

## 令和7年度 マーケティング・マネジメント分野研究委員会報告

事務局当番校 青森県立八戸商業高等学校

### 1 第1回マーケティング・マネジメント分野専門委員会

日時 令和7年4月25日(金) 13:00~15:30

場所 青森県総合社会教育センター(第3研修室)

参加者 阿部 靖彦(八戸商業教頭)

工藤 勝平(青森商業) 長谷川 善弘(弘前実業)

向谷地 史拓(三沢商業) 鍋倉 哲章(七戸)

鈴木 有紀(北斗) 横田 祐美(下山学園)

小出 健太郎・下田 幸大・岩間 由香子・榎 祥吾(八戸商業)

計11名

内容

(1) 令和7年度年間計画について

(2) 令和7年度教員対象研修会について

(3) 令和8年度高教研・東北商研大会の発表等について

(4) その他

### 2 第2回マーケティング・マネジメント分野専門委員会

日時 令和7年6月24日(火) 10:00~15:30

場所 青森県総合社会教育センター(第3研修室)

参加者 阿部 靖彦(八戸商業教頭)

工藤 勝平(青森商業) 長谷川 善弘(弘前実業)

秋田 健二・向谷地 史拓(三沢商業) 鍋倉 哲章(七戸)

鈴木 有紀(北斗) 横田 祐美(下山学園)

小出 健太郎・下田 幸大・岩間 由香子(八戸商業)

計11名

指導・助言

青森県総合学校教育センター

産業教育課 指導主事 新堂 満香 氏

内容

(1) 令和7年度教員対象研修会(高教研分科会)について

(2) 令和7年度研究活動進捗状況について

(3) 令和8年度高教研・東北商研大会の発表について

(4) その他

### 3 令和7年度 教員対象研修会「起業家による講演会及び座談会」

日時 令和7年8月19日(火) ※高教研第1分科会

場所 ホテルグランヒルつたや

参加者 25名(うち専門委員10名)

松居 司・高橋 恭一・谷村 学・長谷川 誠・工藤 勝平・榎 晃太(青森商業)

長谷川 善弘・鈴木 瞳(弘前実業) 岩藤 充宏・志田 直樹・秋田 健二・

浅水 伸之・向谷地 史拓(三沢商業) 鎌田 吉雄(黒石) 鍋倉 哲章(七戸)

太田美千之(六ヶ所) 今 成哲(大間) 下村 誠・小嶋 文博(三戸)

鈴木 有紀(北斗) 横田 祐美(下山学園) 畠山 行雄・岩間 由香子・

小出 健太郎・下田 幸大(八戸商業)

計25名

演題 「青森県から全国・世界を取りに行くマーケティング 実践編」

講師 タグボート株式会社

代表取締役 水口 清人 氏

4 第3回マーケティング・マネジメント分野専門委員会

日時 令和7年9月8日(月) 10:00~15:30

場所 青森県総合社会教育センター(第3研修室)

参加者 工藤 勝平(青森商業) 長谷川 善弘(弘前実業)  
向谷地 史拓(三沢商業) 鍋倉 哲章(七戸)  
鈴木 有紀(北斗) 横田 祐美(下山学園)  
小出 健太郎・下田 幸大・岩間 由香子・榊 祥吾(八戸商業)

計10名

内容

- (1) 令和7年度教員対象研修会(高教研分科会)の総括について
- (2) 令和7年度研究活動進捗状況について
- (3) 令和8年度高教研・東北商研大会の発表について
- (4) その他

5 第4回マーケティング・マネジメント分野専門委員会

日時 令和7年11月20日(木) 10:00~15:30

場所 青森県総合社会教育センター(第3研修室)

参加者 阿部 靖彦(八戸商業教頭)  
工藤 勝平(青森商業) 長谷川 善弘(弘前実業)  
向谷地 史拓(三沢商業) 鍋倉 哲章(七戸)  
鈴木 有紀(北斗) 横田 祐美(下山学園)  
小出 健太郎・下田 幸大・岩間 由香子(八戸商業)

計10名

内容

- (1) 令和7年度の活動について(総括)
- (2) 令和8年度の活動について(計画)
- (3) 令和8年度の研修会について(計画)
- (4) 令和8年度高教研・東北商研大会の発表について
- (5) その他

【総括】

今年度は、専門委員会を4回、教員対象研修会を1回実施した。各専門委員会では、3年目となる研究テーマ「ビジネスを通して地域経済の発展を担う人材育成を目指して」のもと、生徒の「主体的に学びに向かう態度」を見取ることの難しさに課題を設定し、授業における活動時間や評価方法との関連を探りながら、主体性を高めるための授業改善の方策を提案することを目的に研究を進めてきた。次年度はその集大成として、県高教研および東北商研大会で研究成果を発表する予定である。

教員対象研修会は、高教研第1分科会として「起業家による講演会及び座談会」を開催した。講師には昨年度に引き続き、タグボート株式会社代表取締役 水口清人氏を迎え、「青森県から全国・世界を取りに行くマーケティング 実践編」と題し、昨年度の講演以降の取り組みの進捗状況や今後の計画・展望についてご講演いただいた。その後、座談会を開催し、参加者との意見交換を行った。講演終了後のアンケートでは、「ビジネスのリアルな部分を聞くことができ、授業で県内企業の事例として話すことができる」「子どもたちの学びに活かす材料やヒントがたくさんありました」など、非常に参考になったという感想が多数寄せられた。

例年課題であった参加者数についても、今年度は25名と昨年度より増加し、年々参加者が増えて研修の充実度が高まっているように感じる。次年度も県高教研の分科会の中で実施する方向で検討している。

次年度は事務局校が変更となるため、今年度の活動内容や研究の方向性、授業実践の成果を丁寧に整理し、次の事務局校が円滑に取り組みを進められるよう、しっかりと引き継ぎを行っていきたい。

## 令和7年度 会計分野研究委員会報告

事務局当番校 青森県立弘前実業高等学校

### 1 第1回会計分野専門委員会

日 時 令和7年4月24日(木) 13:30~15:30

場 所 青森県総合社会教育センター(第2多目的研修室)

参加者 委員長 土岐一行(三戸高校 教頭)

吉岡香織・小野公太郎・棟方明日香(青森商業)、平山学・小中喜貴(弘前実業)

村上啓子・田中純恵(八戸商業)、佐藤雅哉(三沢商業)、鈴木佑(黒石)

藤田匡寿(大湊)、山下恭平(下山学園)、長谷川善弘(事務局)

計13名

内 容 案件

(1) 令和7年度年間計画について

(2) 令和7年度研修会について

(3) 令和7年度高教研・東北商研大会の発表等について

(4) その他

### 2 第2回会計分野専門委員会

日 時 令和7年6月17日(火) 13:30~15:30

場 所 青森県総合社会教育センター(第2多目的研修室)

参加者 委員長 土岐一行(三戸高校 教頭)

吉岡香織・小野公太郎(青森商業)、小中喜貴(弘前実業)

村上啓子・田中純恵(八戸商業)、飯田奈緒子・佐藤雅哉(三沢商業)、鈴木佑(黒石)

清水舞子(六ヶ所)、藤田匡寿(大湊)、長谷川善弘(事務局)

計12名

内 容 案件

(1) 令和7年度高教研・東北商研大会の発表等について

(2) 県高教研分科会について

(3) 教員対象研修会について

(4) その他

### 3 青森県高等学校商業教育研究大会 第2分科会

日 時 令和7年8月19日(火) 15:00~16:30

会 場 ホテルグランヒルつたや(三沢市)

参加者 24名(うち専門委員13名)

内 容 外部講師による講義

講演「最新会計基準から視える重要なカギ」

講 師 学校法人高橋学園 専門学校東京 CPA 会計学院

学園理事 教務主任 山内 樹 氏

### 4 令和7年度 教員対象研修会 「財務会計の指導力強化セミナー」

日 時 令和7年9月25日(木) 10:00~15:45

場 所 青森県総合社会教育センター（第2多目的研修室）

参加者 19名（うち専門委員11名）

内 容 外部講師による講義

- ・財務分析と経営分析の違い
- ・財務諸表から見える企業戦略
- ・実際に財務分析をしてみよう！
- ・見えないものを視る力こそ思考力

講 師 学校法人高橋学園 専門学校東京 CPA 会計学院

学園理事 教務主任 山内 樹 氏

## 5 第3回会計分野専門委員会

日 時 令和7年11月19日（水）13:30～15:30

場 所 青森県総合社会教育センター（第2多目的研修室）

参加者 委員長 土岐一行（三戸高校 教頭）

吉岡香織・小野公太郎・棟方明日香（青森商業）、平山学（弘前実業）

村上啓子・田中純恵（八戸商業）、飯田奈緒子・佐藤雅哉（三沢商業）、鈴木佑（黒石）

藤田匡寿（大湊）、長谷川善弘（事務局）

計12名

内 容 案件

- （1）令和7年度の活動について
- （2）令和8年度の活動計画について
- （3）令和8年度の教員対象研修会について
- （4）令和8年度の高教研分科会について
- （5）令和8年度の研究内容について
- （6）その他

## 【総 括】

当初4回の専門委員会を計画していましたが、実施は3回の専門委員会と1回の教員研修会となりました。研究テーマは「主体的・対話的で深い学びを実現させる指導と評価の一体化」とし、第1回・第2回では、県高教研および東北商研の発表に関わる研究のまとめに時間を充てました。今年度の研究内容は「評価」を中心に進め、三沢商業高校で先行実施・研究された内容について、同校の佐藤雅哉先生、村上啓子先生（現・八戸商業高校）にご発表いただき、研究成果として報告することができました。

教員対象の研修会では、専門学校東京 CPA 会計学院から講師を招き、テーマを「実践的な財務諸表分析」としました。財務諸表から企業の特徴や経営状況を数字で読み取る力に加え、業界や市場環境への理解も必要であることを学び、学びをつなげる重要性を実感する研修となりました。今後、この研修会の在り方や実施時期・内容、さらに県高教研分科会の研修内容について、より多くの先生方に学びの機会を提供できるよう検討を続けます。

サブテーマとして「覚える簿記から考える簿記」を掲げて活動してきましたが、今後はさらに「ビジネスにおいて活用できる力」を、会計分野の学習を通してどのように育成できるかを探ります。また、生徒が会計分野の学習に対し『うれしい！たのしい！大好き！』を感じられるよう、ワクワクする授業改善を目指し、研修・議論・検討できる委員会活動を推進します。

## 令和7年度 ビジネス情報分野研究委員会報告

事務局当番校 青森県立三沢商業高等学校

### 1 第1回ビジネス情報分野専門委員会

(1) 日 時 平成7年4月22日(火) 13:00~15:30

(2) 会 場 青森県総合社会教育センター 第3研修室

(3) 出席者 ビジネス情報分野専門委員および事務局

三沢商業高校：教頭 下道 しゅ美

青森商業高校：教諭 須藤 慎二 教諭 布施 正太郎 教諭 伊藤 大貴

弘前実業高校：教諭 小田桐 正巳 教諭 西館 大輔 教諭 柴崎 健太郎

八戸商業高校：教諭 藤ヶ森 誠司 教諭 榊 祥吾

大間高校：教諭 三橋 壮大

三沢商業高校：教諭 附田 真菜

事務局：教諭 太田 菜穂子(三沢商業)

出席者12名

(4) 内 容

(ア) 令和7年度年間活動計画について

(イ) 教職員対象研修会の研修内容について

(ウ) 地区別情報処理技術者試験対策講座について

(エ) 令和7年度商研大会の発表等について

(オ) その他

### 2 第2回ビジネス情報分野専門委員会

(1) 日 時 令和7年6月17日(火) 13:00~15:30

(2) 会 場 青森県総合社会教育センター 第3研修室

(3) 出席者 ビジネス情報分野専門委員および事務局

青森商業高校：教諭 須藤 慎二 教諭 布施 正太郎 教諭 伊藤 大貴

弘前実業高校：教諭 小田桐 正巳 教諭 西館 大輔 教諭 柴崎 健太郎

八戸商業高校：教諭 藤ヶ森 誠司 教諭 榊 祥吾

大間高校：教諭 三橋 壮大

三沢商業高校：教諭 附田 真菜

事務局：教諭 太田 菜穂子(三沢商業)

出席者11名

(4) 内 容

(ア) 令和7年度 県・東北商業教育研究大会の発表等について

(イ) 地区別情報処理技術者試験対策講座について

(ウ) その他

### 3 第3回ビジネス情報分野専門委員会

(1) 日 時 令和7年7月2日(木) 13:00~15:30

(2) 会 場 青森県総合社会教育センター 第6研修室

(3) 出席者 ビジネス情報分野専門委員および事務局

青森商業高校：教諭 須藤 慎二 教諭 布施 正太郎 教諭 伊藤 大貴  
弘前実業高校：教諭 西舘 大輔 教諭 柴崎 健太郎  
八戸商業高校：教諭 藤ヶ森 誠司 教諭 榊 祥吾  
大間高校：教諭 三橋 壮大  
三沢商業高校：教諭 附田 真菜  
事務局：教諭 志田 直樹（三沢商業）

出席者10名

(4) 内容

- (ア) 令和7年度 県・東北商業教育研究大会の発表等について
- (イ) 教職員対象研修会の研修内容について
- (ウ) 地区別情報処理技術者試験対策講座について
- (エ) その他

4 青森県高等学校商業教育研究大会 第3分科会

- (1) 日時 令和7年8月19日（火）
- (2) 会場 ホテルグランヒルつたや（三沢市）
- (3) 内容 生成AIを活用した授業づくり ～AI時代を主体的に生き抜く生徒の育成～
- (4) 講師 ITラボ株式会社 代表取締役 新山 則和 氏
- (5) 参加者 31名（うち専門委員12名）

青森商業高校：教諭 伊藤 陽子 教諭 須藤 慎二 教諭 山内 宗尊  
教諭 三浦 万蔵 教諭 伊藤 大貴 教諭 布施 正太郎  
実習講師 田中 洋樹 実習講師 下山 優莉  
弘前実業高校：教諭 都谷森 宗一 教諭 西舘 大輔 教諭 柴崎 健太郎  
八戸商業高校：教諭 藤ヶ森 誠司 教諭 榊 祥吾 臨時講師 上野 泰聖  
実習教諭 村上 順子 実習教諭 蝦名 直子 実習講師 佐藤 未来  
七戸高校：教諭 笹倉 正子  
野辺地高校：臨時講師 猶守 裕  
浪岡高校：教諭 小館 宏  
青森北高校：教諭 菊地 礼剛  
百石高校：教諭 岩間 淳  
大間高校：教諭 三橋 壮大 臨時講師 山下 徹  
三沢商業高校：教頭 下道 しゅ美 教諭 平野 博文 教諭 太田 菜穂子  
教諭 附田 真菜 臨時講師 上野 雄太  
実習教諭 佐藤 由香 実習講師 中村 宣仁

5 令和7年度ビジネス情報分野科目指導法研修会

- (1) 日時 令和7年10月1日（水）
- (2) 場所 青森商業高校 「情報処理実習室3」
- (3) 内容
  - (ア) 生成AIについて
  - (イ) IT活用全般について

(4) 講師 青森大学 ソフトウェア情報学部 教授 角田 均 氏

(5) 参加者 7校19名 (うち専門委員10名)

青森商業高校：教諭 須藤 慎二 教諭 阿部 義光 教諭 山内 宗尊  
教諭 工藤 勝平 教諭 伊藤 大貴 教諭 布施 正太郎  
臨時講師 榊 晃太

弘前実業高校：教諭 西館 大輔 教諭 柴崎 健太郎

八戸商業高校：教諭 藤ヶ森 誠司 教諭 榊 祥吾

七戸高校：実習講師 畑 東明

野辺地高校：臨時講師 猶守 裕

大間高校：教諭 三橋 壮大 臨時講師 山下 徹 実習講師 今 成哲

三沢商業高校：教諭 附田 真菜 臨時講師 上野 雄太

事務局：教諭 太田 菜穂子 (三沢商業)

#### 6 第4回ビジネス情報分野専門委員会

(1) 日時 令和7年11月12日 (水) 13:00～15:30

(2) 会場 青森県総合社会教育センター 第3研修室

(3) 出席者 ビジネス情報分野専門委員および事務局

三沢商業高校：教頭 下道 しゅ美

青森商業高校：教諭 須藤 慎二 教諭 布施 正太郎 教諭 伊藤 大貴

弘前実業高校：教諭 西館 大輔 教諭 小田桐 正巳

八戸商業高校：教諭 藤ヶ森 誠司 教諭 榊 祥吾

鱒ヶ沢高校：教諭 奈良 靖宏

大間高校：教諭 三橋 壮大

三沢商業高校：教諭 附田 真菜

事務局：教諭 志田 直樹 (三沢商業)

出席者12名

(4) 内容

(ア) 令和7年度の振り返りについて

(イ) 令和8年度の活動内容について

(ウ) その他

#### 【総括】

今年度は、東北・県大会での発表に向けて専門委員会を4回開催し、委員全員で協力しながら、充実した活動を行うことができた。高教研分科会では、ITラボ株式会社の新山様を講師にお迎えして、「生成AIを活用した授業づくり」をテーマに演習を行った。単にAIを使うことが目的ではなく、学習の質を高める手段としてAIを活用することが重要だということを再確認した。また、ビジネス情報分野科目指導法研修会では、青森大学副学長の角田先生より、生成AIおよびIT活用全般について講義をしていただいた。講義では、データサイエンスについて実例を交えながら具体的に説明があった。情報活用能力育成の観点から、ハッシュ関数やサンプルコードの実行は授業で活用できる内容であった。Pythonについても、生活の中でセキュリティ対策を意識する上で生きる内容であったと、参加した教員から好評を得た。これらを今後の生徒への指導に役立てていきたい。

さらに、高度資格取得に対する生徒のニーズに柔軟に対応するため、津軽地区および県南地区において、生徒向けの情報処理技術者試験対策講座を実施した。講義内容は、県南地区ではITパスポート、津軽地区ではセキュリティマネジメントと分担し、計算問題をはじめ、生徒がつまづきやすい分野を取り入れて実施することができた。

来年度の高教研分科会および教員対象研修会においては、情報スキルの向上を目的として、大学教授を招聘した研修会を実施する予定である。

## 令和7年度 教育課程等研究委員会報告

事務局当番校 青森県立青森商業高等学校

### 1 第1回教育課程等研究委員会

日 時 令和7年11月27日(木) 10:00～12:00

場 所 青森県立三沢商業高等学校(総合講義室)

参加者 谷 村 学・阿 部 義 光・須 藤 慎 二(青森商業高校)  
都谷森 宗 一・長谷川 善 弘・西 舘 大 輔(弘前実業高校)  
岩 間 由香子・藤ヶ森 誠 司・畠 山 行 雄(八戸商業高校)  
太 田 菜穂子・飯 田 奈緒子・岩 藤 充 宏(三沢商業高校) 計12名

内 容 (1) 年間計画について

(2) 情報交換

①令和8年度教育課程について

②校内規程(観点別評価)について

③県外学校視察報告について

(3) その他

(4) 指導・助言

青森県総合学校教育センター

産業教育課 指導主事 新 堂 満 香 氏

### 【総括】

研究テーマを「指導と評価の一体化のための学習評価」とし、1回実施した。今年度の情報交換では、令和8年度教育課程表において、各校の実情に応じた変更点の説明、校内規程では、青森商業と三沢商業が変更されることについての報告があり、内容の濃い情報交換をすることができた。

また、令和6年度県外学校視察を実施した八戸商業高校、令和7年度実施した三沢商業高校から、他県の教育課程等に関連した部分の状況報告をしてもらった。他県の取り組みは、大変参考となる内容であり、今後の教育課程編成等に役立つものとなった。

指導主事からは、訪問校の教育課程において特徴的であった「学校設定科目」の位置付けについて説明があった。学習指導要領解説に基づき、当該科目が「属する教科の目標に基づいていること」や、内容構成において「関係する各科目の内容との整合性に十分配慮すること」が必要であるとの指摘がなされた。既存科目の発展的内容や、学校の特色化を目的とする科目設定については、他県の資料等も参考に検討していただきたいとの助言をいただいた。

各校との情報交換等を通して、各校の実態に即した「指導と評価の一体化のための学習評価」の改善につながる研究活動ができたものとする。来年度も、引き続き教育課程について情報交換を行っていききたい。

## 令和7年度 総合的科目研究委員会報告

事務局当番校 青森県立青森商業高等学校

### 1 第1回総合的科目研究委員会

日 時 令和7年4月21日(月) 13:30~15:30

場 所 青森県立青森商業高等学校(視聴覚室)

参加者 委員長 櫻田 篤(青森商業高校教頭)

長谷川善弘・西舘大輔(弘前実業高校) 秋田健二・太田菜穂子(三沢商業高校)

榊祥吾・岩間由香子(八戸商業高校) 谷村学・山内宗尊・須藤慎二(青森商業高校)

横田祐美(下山学園高校)

計11名

- 内 容 (1) 研究テーマについて  
(2) 令和7年度の活動について  
(3) 生徒実行委員会について  
(4) 令和8年度発表に向けて  
(5) その他

### 2 第2回総合的科目研究委員会

日 時 令和7年6月16日(月) 13:30~15:30

場 所 青森県立青森商業高等学校(会議室)

参加者 委員長 櫻田 篤(青森商業高校教頭)

長谷川善弘・西舘大輔(弘前実業高校) 秋田健二・太田菜穂子(三沢商業高校)

榊祥吾・岩間由香子(八戸商業高校) 谷村学・山内宗尊・須藤慎二(青森商業高校)

横田祐美(下山学園高校)

計11名

- 内 容 (1) 今年度の活動について  
(2) 県生徒商業研究発表大会について  
(3) 次回(第3回)委員会について  
(4) その他

### 3 第3回総合的科目研究委員会

日 時 令和7年11月27日(木) 13:30~15:30

場 所 青森県立三沢商業高等学校(総合講義室)

参加者 長谷川善弘・西舘大輔(弘前実業高校) 秋田健二・太田菜穂子(三沢商業高校)

榊祥吾・岩間由香子(八戸商業高校) 谷村学・山内宗尊・須藤慎二(青森商業高校)

横田祐美(下山学園高校)

計10名

- 内 容 ※生徒による活動報告  
(1) 各校文化祭における開発商品販売について  
(2) 次年度の各校における課題研究について  
(3) 令和8年度委員会活動計画について  
(4) その他

## 【総括】

研究委員会は計画通り3回実施することができた。

今年度の研究テーマは昨年度から引き続き、「総合的科目の学びをとおした協働による問題解決能力の育成」とし、自分たちの地域の課題を解決するために開発した商品を、他の地域（学校）で販売してもらうことにより、自分たちの地域では得られなかった意見（データ）、例えば「他の地域の課題解決にも役立つ」や「全く役立たない」などを得ることで、生徒の知見を広げることを目的とした。また、今年度から、下山学園高校にも参加していただき、活動の幅を広げることができた。

生徒自らが活動するために、昨年度計画した各校の担当班による生徒実行委員会を、各校の代表者同士をオンライン会議で結び、実施した。実行委員会では三沢商業高校を中心に活動を進めることとし、三沢商業の生徒を委員長に選出した。第1回の実行委員会後は委員長を中心にMicrosoft Teamsを活用して各校間の連携を図り、開発商品に関する問合せや受発注、商品情報の交換、支払いに関する確認などを行い、各校の文化祭での開発商品の販売までの準備からまとめまでを行っていた。

今年度は特に各校での商品の売価について、輸送費などのコストを含めるかどうかなどを生徒に考えさせ、各校で意見を出し合わせるすることができた。結果としては昨年度同様に教員が輸送することが多かったが、しっかりと輸送費などを調べ、売価に反映させることの難しさなどを学ばせることが出来たと感じている。

各校での販売を実施してみて、各校からは「販売方法について」「活動の目的の再確認」「生徒間の情報交換方法」「仕入れ表などの統一」「活動の実施方法」などについての問題点が指摘され、次年度に向けて検討を続けることとなった。また、生徒からは、「活動によって他校の販売商品についての目的や思いを知ることができた」「直接販売に出向くことはできないか」などといった意見や「Teamsが見つらくわかりづらい」などの意見があった。

次年度は今年度の反省を生かし、活動をさらに進めていきたい。

### <各校文化祭等における県内商業高校開発商品の販売実習の様子>



三沢商業高校「三商祭」



八戸商業高校「八商バザー」



弘前実業高校「弘実祭」



下山学園高校「下学祭」



青森商業高校「青商祭」

## 令和7年度 研究誌編纂委員会

事務局校 青森県立青森商業高等学校

### 1 第1回研究誌編纂委員会

日 時 令和7年6月9日(月) 13:30~15:30

場 所 青森商業高等学校 会議室

参加者 鈴木 瞳(弘前実業) 上野 泰聖(八戸商業) 向谷地史拓(三沢商業)  
奈良 靖宏(鯨ヶ沢) 川口 真史(大湊) 半田莉玖斗(下山学園)  
榊 晃太(青森商業) 吉岡 香織(青森商業) 計8名

内 容 (1) 令和7年度研究誌の編集方針について  
(2) 青森商研NEWSについて  
(3) 中学生向けパンフレットについて  
(4) その他

### 2 第2回研究誌編纂委員会

日 時 令和7年11月10日(月) 13:30~15:30

場 所 各校(Zoom)

参加者 鈴木 瞳(弘前実業) 上野 泰聖(八戸商業) 向谷地史拓(三沢商業)  
奈良 靖宏(鯨ヶ沢) 川口 真史(大湊) 半田莉玖斗(下山学園)  
榊 晃太(青森商業) 吉岡 香織(青森商業) 計8名

内 容 (1) 中学生向けパンフレットについて  
(2) 青森商研NEWSについて  
(3) 青森商業教育MERCURYについて  
(4) その他

### 3 発行物について

- (1) 「君の未来をひらく商業教育」 令和7年7月2日発行
- (2) 「青森商研NEWS」
  - ア 夏号 令和7年7月22日発行
  - イ 秋号 令和7年10月24日発行
  - ウ 冬号 令和8年1月21日発行
- (3) 「2025 青森商業教育MERCURY」 令和8年3月末 発行予定

## 【総括】

今年度の発行物編纂にあたり、各校の生徒・教職員の皆様から多くの貴重な原稿をご提供いただいたことに心から感謝申し上げます。

今年度は委員会を2回実施し、中学生向けパンフレット・青森商研NEWS・青森商業教育MERCURYの発行を行った。委員会は、第1回は通常実施、第2回はZ o o mにて実施し、発行物の編集方針や構成についての協議を行った。

中学生に商業教育の魅力や学びの特色を分かりやすく伝えることを目的に、中学生向けパンフレット「君の未来をひらく商業教育」を発行した。起業家教育への取り組みや進路状況、部活動で頑張る生徒についての最新情報も掲載することができ、進路選択の一助となる資料を提供することができた。青森商研NEWSは、商業教育に関する最新情報や各校の取り組みを共有および発信するため、3回発行した。枚数の制限を設けず、メーリングリストで広く記事の募集を行い、商業を学ぶより多くの学校の取り組みを紹介することができた。また、商業の各種大会における入賞者の感想や抱負を掲載し、大変多くの生徒の努力の成果や思いを紹介することができた。

次年度に向け、今年度の成果と課題を踏まえ、より時代の変化に応じた内容の充実を図り、多くの先生方からのアイデアを取り入れながら、一層商業教育のPRに努めていきたい。

# 令和7年度 高大連携推進事業の取り組み

## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森県立青森商業高等学校
事 業 担 当 者 名	教諭 伊藤 陽子
事 業 ( 連 携 ) 名 称	情報処理科3年生「課題研究」における青森大学との連携事業

### 事業報告

#### 1 目 的

課題研究において、生成 AI を活用したアプリ開発を通じて、生徒の自律的な学びと ICT 活用力の向上を図る。地域をテーマにしたアプリ制作により、課題発見・解決力、創造力、情報活用能力を育成し、将来のビジネスや社会で求められる実践的なスキルを身につけることを目的とする。

#### 2 実施日時・内容

5月13日(火) 5・6校時 (13:35~15:25)

6月10日(火) 5・6校時 (13:35~15:25)

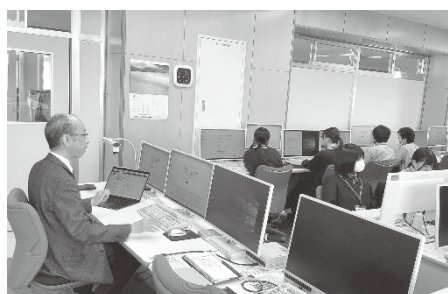
7月 8日(火) 5・6校時 (13:35~15:25)

9月30日(火) 5・6校時 (13:35~15:25)

11月18日(火) 5・6校時 (13:35~15:25) (予定)

R8 1月21日(水) 5・6校時 (13:35~15:25) (予定)

講師：青森大学ソフトウェア情報学部 教授 角田 均 氏



#### 3 成果 (生徒の反応や効果・課題など)

本事業を通じて、生徒は生成 AI を活用したアプリ開発に主体的に取り組み、ICT スキルの向上とともに高い達成感を得ている。アプリ開発ができるほどのプログラミング言語の知識はない状態からスタートしたが、AI との対話を通じて「コードが書けなくてもアプリが作れる」という実感を得ることができた。生徒からも「自分の考えていることがアプリになるのはうれしい」「AI と相談したことがどんどん形になって、実際に動いているのを見ると達成感がある」といった感想が多く、生徒の学習意欲の向上が見られた。

開発は週3時間の授業時間のみであるが、生成 AI の活用により、限られた時間でも着実に成果を上げている。AI とのやりとりがうまくいかず苦勞する場面も多かったが、生徒はプロンプトの工夫や複数の AI ツール (ChatGPT、Copilot、Gemini、GitHub、Canva 等) の使い分けによって課題を乗り越えている。無料プランの制限により作業が滞ることもあったが、課題研究用のユーザーアカウントを作成し、使い分けることで対応するなど、問題解決力育もまれている。開発に使用するツールや環境、開発内容やスケジュール等、基本的にすべて生徒自身が AI と相談して進めており、全員が非常に積極的に取り組んでいる。

## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

情報処理科とはいえ、ICT が得意な生徒ばかりではない中で、誰一人あきらめることなく開発を進めており、現在はアプリの形が見えてきている段階である。コードの読解力も向上し、エラー修正も短時間で行えるようになってきている。

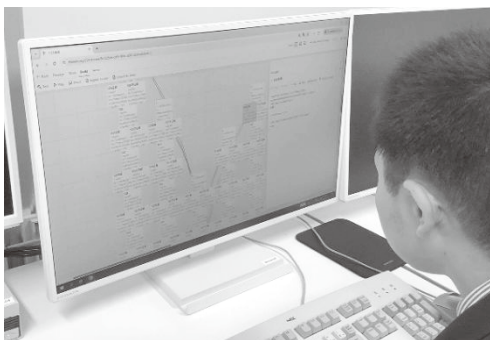
一方で、課題もいくつか見られた。今年度は AI プロンプトの基礎知識を学習せず、完全にゼロからスタートしたため、AI とのやりとりに慣れるまでに時間がかかり、開発そのものに取り組むのが遅れた。スケジュールが押してしまい、現在も完成に向け開発作業を継続している。「どの程度を完成とするか」について生徒自身が判断に迷っている様子も見られる。来年度は、AI プロンプトの基礎学習を授業の初期に取り入れるとともに、より具体的なスケジュール管理を AI に任せるなど、効率的な授業展開を検討したい。

青森大学・角田教授からは、「授業内での一部使用ではなく、生徒が AI を先生やパートナーとしてここまで活用する授業展開は聞いたことがなく、生徒のアプリの完成度も高い」と高く評価されており、本事業の教育的意義と成果は大きい。

今日は、ホーム画面のデザインを改良と、観光地の紹介文を詳細にする作業をした。デザイン改良は他の機能の改良よりも難しく、コードを一度変えると、ホウリの文章や、位置まで変わってしまい、何度もやり直しを繰り返してようやく納得のいくものを作ることができた。次からは、いろいろ写真やアイコンの追加に取り組みたい。アプリの見た目も華やかにしていきたい。

ChatGPTにお願いをしても今日は全く意味がなかったのでも、自分で少し直した。でも、いこううちにどこに何が あるか分かってきたので、今後も色々自分でもやってみようと思った。コラボレーションの他に、ゲームの中身を改善したり、音を入れたいこと、やりたいことが沢山あるので計画的にやっていきたい。

写真や遊び方を追加できたものの、改善点はまだあるしやり度に出ているのでもっと効率的にやりたいと感じた。残ってしまうのを消そうとすると全ては消えていくので、何度もお願いして ChatGPT に理解させるまでやらせたいと感じた。今回はあまり詳しくコードを出してくれなかったのでも、そこを覚えていきたいと思った。



## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森商業高等学校
事 業 担 当 者 名	三浦万蔵
事 業 ( 連 携 ) 名 称	課題研究における青森中央学院大学との連携事業

### 事業報告

#### 1 目 的

高大連携協定を締結している青森中央学院大学の教育資源を活用させていただき、普段の高校の授業ではできない経験を積み、多くの気づきを得ることで、主体性と学習意欲の向上を図り、より深い学びへとつなげる。青森県にいながら世界とつながるグローバルな視点を持ち、将来は青森県の産業の発展に貢献できる人財を育成する。

#### 2 実施日時・内容

- 5月15日 留学生によるタイ語レクチャー  
青森中央学院大学留学生との意見交換  
異文化理解講義受講
- 6月10日 第1回オンライン交流  
「県産品スイーツのプレゼンテーション」
- 8月26日 第2回オンライン交流  
「県産品スイーツの感想及びタイスイーツ  
のプレゼンテーション」
- 11月25日 第3回オンライン交流  
「タイスイーツの感想及び両校の文化祭について」



留学生との意見交換の様子  
青森中央学院大学 041 教室

タイと日本のスイーツについて様々なデータを収集し、タイの高校生とオンラインで交流し、留学生にアドバイスをもらいながら、タイへの輸出商品や日本への輸入商品の検討会を実施した。今年度は青森中央学院大学木田先生、佐川先生の協力でタイ・チェンマイのレジーナ・シェリー・カレッジとのオンライン交流会を3回実施することができた。スイーツ選定のアドバイス及び基本的タイ語についてタイからの留学生から指導を受けることができ、オンライン交流会に向けて里見先生の異文化理解の講義を受講することでスムーズに交流会を実施することができ、サンプルスイーツを相互に交換することができた。本校文化祭においてタイの飲料やお菓子の販売実習を行ったが希望物品の販売までは実現することができなかった。

#### 3 成果 (生徒の反応や効果・課題など)

タイについて調べたり、オンライン交流会で実際にタイの高校生と交流することによって、生徒がタイに興味を持ち、外国へ目を向けるきっかけとなった。国際交流の楽しさや難しさを実感したようである。事前に異文化理解の講義を受講し、留学生からタイ語のレクチャーを受けたことで、より相手側の気持ちに立った形でのオンライン交流会を実施することができた。また、海外への荷物の発送方法や手順などを学び、生徒自身が積極的に班員同士で考察しながら、より良いものを作成できるように工夫していた。



オンライン交流会の様子  
青森商業高等学校選択教室

元々日本向けに輸入された食品に関しては、日本語での原材料表記がなされているが、自分たちがセレクトした商品を輸出入する場合には、それぞれの国の原材料表記がされなければならず、個人レベルでの解決は難しいと感じた。次年度もレジーナ・シェリー・カレッジとの交流をしながら、今年度実施できなかったタイへの輸出および、タイからの輸入そして販売までを実施できるように一歩進んだ活動にしていきたい。また今年度実現できなかった海外から商品を輸入するための手続きや手法等について考察を深めて実施していきたい。今後は今年度のプログラムを振り返り、より質の高い高大連携を目指して計画的に活動を進めていきたい。

## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森県立弘前実業高等学校
事 業 担 当 者 名	長谷川 善弘、西舘 大輔、鈴木 瞳
事 業 ( 連 携 ) 名 称	商業科特別講座

### 1 目 的

探究学習を進めるための基盤を構築し、学術的な情報収集能力を高めることを目的とする。近隣大学の図書館を活用し、専門的な資料や最新の研究成果に触れることで、『ビジネス基礎』をはじめとする商業科目での学びを実践的なものとする。

### 2 実施日時・内容

令和7年10月10日（金）商業科1組 5、6時間目（13：25～15：15）

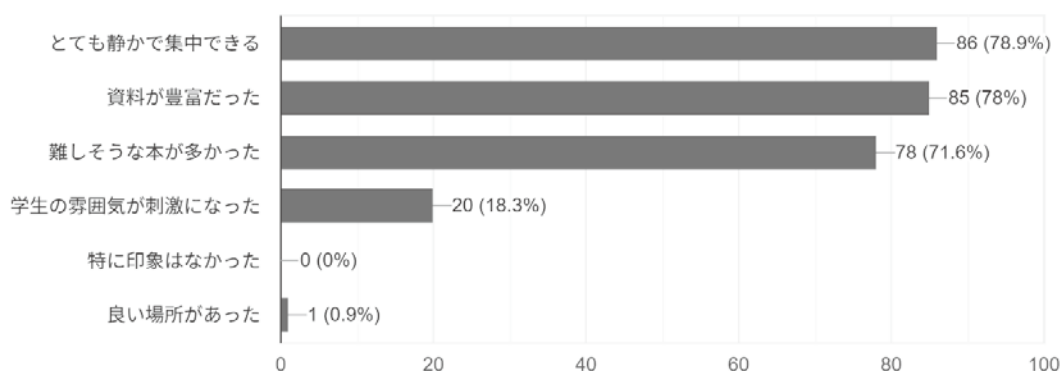
令和7年10月16日（木）商業科2組 5、6時間目（13：25～15：15）

令和7年10月23日（木）情報処理科3組 5、6時間目（13：25～15：15）

### 3 成果（生徒の反応や効果・課題など）

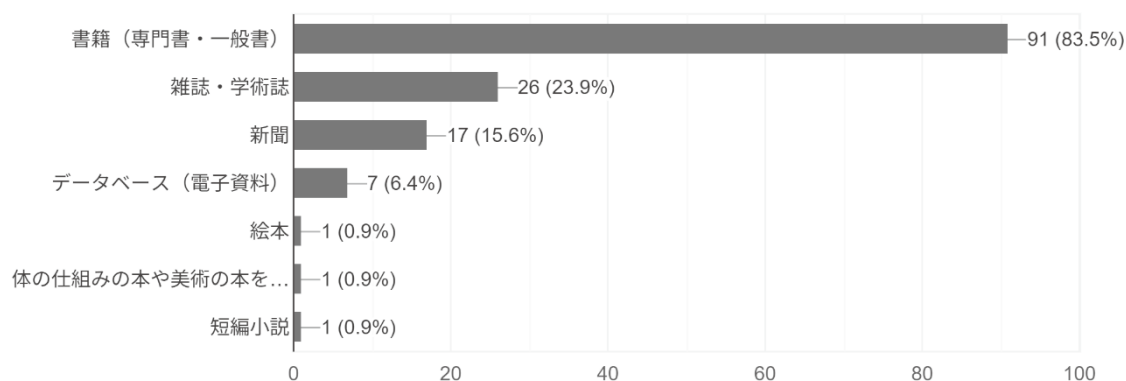
大学図書館を訪れて、どのような印象を持ちましたか？（複数選択可）

109件の回答



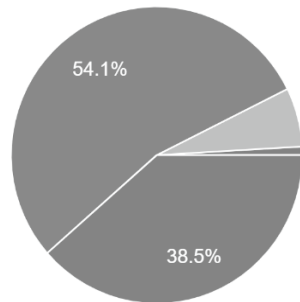
利用した資料の種類を教えてください（複数選択可）

109件の回答



### 商業科目の学びと、今回の図書館利用はつながっていると感じましたか？

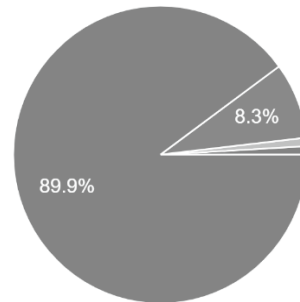
109件の回答



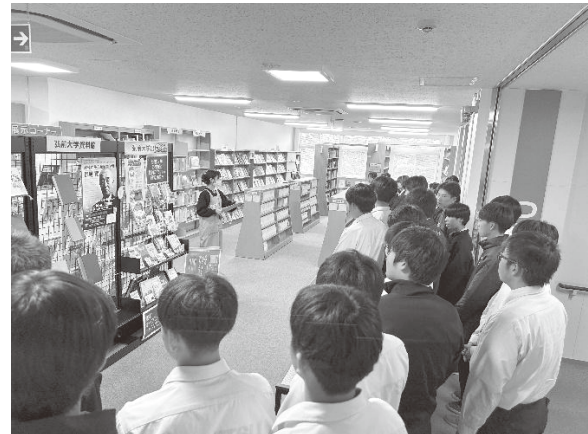
- とても感じた
- ある程度感じた
- あまり感じなかった
- まったく感じなかった

### 今後も大学図書館を活用したいと思いますか？

109件の回答



- はい
- いいえ
- 行く機会がなさそう
- 使える時には使いたい



本事業において、生徒は初めて大学の図書館を利用し、その規模の大きさに驚くとともに、学術的な資料へのアクセスの重要性を実感することができた。大学の図書館の利用を通じて、専門的な情報の収集方法やリサーチの基本について学び、探究的な学びへの意識が高まった。この経験は、今後の学習において、生徒自身の主体的な探求心を育むきっかけとなり、ビジネス基礎をはじめとする商業科目の学びをより深めるための土台を築くものとなった。今後は、生徒が学び得た知識や経験をさらに発展させ、探究的な学びを継続的に支援するために、定期的な指導とフォローアップを行い、学びの幅を広げていきたい。

## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森県立弘前実業高等学校
事 業 担 当 者 名	長谷川 善弘、西舘 大輔
事 業 ( 連 携 ) 名 称	情報処理科特別講座
<p>1 目 的</p> <p>大学での学びに繋げるため、情報に関するこれまでの学習内容がどのように発展していくかを体験し、さらに最新の情報技術やトレンドに触れることで、生徒の主体的な学びの促進及び進路決定の一助とする。</p> <p>2 実施日時・内容</p> <p>令和7年10月21日(火) 2、3時間目 (9:50~11:40) 情報処理科1年40名</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・AIの歴史と進化</li> <li>・生成AIの活用の仕方</li> <li>・生成AIの利用について</li> <li>・プロンプトについて</li> <li>・AI時代のリテラシーを考える</li> </ul> <p>令和7年10月22日(水) 2、3時間目 (9:50~11:40) 情報処理科2年38名</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生成AIを活用したプログラミング実習</li> <li>・生成AIの利用について</li> <li>・プロンプトについて</li> </ul> <p>講師 青森大学ソフトウェア情報学部 教授 角田 均 氏</p> <p>3 成果 (生徒の反応や効果・課題など)</p> <p><b>情報処理科1年生</b></p> <p>今回の特別授業を通じて、生徒たちの生成AIに対する理解と関心が大きく高まった。授業後のアンケートでは、生徒全員が「AIの仕組みや活用方法について理解が深まった」と回答しており、教育的効果が確認された。また、プロンプト作成のワークショップでは、全員が自らの言葉で指示文を考え、生成結果の違いを分析するなど、実践的な力を身につけることができた。さらに、授業をきっかけに自主的に生成AIを使った作品づくりや調査活動を始める生徒も現れ、探究心の芽生えが見られた。今回の授業を契機に、生成AIを活用した探究活動や課題研究への発展を図りたい。また、大学との継続的な連携を通じて、より高度な学びの機会を提供していきたい。</p> <p>《生徒A》生成AIを日常で使う今、使うにあたって気をつけなければいけないことや生成AIはどうやってできているのか、上手く使うためのAIとの関わり方を学ぶことが出来ました。</p> <p>《生徒B》近年はAIを頼る事がとても増えていると思います。それに伴った詳しい情報を知れたし、考えることができたので良かったと思います。</p> <p>《生徒C》生成AIについて、そもそもどういったものなのか、どういった歴史のなかでできたのか、どういう使い方をすれば良いのかについて学びました。自分自身、あまり生成AIを使うことがなく、どういったものなのかわかりませんでした。今回の特別講座で実際に使ってみるべきだなと思いました。ただ、便利なゆえ、頼りすぎたり、間違った使い方をしたりしないように適度に本当に使う場面なのかを見極めた上で使っていきたいと思いました。</p>	

## 情報処理科 2 年生

生成 AI の仕組みや活用方法についての講義、AI を活用したプログラミング実習、そしてプロンプト設計のワークショップを通じて、生徒たちは実践的かつ主体的に学びを深めることができた。また、生徒が AI に指示を与えながらコードを生成・修正する体験を通じて、AI との協働による開発の可能性を実感し、創造的な思考を働かせながら取り組む姿が見られた。さらに、プロンプト作成のワークショップでは、バンプコーディングの手法を用いて、指示文の工夫によって生成結果が変化することを体験し、生徒全員が自らの言葉でプロンプトを考え、出力の違いを分析するなど、実践的な力を身につけることができた。

《生徒 D》

今回の人工知能についての話を聞いて、今までのほとんど使っていて生成 AI の仕組みが、ちゃんとわかっていなかったのので、話を聞いてみて、どのようにして文章を作成したり、言葉を繋いでいたかがわかりました。今後、AI が中心の世界になると思うので、その世界の波の先頭に立てるように、高校生活での勉強の時間や、進学先を選ぶ時間を大切にしようと思いました。

《生徒 E》

生成 AI と聞いた時に AI で何か作り出すものなのかなと思っていただけ、AI のチャット GPT も生成 AI だということを知り、もうこんなに AI が世の中に浸透しているんだということを知り、怖いと思うし、同時にこの先の未来がどうなっていくのかも気になりました。使い方によってはいいものが作れるし、悪用すれば取り返しのつかないことになるなと思いました。また、自分の職業が AI に奪われてしまうのではないかという不安もあったけどそこは自分で調べてみようと思った。

《生徒 F》

AI について深く知ることができ、すばらしい経験をできたと思います。私は部活動でよく使うことがあるため興味深く聞いていました！ですが、AI だからといって本当のことを教えてくれているわけではないということ、使いすぎると依存してしまうことがあるためその辺を気をつけて使います！




【授業の様子 1 年生】



【授業の様子 2 年生】



## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森県立八戸商業高等学校
事 業 担 当 者 名	教諭 岩間 由香子      教諭 佐々木 郁子
事 業 ( 連 携 ) 名 称	財務会計Ⅱ選択者(14名)による財務会計論の学習
<p>事業報告</p> <p>1 目 的</p> <p style="padding-left: 20px;">未来のスペシャリスト育成のため、大学と連携を図ることでより高度な専門知識を学ぶとともに、地域産業に貢献できる人材育成を図る。</p> <p>2 実施日時・内容</p> <p style="padding-left: 20px;">対 象：財務会計Ⅱ選択者(14名)</p> <p style="padding-left: 20px;">内 容：</p> <p style="padding-left: 40px;">8月 1日(金) 9:00～12:00 「連結財務諸表の作成」      八戸学院大学 教授 田中 哲 氏</p> <p style="padding-left: 40px;">8月 4日(月) 9:00～12:00 「キャッシュ・フロー計算書」      八戸学院大学 准教授 幸田 威久矢 氏</p> <p>3 成 果 (生徒の反応や効果・課題など)</p> <p style="padding-left: 20px;">1日目は連結財務諸表の定義や作成手順を基礎から丁寧に学び、例題を用いた仕訳処理と財務諸表の作成を通じて、生徒は積極的に問題に取り組んでいた。講義では、身近な企業を例示しながら連結財務諸表の必要性を説明し、「支配獲得日」「1年目」「2年目」と段階的に学習を進めることで理解を深めることができた。経済社会の現状と関連づけた説明により、生徒は学習内容が実務に直結していることを再認識していた。</p> <p style="padding-left: 20px;">2日目は企業が黒字を計上しているにもかかわらず倒産する事例を通じて、キャッシュ・フロー計算書の必要性について分かりやすく説明していただいた。作成演習では、直接法と間接法による表記の違いや調整計算の構造を学び、単に作成できるだけでなく、各項目がどのように関連しているかについても理解を深めることができた。講義の後半では、キャッシュ・フロー計算書の8つ類型をもとに、実在企業を分析し、優良企業・成長企業・衰退企業等の判別を行った。キャッシュ・フロー計算書から企業の状態を読み取ることができる点に、生徒は強い関心を示していた。もう少し時間があればさらに深い理解と実践的な応用が可能であったと感じる。</p> <p style="padding-left: 20px;">今回の講義を通じて、連結財務諸表およびキャッシュ・フロー計算書の役割、作成方法、について体系的に学ぶことができ、生徒にとって非常に有意義な学習機会となった。</p> <p style="padding-left: 20px;">《活動の様子》</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">    </div>	

令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森県立八戸商業高等学校
事 業 担 当 者 名	教諭 榎 祥吾 教諭 岩間 由香子
事 業 ( 連 携 ) 名 称	商業科「マーケティング」における八戸学院大学との連携事業

事業報告

1 目 的

商品の特性を効果的に伝え、理解してもらうための方法を学び、商品と顧客のミスマッチを防ぐためにどのような準備をするべきかを習得するため八戸学院大学の教授を招聘する。

2 実施日時・内容

対 象 : 3学年商業科 マーケティング 受講生徒 (56名)

内 容 : 講師 八戸学院大学 特任教授 堤 静子 氏

第1回 令和7年 8月26日(火) 5、6校時

「商品販売のための準備Ⅰ」

第2回 令和7年 9月11日(木) 5、6校時

「商品販売のための準備Ⅱ」

3 成 果 (生徒の反応や効果・課題など)

八戸学院大学地域経営学科の堤静子特任教授を講師に迎え、「商品販売のための準備—マーケティングの発想と展開—」をテーマに特別講義を実施した。第1回の講義では、マーケティングの歴史的背景から現代に至るまでの戦略の変遷について、コカ・コーラやP&Gなどの事例を交えながら説明があり、生徒たちは興味深く耳を傾けていた。後半では、ポジショニングステートメントや4Pフレームワーク、ポジショニングマップの意義と作成方法について学び、グループごとに商品企画を立案。ターゲットやコンセプト、訴求ポイントを明確にしなが、独自性のあるアイデアを発表した。


演習では、各班が考案した商品や企画について、4P分析を通じて価格設定や流通方法、販売促進策を具体化。競合商品との比較を通じてポジショニングマップを作成し、自社商品の強みや市場での位置づけを視覚的に捉えることができた。最終段階では、広告・販売における「訴求力」について、デザイン性やキャッチコピーの魅力度、シズル感などの評価項目を基に、販売時の口上を考案。演習を通じて段階的に理解を深めた成果が発表に表れていた。

今回の講義を通じて、生徒たちはマーケティングの基本的な考え方から実践的な商品企画・販売戦略までを体系的に学び、今後の学習や活動に活かせる貴重な経験となった。

《 活動の状況 》



## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森県立八戸商業高等学校
事 業 担 当 者 名	教諭 藤ヶ森 誠司
事 業 ( 連 携 ) 名 称	情報処理科 I T 講座
事業報告	
1 目的	
<p>未来のスペシャリスト育成のため、大学と連携を図ることで、I T 業界における職業理解を深め、情報化社会において必要な知識と技術について学ぶとともに、地域産業に貢献できる人材育成を図る。</p>	
2 実施日時・対象・講師・内容	
<p>日時：令和8年1月26日（月）8：50～10：40 ※リモート開催          対象：情報処理科 2年（30名）          講師：八戸工業大学工学部工学科システム情報工学コース 教授 小久保 温 氏          内容：「I T 業界の職業と今後の動向」</p> <p style="padding-left: 40px;">(1) I T の歴史と会社 (2) ソフトウェア開発の仕事の様子          (3) I T のトレンド (4) DX (5) 生成A I (6) 進路について</p>	
3 成果（生徒の反応や効果・課題など）	
<p>本校情報処理科の生徒が情報分野の最新知識に触れることで、情報系の進路を選択する生徒の増加につなげたいと考え、情報処理科2年生を対象に「I T 業界の職業と今後の動向」と題した講義を実施した。</p> <p>「I T の歴史と会社」では、コンピュータの進化の過程を学ぶことで、時代とともに変化する顧客のニーズを理解し、企業や仕事に関心を持つきっかけとなった。「ソフトウェア開発現場の実際」では、アプリ制作における受注から納品までの流れを通して、開発工程や価格設定について具体的なイメージを持つことができた。また、商談において現実的な内容にまで落とし込んだ話し合いができることこそが、真のコミュニケーション力であることを学んだ。「I T のトレンド」では、企業で求められているDX人材の現状や生成A I の仕組み、さらに著作権・肖像権、情報漏洩に関する注意点などについて説明していただき、特に進歩の著しい生成A I に関する最新動向への理解を深めることができた。「進路について」では、I T 系の職業を中心に、情報分野における多様な進路について紹介していただいた。</p> <p>講義を通して、生徒はI T 業界や情報分野の仕事をより身近に捉えるようになり、授業後には「I T 系の仕事に興味を持つことができた」「生成A I についてさらに学びたい」といった声が聞かれた。情報分野への関心が高まり、進路選択を主体的に考える姿勢が見られ、学習意欲の向上につなげることができた。今後も地域の大学や企業との連携を一層深め、地域産業の将来を担う生徒の興味・関心を高められるよう、情報分野の最新知識を学ぶ機会を継続的に実施していきたい。</p>	
＜講座の様子＞	
	

令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森県立八戸商業高等学校
事業担当者名	教諭 藤ヶ森 誠司
事業（連携）名称	情報処理科データサイエンス講座

事業報告

1 目的

未来のスペシャリスト育成のため、大学と連携を図ることで、IT業界における職業理解を深め、情報化社会において必要な知識と技術について学ぶとともに、地域産業に貢献できる人材育成を図る。

2 実施日時・内容

日時：1回目 令和8年1月22日（木）9：50～11：40 ※リモート開催

2回目 令和8年1月29日（木）9：50～11：40 ※リモート開催

対象：情報処理科 1年（39名）

講師：青森大学 ソフトウェア情報学部 教授 黒田 茂 氏

内容：1回目「データサイエンスの基礎」

- ・データサイエンスとは
- ・データを読む力
- ・データを説明する力
- ・データを分類する力

2回目「データサイエンスの活用」

- ・オープンデータの利用
- ・データサイエンスの実際の流れ
- ・グループワーク RESAS の演習（滞在人口率、From-to 分析、流動人口メッシュ）

3 成果（生徒の反応や効果・課題など）

本校の情報処理科では、2年生から課題研究を履修し、グループ単位でテーマを設定して調査研究に取り組んでいる。そのため、データサイエンスの知識を活用してデータの見方を学び、客観的なデータを分析し、その結果を課題研究に生かすことを目的として、データサイエンス講座を実施した。

1回目は「データサイエンスの基礎」として、デジタル時代に必要なデータリテラシーを身に付ける重要性や、データサイエンスに必要な力として「データを読む力」「説明する力」「分類する力」などについて紹介していただいた。データを正確に読み解くために注意すべき点や考慮すべき事項について、クイズを交えながら理解を深めることができた。

2回目は「データサイエンスの活用」として、RESAS を用いた「ビジネス視点のデータ活用」を体験した。演習では、データを分析する過程で「なぜ」を自問し、別の角度から分析を行うことを繰り返すことで理解が深まり、全体像を把握できるようになるとともに、データから根拠をもって答えを導き出す力が養われることを学んだ。

生徒の様子から、データ分析を通してどのような結果が導き出されるのかを考えながら取り組むことで、新たな発見が得られる点に興味を持った生徒が多かったと感じられた。講座内容をひとつのきっかけとして、課題研究のテーマ設定や今後の授業へとつなげていきたい。

<講座の様子>



令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	青森県立三沢商業高等学校
事 業 担 当 者 名	教諭 平野 博文
事 業 ( 連 携 ) 名 称	青森中央学院大学訪問

事業報告

1 目 的

県の事業である「あおもり創造学」による魅力発信・地域課題解決プログラムの一環として、令和5年度に高大連携協定を締結した青森中央学院大学に訪問し、講義を通じて大学の専門教育体系や研究の紹介、仮説設定、検証方法と考察の仕方などの解説と課題研究への助言を学び、長期休業中のフィールドワークを効率的に行うための足掛かりとする。

2 実施日時・内容

日時 令和7年5月28日(水) 対象 2学年商業科60名

内容 特別講義①「課題設定の方法」 講師：経営工学部 博士 市川 聖 氏  
特別講義②「アンケートの取り方」 講師：経営工学部 博士 市川 聖 氏  
ほか、施設見学など

3 成果(生徒の反応や効果・課題など)

「課題設定の方法」の講義では、市川先生が数か国で行った研究事例を紹介され、実際に現地の生活や文化を感じることで課題解決を目指すことが大切だとお話されました。

(以下、生徒の感想)

- ・積極的に現地に足を運んで自分の目で情報を収集して課題設定をしようと思った。
- ・課題は身の回りにたくさんある。「現場を見る目」の力を付けたい。
- ・課題を設定するポイント、意味、方法など、学んだ事をこれから活用していきたい。

「アンケートの取り方」の講義では、アンケートは仮説を中心に作成し、その後の集計、計測方法を逆算して設計することを常に意識して欲しいということや、ネット調査によるアンケートでは、インターネットを使いこなせる年代に限られるため、そこで「偏り」が生じることなどをお話しされました。(以下、生徒の感想)



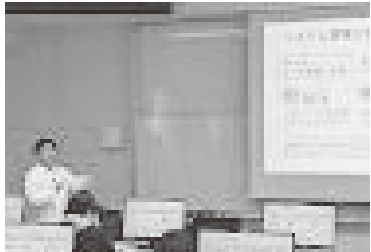


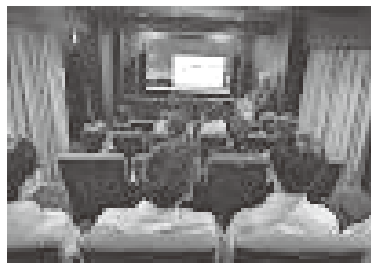
- ・質問は年齢、性別は必須、的を絞って聞くことが大事だと学んだ。
- ・最近学習したPDCAサイクルの意味がわかった。
- ・e-statなどの統計データを活用しながら研究活動をしていきたい。

夏休み中の活動に生かせる内容であったと確信しているが、その後の授業時数がなかなか確保できないこともあり、学んだ事をまだ十分に活かし切れていないように感じるが、今後や3年生での課題研究活動に期待したい。また、施設見学をさせていただき、生徒の志望進路選択の一助になったと思われる。



(特別講義、施設見学の様子)

令和7年度 高大連携推進事業報告

学 校 名	青森県立三沢商業高等学校
事 業 担 当 者 名	教諭 飯田 奈緒子
事 業 ( 連 携 ) 名 称	課題研究における八戸工業大学との連携
<p>事業報告</p> <p>1 目 的</p> <p>情報処理科の「課題研究」では、学習した情報処理やプログラミング、データベースやネットワークの知識を活用して、情報処理科としての地域活性化を目標とした研究活動に取り組んでいる。この研究活動では、ICTイベント企画運営、Webサイト製作、動画コンテンツ作成、商品企画、広報活動等に関する課題を設定した活動を行っており、八戸工業大学システム情報工学コースの先生方より指導・助言をいただくことで、研究活動の改善を図り、研究発表でのコミュニケーション力を養う。</p> <p>2 実施日時・内容</p> <p>(1) 課題研究指導Ⅰ</p> <p>日時 令和7年5月28日(水) 9:30~14:40</p> <p>会場 八戸工業大学</p> <p>対象 情報処理科2年(28名)</p> <p>内容 課題研究の事前指導</p> <p>「課題研究とは」「大学とは」 講師 桶本 まどか 氏</p> <p>「AIについて」 教授 小久保 温 氏</p> <p>「システム情報工学コースの概要説明」学科長補佐 教授 伊藤 智也 氏</p> <p>システム情報工学コースの施設見学、研究紹介、Q&amp;A</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>(桶本先生の講義)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(小久保先生の講義)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(伊藤先生の講義)</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>(VR体験)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(施設見学)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(施設見学)</p> </div> </div> <p>(2) 課題研究指導Ⅱ</p> <p>日時 令和7年10月30日(木) 13:20~15:10</p> <p>会場 青森県立三商業高等学校</p> <p>対象 情報処理科3年(36名)</p> <p>講師 教授 藤岡 与周 氏</p>	

内容 研究活動報告指導

課題研究の部会内発表へ向けた5班の発表、質疑応答、指導助言



### (3) 課題研究指導Ⅲ

日時 令和7年12月12日(金) 10:30～15:30 (予定)

対象 研究発表 5班(3年各部会代表)

研究報告 10班(3年各部会代表以外)

研究報告 3名(2年各クラス代表)

講師 教授 藤岡 与周 氏(予定)

内容 校内課題研究発表会の審査

各部会(市役所・農協・漁協・商工会・観光ICT)の代表5班による、校内の課題研究発表会の審査および講評をお願いしている。来年度の県大会の学校代表となる2班を選出し、講評をしていただく予定である。

## 3 成果(生徒の反応や効果・課題など)

(1) 2年生の課題研究1単位は「あおり創造学」に取り組んでいる。昨年度は情報処理科のみ11月に八戸工業大学に訪問し、半日の時間帯で実施したが、今年度は「あおり創造学」の一環として商業科(青森中央学院大学)と同日に、科別に1日の時間帯で実施した。

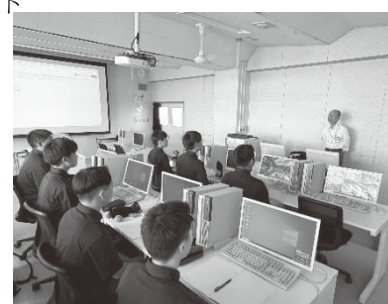
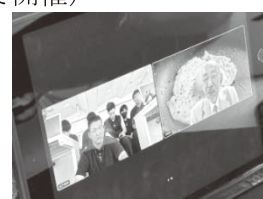
生成AIやVR体験等の最新の設備等に触れ、興味関心を刺激され、学習のモチベーションが上がったようである。「課題は身近なところから考えていけばいいことが分かった」「自分たちのやりたいことを考えるのが楽しみになった」「大学の研究内容を知れて将来のイメージができた」「自分の将来についてより具体的に考えようと思った」「生成AIのしくみや弱点、注意点を知れてよかったし興味がわいたので自分でも使ってみたい」など、多くの反響があり、3年生の課題研究へつながる事前指導をしていただけた。

(2) 昨年度に藤岡先生の事前指導を受けた3年生の生徒による部会発表会へ向けての発表では、藤岡先生から多くの気づきを与えていただいた。「テーマ設定と到達目標の結びつきがわからない」「数値目標の根拠がわからない」など厳しい指摘を受けたが、自分たちの研究内容や考え方を振り返るよい機会となった。また、後日班毎の具体的なアドバイスをいただき、発表へ向けて各班とも改善に取り組んでいた。生徒からは「できなかったと報告ではなく、できたところをしっかりと報告して、できなかったところをどうすればいいかももう一度考えようと思う」「なぜその数値目標なのか、きちんと根拠を示して説明したいと感じた」「何を訴えたいかに力を入れてプレゼン資料を直そうと思った」などの感想が寄せられた。

特別講義の実施により、生徒は意欲的に課題研究の活動に取り組んでいる。今後とも生徒の研究活動への支援を継続していただきたい。

## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	下山学園高等学校
事 業 担 当 者 名	山 下 恭 平
事 業 ( 連 携 ) 名 称	「課題研究」における青森大学の特別出前講義
<p>事業報告</p> <p>1 目 的</p> <p>商業科の課題研究において、ECサイトの企画運営についての研究活動を進める班が、ECサイトの具体的な作成や運営方法を学ぶため、出前講座を依頼した。</p> <p>2 実施日時・内容</p> <p>講 師：青森大学 ソフトウェア情報学部 教授 角田 均 氏</p> <p>講義内容：ECサイトの企画運営に関する出前講義（通年・2年連続を予定）</p> <p>場 所：下山学園高等学校 第2情報処理室（初回のみオンラインにて開催）</p> <p>受講生徒：商業科2年生 7名</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">① 令和7年 6月25日（水）13：40～14：10</p> <p>リモートによる打ち合わせ。角田先生と研究活動の概要について確認。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">② 令和7年 7月25日（金） 9：00～11：50</p> <p>ECサイト運営の目的や課題等に関してSWOT分析を、Googleドキュメントを用いてコンピュータ上で行った。その後問題点を分別し、やることリストを作成した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サイト作りの下調べ      ・法律の勉強</li> <li>・資金の確保                ・仕入先の確保</li> <li>・サイト作成                ・実際に運営する</li> </ul> <p>今後の活動に向けて、既存のECサイトのサーベイ（調査研究）を夏期休暇中に課題とした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ショップごとの特徴、ショップ数、規模、利用者数</li> <li>○ 売れてるもの、売れてないもの</li> <li>○ 開設・運営方法、料金</li> </ul> <p>上記各項目をメンバーが分担して大手ECサイトの調査研究作業をする方針を確認。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">③ 令和7年 8月18日（月） 9：00～11：50</p> <p>各自が調べた大手ECサイト（アマゾン・楽天・メルカリ）の情報を発表し、既存のECサイトの売上や利用者数、売れ筋商品などについて発表を行った。また既存のECサイトに店舗を開設する場合の費用その他についても調べ、費用についても講義でアドバイス頂いた。比較的費用が少なく済むBaseやSquare等のアカウントを各自作成していく方針を決定した。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">④ 令和7年 9月10日（水）13：30～14：20</p> <p>Baseを用いていくという方針を決定した。店名や商品リスト等の店舗運営に必要な事項を検討した。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">⑤ 令和7年10月29日（水）13：30～14：20</p> <p>オンラインにて提供頂ける商品情報についての確認。</p> <p>3 成果（生徒の反応や効果・課題など）</p> <p>Googleドキュメントを使い、自分たちで考え、他者の意見も参考に一つのものを作りあげていくという主体的対話的な活動を基盤に講義をいただき自主性や主体性を育むことができた。</p>	



## 令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	下山学園高等学校
事 業 担 当 者 名	山 下 恭 平
事 業 ( 連 携 ) 名 称	「課題研究」における青森中央学院大学の出前講座

### 事業報告

#### 1 目 的

課題研究（3年・2単位）で学校の「教育相談」を受けた経験のあるメンバーで構成された班が、「カウンセリングの利用促進と経済効果」というテーマで研究活動を行っている。専門的な知識を身につけ、2学期の仮説の実践に繋げる目的で出前講座を依頼した。

#### 2 実施日時・内容

日 時：令和7年 7月29日（火）10：30～12：20

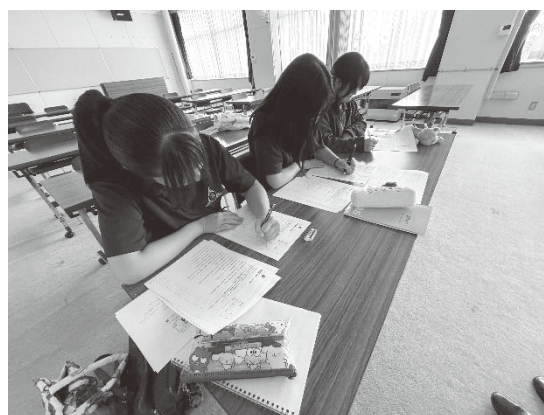
場 所：下山学園高等学校 コミュニケーションルーム

内 容：カウンセリング利用促進について・心理テストについて

講 師：青森中央学院大学 川添 郁夫 氏

#### 3 成果（生徒の反応や効果・課題など）

精神疾患を持つ人の特徴、幻覚・妄想が出現する4条件、諸外国と比べた精神疾患を有する患者の認知件数、高校生がスクールカウンセラーを利用しない理由等、研究活動と合致した内容の講義を受けることができ、とても有意義な時間となった。講義の中で触れられた、カウンセリングを促進するためのポスターの作成例を参考に、自分たちでポスターを作成し、校内に掲示するなど、その後の活動に応用させることができた。



令和7年度 高大連携推進事業報告書

学 校 名	下山学園高等学校
事業担当者名	教諭 半田 莉玖斗
事業（連携）名称	3年：課題研究 出前講座 モチベーション理論について
<p>事業報告</p> <p>1 目 的</p> <p>商業科の課題研究において、学校生活におけるモチベーションについて研究を進めている。その中で当初は経営学におけるモチベーション理論を各自学習し、実際の生活に結び付けることを考えていたが、実際に大学においてモチベーションの研究をされている先生から授業を受講し、自分たちの研究に結び付けることを目的とする。</p> <p>2 実施日時・内容</p> <p>令和7年10月1日（水）9：00～9：45</p> <p>テーマ：モチベーションについて</p> <p>講師：青森中央学院大学 経営法学部 楠奥 繁則 氏</p> <p>生徒数：商業科（課題研究 グループ）3名</p> <p>内容：バンデューラの自己効力感理論について</p> <p>3 成果（生徒の反応や効果・課題など）</p> <p>この研究を始めるにあたり、当初は経営学におけるマクレガーのX・Y理論やマズローの欲求5段階理論といった点に関して学習を進めていた。しかし、これらは前述したように経営学における従業員やメンバーに対してのアプローチが多く、学校生活につなげていくのが難しいということ学んだ。</p> <p>そこで、楠奥先生より「自己効力感理論」について学んだ。これは、自分の成功体験やほかの人の成功体験を見ることで自分もできるんだという気持ちにする「自己効力感」と、頑張れば将来的にいいことがあるという「結果期待」という2つの要素を組みあわせてモチベーションを高めるという考え方である。</p> <p>現在、生徒は主に学校生活において、普段の授業や課題、部活動での厳しい練習に対して、この理論を当てはめて研究を進めていくことができるのではないかと考え、研究を深めている状況である。</p>	

# 県商研主催事業報告

## 令和7年度 第17回全国商業教育指導者研修会

青森県立弘前実業高等学校 教諭 西 館 大 輔

- 1 期 間 令和7年7月30日（水）～8月1日（金）3日間
- 2 会 場 全商会館（東京都）
- 3 研修概要

		午 前		午 後	
7/30 (水)	開講式	理事長 講話	ワークショップ 説明・情報交換	講演	各県情報交換 ワークショップ
7/31 (木)	文部科学省講話		ワークショップ	講演	ワークショップ
8/1 (金)	講演		ワークショップ	ワークショップ 結果発表	閉講式

### 4 研修日程

1日目：7月30日（水）

- 9：30～9：40 開講式
- 9：40～10：10 理事長講話 東京都立大田桜台高等学校 校長 小川 孝 氏
- 10：10～10：40 ワークショップ説明
- 10：40～11：00 写真撮影
- 11：10～12：10 ワークショップ（グループ別）「各県情報交換」
- 13：10～14：40 講演 専門高校教育の在り方に関する一考察  
～中教審「高等学校教育の在り方WG 審議まとめ」を参考に～  
埼玉工業大学 工学部 基礎教育センター  
講師 教授 清水 雅己 氏
- 14：50～17：00 ワークショップ（グループ別）「商業教育の課題」

2日目：7月31日（木）

- 9：00～10：00 文部科学省講話  
講師 文部科学省 初等中等教育局参事官（高等学校担当）付  
産業教育振興室 教科調査官  
国立教育政策研究所 教育課程研究センター  
研究開発部 教育課程調査官 岩館 良伸 氏
- 10：10～12：10 ワークショップ（グループ別）「商業教育の魅力」
- 13：10～14：40 講演 生成AIで、教育、そして経済・社会はどう変わる？  
講師 東洋大学 経済学部 元教授 松原 聡 氏
- 14：50～15：50 ワークショップ（グループ別）「商業教育の魅力」
- 16：00～17：00 各班の情報共有「商業教育の課題×商業教育の魅力」（全体会）

3日目：8月1日（金）

9：00～10：30 講演 探究的学びを支えるコーチング技法  
～商業教育に生きる対話の力～

講師 千葉商科大学 商経学部 教授 川崎 知巳 氏

10：40～12：10 ワークショップ（グループ別）

「商業教育の良さを伸ばすため明日から商業高校は何をすべきか」

13：10～13：50 ワークショップ（グループ別）

「商業教育の良さを伸ばすため明日から商業高校は何をすべきか」

14：00～15：30 各班のワークショップまとめ発表（全体会）

「商業教育の良さを伸ばすため明日から商業高校は何をすべきか」

15：40～16：00 閉講式

## 5 研修成果

### 【理事長講話】「全商協会と商業教育」

現代社会の変化を踏まえつつ、これからの商業教育の方向性について多角的な視点から語られた。冒頭では、「商業教育の目的は、単なる知識や資格の習得ではない」との指摘があり、特に重要なのは、「社会とつながる力」や「非認知能力」といった、目には見えにくい将来にわたって必要とされる力を育むことだと強調された。現在は、「VUCAの時代」「マルチステージの時代」と呼ばれ、将来の見通しが立てにくく、就職観も変化している。はじめから転職を視野に入れてキャリア形成を考える若者が増えている。このような変化は、商業教育にとって新たな可能性を開く好機であると捉えられる。そのため、商業教育においては、探究学習と資格取得を両輪とし、両者のバランスを保つことが求められる。また、生徒が「失敗を経験する」ことも重要であり、探究活動の中で試行錯誤を重ねることが成長につながる。商業教育は「人づくり」だけで終わるものではなく、「商業を学ぶ価値」を社会に示し続ける必要があると指摘された。そのためには、学校内で完結しない柔軟な教育体制の構築が不可欠である。商業高校の3年間だけで専門性を高めるには限界があり、外部の専門機関との連携によるカリキュラムの開発が必要だとされた。さらに、教育を取り巻く環境も大きく変化している。少子高齢化、環境問題、技術革新、グローバル化、感染症など、複雑な課題に教育は対応していく必要がある中で、論理的思考力、批判的思考力、迅速な意思決定力などの「実践的思考力」の育成が求められている。加えて、生成AIの普及により、「知識量＝優秀さ」という従来の価値観が見直されつつあり、今後は知識をどう使い、どう活かすかが評価される時代になるとされた。講演の締めくくりとして、「教師が教える授業」から「生徒が主体的に学ぶ授業」への転換の必要性が強調された。商業教育は、こうした教育改革の先陣を担うべきであるという言葉が非常に印象に残った。

## 【講演】専門高校教育の在り方に関する一考察

～中教審「高等学校教育の在り方WG 審議まとめ」を参考に～

少子化の進展や教育ニーズの多様化が高校教育、とりわけ専門高校教育に及ぼす影響について、多角的に論じられた。はじめに、全国的な少子化の影響で学校数が減少し、多くの学校で募集人員が定員割れとなっている現状を説明した。また、通信制高校の生徒数増加や、中高一貫教育の拡大も近年の重要な動向であり、これらの変化は高校教育全体に大きな影響を与えていると指摘した。こうした環境の変化のなかで、専門高校が果たすべき役割や存在価値の再評価が必要であると強調した。特に商業高校については、従来の教育内容や手法の見直しが求められ、「私たちの普通は世間の普通ではない」という認識を持つことが重要であると述べた。これに関連し、マネジメント力やマーケティング力など、実社会で即戦力となる力の育成が今後ますます重要になるとの見解が示された。また、文部科学省の高等学校教育の在り方ワーキンググループにおける議論の紹介があり、産業界との連携強化や、社会・技術の変化に対応した学びの切り口の検討が進められている現状が報告された。これに伴い、教育内容のアップデートが不可欠であり、現場のニーズや社会の要請に即したカリキュラムの構築が求められている。さらに、高校側が中学生およびその保護者の期待やニーズを的確に把握しているかを再検討する必要性も示された。時代の変化に応じた知識・技術の提供は、専門高校が地域社会において存在価値を発揮するための重要な要素であるとされた。最後に、専門高校は変化し続ける社会に対応するため、学校自体も柔軟に進化し続けなければならないとの見解が示され講演は締めくくられた。今後も社会の動向を的確に捉えながら、専門高校の教育の質と価値を一層高めていく努力が求められる。

## 【文部科学省講話】

日本の教育現場におけるデジタル活用の現状について報告があった。OECD加盟国の中で日本は最下位に位置しているが、これは逆に「伸びしろが大きい」との見方も示された。現在、文部科学省は「個別最適な学び」の実現を目指し、児童・生徒一人ひとりに合った学習環境の整備を進めている。また、深い学びの重要性を再確認し、知識のインプットとアウトプットのバランスが効果的な学習に不可欠であることが強調された。講話の後半には、グループワークが実施され、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた方策および指導助言の工夫」をテーマに、参加者間で指導方法や評価の在り方について活発な議論が行われた。協働学習を促進しつつ、個別最適化をどう実現するかという課題に対して、様々な視点から意見が交わされ、指導の工夫が求められていることが共有された。また、「指導と評価の一体化」についての重要性についても取り上げられ、育成したい資質・能力を踏まえた指導計画と評価計画のバランスを的確に見取ることが求められているとされた。単元指導では、ゴールを明確に設定し、その目標に到達する過程は生徒一人ひとり異なってもよいという柔軟な姿勢が必要であるとされた。さらに、生徒自らの「見方・考え方」働かせるためには、教員からの問いかけが極めて重要であり、問いの質やタイミングが適切に機能しているかを常に点検する必要性があるとされた。教員の問いかけが生徒の思考を促す重要な役割を果たすため、その質を常に検証する姿勢が今後一層求められる。

### 《グループワーク内容》

問い グループの先生方で課題を共有し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化の充実に向けた方策と、指導助言の工夫を考える。

背景 グループワークに際し、7項目が示された。

進行 ①科目『簿記』の学習指導における「共通の課題」を発見する

②上記に対して、「課題解決に向けた方策」を考える

③上記を受けて、学校への「指導助言の工夫」を考える



### 【講演】生成AIで、教育、そして経済・社会はどう変わる？

生成AIの急速な進化が教育現場や社会、経済に与える影響について、未来を見据えた視点から多角的に論じられた。冒頭では、AIの進化段階を示すキーワードとして、AGI（汎用人工知能）、ASI（超知能）、RSI（自己改善型AI）が紹介され、AIが単なる道具ではなく、自律的かつ創造的に学習・成長し続ける存在へと近づいていることが示された。特に、ここ1年の生成AIの性能向上には著しく、言語処理、画像生成、データ分析などの分野において、従来の常識を覆す成果が次々と現れている。こうした時代の到来を象徴する比喻として、講演では「副操縦士」と「怪獣」という二つの言葉が登場した。「副操縦士」とは、誰もが常に偏差値の高いAIとともに行動する未来を示すものであり、AIを単なるツールとしてではなく、思考のパートナーとして扱う時代が到来しつつあることを意味している。一方で「怪獣」とは、生成AIが膨大な電力を消費する存在であることへの警鐘であり、技術の進歩が環境負荷やエネルギー問題と密接に関わっていることにも注意を促すものであった。このような変化の中で、「教育は何を目指すべきか」という問いが提起された。生成AIの発展により、これまで「人間しかできない」とされてきた作業や判断の一部が自動化される局面に入っている。そうした中で、学校教育が果たすべき役割は、従来の知識注入型の教育から、AIと共に課題解決に取り組む力や、倫理的判断力、価値創造力といった人間固有の能力を育む方向へと転換していく必要がある。とりわけ商業教育の分野では、生成AIをツールとして活用できる人材の育成が、今後の教育の重要なテーマとなる。企業活動においてAIの利活用が当たり前となる未来に向けて、商業高校における教育もその価値を問い直す時期を迎えている。単なるツールの使い方を教えるのではなく、生成AIを活用して何を成し遂げるのか、そのために必要な思考力や構想力、そしてAIを倫理的に扱うリテラシーをどう育てるかが問われている。さらに、講演の中では、シンギュラリティ（技術的特異点）についても言及がなされた。これまで2045年頃と予測されていたこの技術的到達点が、生成AIの進化スピードによって大幅に早まる可能性があると言及され、教育界はその可能性を前提とした柔軟かつ迅速な対応が求められている。AI時代の教育とは、「AIでは代替できない人間の価値をどのように育むか」という問いへの答えを探る営みであるといえる。生成AIという強力なパートナーとともに生きる社会において、どのような人材を育てるかが、今後の教育における最大のテーマである。

## 【講演】 探究的学びを支えるコーチング技法 ～商業教育に生きる対話の力～

商業教育における探究的な学びの質を高める手法として「コーチング技法」に焦点が当てられた。特に、課題解決型学習を支える“対話”の在り方について、教員の支援方法や問いの質の重要性が詳しく語られた。探究学習は、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という4つのステップを繰り返す構造となっており、その過程で生徒の思考の深まりを支援することが教員の大きな役割となる。なかでも「課題の設定」は、学習の方向性を定める起点であり、教員がどのように問いを設計するかが学びの質に直結すると指摘された。今回の講演では、思考を引き出す技法として「GROWモデル」に基づくコーチングが紹介された。GROWモデルは次の4段階で構成される。G

(Goal)：目標の明確化、R (Reality)：現状の把握、O (Options)：選択肢の洗い出し、W (Will)：意志決定と行動計画の確定である。このフレームを活用することで、生徒が自己の考えを言語化し、内面での対話を深める手立てとなる。講演では、このモデルに沿ったグループワークも行われ、参加者がコーチングの視点を持って問いかけを設計・実践する場が設けられた。コーチングを通じた支援では、生徒に「言語化させること」が極めて重要であるとされた。問いかけによって漠然とした考えや感情を表出させることが、探究の深化につながる。なお、すぐ答えが出る問いは、表面的な理解であり、逆に沈黙が生まれる場合は、生徒が深く内省している証と捉えるべきであるとも述べられた。また、対話においては、非言語の要素（表情、声のトーン、姿勢など）によって、教員の「助言」が「指示」として受け取られてしまう危険性も指摘された。相手の感情や状況を見極め、生徒に合った「スモールステップの問いかけ」を行うことが求められる。コーチングは単なる技術ではなく、生徒との対話を通じて信頼関係を築き、思考を深める営みであり、継続的に学び続けていく価値のある実践だと改めて認識した。

## 6 おわりに

本研修を通じて、商業教育が抱える多様な課題とその背景を多角的に捉えるとともに、解決に向けた多くのヒントを得ることができた。特に、現代社会における不確実性や急激な変化を象徴するVUCAの時代において、非認知能力の育成や探究的な学びの重要性が一層高まっていることを再認識した。これらは単なる知識の習得を超え、生徒が自ら考え、判断し、行動する力を育むための不可欠な要素である。また、生成AIをはじめとするデジタル技術の急速な進展により、教育内容や教員の役割に大きな変革を迫っていることも明らかとなった。AIを活用しながらも、人間ならではの対話力や思考支援力をいかに高めていくかが、今後の商業教育の質を左右するといえる。教員は単に知識を伝達する立場から、思考の促進者や内面の対話者へと役割が変わり、生徒の主体的な学びを支える能力の向上が求められている。さらに、地域間の連携強化や情報共有の重要性も大きな収穫であった。商業教育の魅力や価値を正しく社会に伝える情報発信が十分と言えず、効果的なターゲット設定や広報戦略の構築が急務であるという課題も浮き彫りになった。未来の商業高校の在り方を模索する中で、従来の枠組みにとらわれない新たな視点や発想を取り入れることが不可欠である。本研修で得た知見と気づきを今後の実践へと結びつけることで、商業教育の質的向上と持続的な発展に寄与できると確信している。今後は、技術革新や社会環境の変化に柔軟に対応できる教育体制の整備とともに、地域間の連携強化を推進し、多様な課題を共有し解決策を協働で模索しつつ、変動の激しい社会を生き抜くための力強い人材育成に貢献していきたい。最後に、本研修に参加させていただき、多くの学びと気づきを得ることができました。貴重な機会を賜り、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 令和7年度 産業・情報技術等指導者養成研修（商業）

青森県立大間高等学校 教諭 三 橋 壮 大

- 1 期 間 令和7年7月28日（月）～8月1日（金）
- 2 場 所 千葉商科大学（千葉県市川市）
- 3 研修概要と講師

7月28日（月） 10:00～17:00	<p>午前【開講式】</p> <p>【講義】「指導と評価の一体化」のための学習評価の在り方・進め方 千葉商科大学商経学部 准教授 田中 圭</p> <p>午後【講義】「情報I」の代替科目としての「情報処理」の指導の在り方 千葉商科大学商経学部 教授 西村 修一</p>
7月29日（火） 9:00～17:00	<p>午前【講義】企業から学ぶ～産官学連携授業の取組（Eコマース）① ② 楽天グループ株式会社 地域創生事業 地域政策戦略課 矢崎 花和</p> <p>午後【講義】マーケティング分野の授業デザインと学習評価① ② 富山県教育委員会教育みらい室 県立高校課 指導主事 山科 博子</p>
7月30日（水） 9:00～17:00	<p>午前【講義】C-1研修を受講した後の授業と評価の改善 青森県立三沢商業高等学校 教 諭 佐藤 雅哉</p> <p>【講義】起業家から学ぶ～ビッグデータマーケティングの活用 一般社団法人ビッグデータマーケティング教育推進協会 専務理事 米倉 裕之 株式会社 True Data 上席執行役員 越尾 由紀</p> <p>午後【講義】先進校から学ぶ～「会計分野」の効果的な指導方法 岐阜県立岐阜商業高等学校 教 諭 早水 有美</p> <p>【講義】専門家から学ぶ～これからの会計教育 日本商業教育振興会 代表理事 小島一富士</p>
7月31日（木） 9:00～17:00	<p>午前【講義】先進校から学ぶ～中学生に商業教育の魅力を伝える方法 大阪府立鶴見商業高等学校 校 長 谷口達之輔</p> <p>先進校から学ぶ～「観光ビジネス」の効果的な指導方法 石川県立小松商業高等学校 教 諭 荒木田正人</p> <p>午後【演習】企業から学ぶ～プログラミング入門講座・アプリ制作実習① ② アシアル情報教育研究所 所 長 岡本 雄樹</p>
8月1日（金） 9:00～15:20	<p>午前【講義】専門家から学ぶ～組織マネジメントとチームビルディング① ② 合同会社ブレイン・アクティベーション 代表社員 左京 利章</p> <p>午後【講義】商業教育の現状と今後の方向 文部科学省初等中等教育局参事官(高等学校担当)付 産業教育振興室 教育調査官 岩館 良伸</p> <p>【閉講式】</p>

### 4 研修内容

#### 【「指導と評価の一体化」のための学習評価の在り方・進め方】

授業改善、学習改善において最も重要なことは、観点別学習状況調査である。今回の学習指導要領の改訂により、学習評価が重要であるとされたことで、各科目において、目標の中に3観点を盛り込むことがポイントとされた。評価については、診断的評価、形成的評価、総括的評価の3つに分けられる。診断的評価は、生徒の現状を把握し、それに照らし合わせた目標設定を行う。形成的評価は、個人のニーズに合わせた記録に残さない評価である。教員側の指導のための評価であり、授業改善をしながら支援をしていく。総括的評価は、最終

的な評価となる。ただし、評価は1回ではない。

また、デジタル技術の発展と商業教育についての講義では、society5.0の到来に伴い、データをダウンロードできる時代にはなったものの、それらをどのように活用するのかを支援するのが、教員の役割であり、AIを使える人材の育成が求められる。

最後に、観点別評価について、「知識・技術」は、AIの発展より、必要がなくなる、もしくは、割合が小さくなるとされ、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の割合が大きくなると知らされた。

### 【「情報Ⅰ」の代替科目としての「情報処理」の指導の在り方】

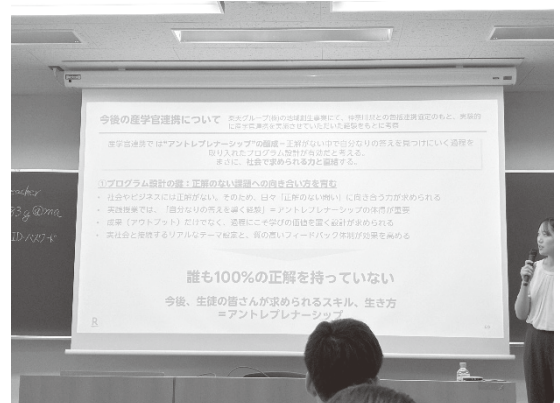
前提として、教科書を教えるのではなく、学習指導要領に示された目標を達成するために教科書を活用することが重要である。さらに、「知識・技術」を身につけさせるために、パターンで教えることはよろしくない。理屈がわからない生徒が多く、科学的な根拠に照らし合わせた指導を行われないと生徒は行き詰まる。「情報処理」と「情報Ⅰ」とは、内容は重複しているが、切り口が異なり、ビジネスで役立つ資質・能力の育成、ビジネスを題材とした指導が求められる。そのためには、自己教材も必要である。科目「情報処理」として、科目の目標に照らし合わせて、「実務に即して」、「科学的な根拠に基づいて」授業がなされているかが重要であり、「情報Ⅰ」の代替科目として実施する場合には、説明責任が求められることを知った。この2科目を差別化するために、商業は実学であるという理念をもち、ビジネスを題材として指導することが求められることを学んだ。

### 【先進校から学ぶ～生成AIの商業教育での活用とプログラミング学習の効果的な指導方法】

私自身の現状として、生成AIを活用した授業展開のアイデアに悩んでいる部分があった。今回の講義を通して、積極的に活用していくためのアイデアを多く学ばせてもらった。AIの発展と社会の変化に応じて、生成AIを活用できる人材が求められるようになっていく現状を踏まえ、ChatGPTの利点や注意点など適切な利用法を説明してもらった。さらに、校務に関わる使用方法もとても参考になった。生徒に利用させる際には、多くの懸念点があるため、生徒へ生成AIの禁止事項や留意事項をまとめて説明する必要があると感じた。生成AIを活用したポスター作成や画像作成など、生徒に実践させてみたいと思った。

### 【企業から学ぶ～産官学連携授業の取組（Eコマース）①②】

Eコマースを活用した実践事例について、学ぶことができた。自治体との連携を行う上での、仕組みがしっかりされていることに驚いた。企業が「学びのエコシステム6つの重要要素」を定義し、それ自体がまさに社会に求められる資質・能力だと思い、今後の指導の参考になった。産官学で目的を設定し、成功経験だけではなく、失敗経験することは、生徒にとっても貴重な経験だと思う。また、ペルソナの設定などを通して、気づきを与えるための仕掛けがとても多く、正解がない課題への向き合い方やサポートの仕方を学んだ。



### 【マーケティング分野の授業デザインと学習評価①②】

この講義のように評価基準を1から考え、作成した経験がなく、とても参考になった。その際の手順は、①科目を選ぶ、②実施予定の単元の選択、③どんな力を育みたいかを確認、④記録に残して見取る部分について評価基準を決める、⑤実現可能な学習内容・学習方法を統計、⑥発表であり、これらのことを行い、授業内での声かけや助言に生かしたい。

### 【C-1 研修を受講した後の授業と評価の改善】

「思考・判断・表現」をいかに可視化し、会計数値を用いて記述させるかによって評価を行うことが重要であることを学んだ。生徒に対して、授業の目標を予め提示し、何を考えさせるかを明確にすることで生徒の取り組みも変化することが分かった。いかに生徒が消費者視点から脱却し、企業の視点で考えられるようになるか、そのために生徒への発問も重要になる。また、生徒がいかに自身の評価に納得できるかが評価の正しさよりも重要で、生徒の学習改善を支援することにつながることを学んだ。



### 【企業から学ぶ～ビッグデータマーケティングの活用】

ビッグデータをもとに、自社商品と他社商品の比較をし、仮説をたてることで、効率的な分析ができる。グループワークによって、商品の比較を実際に行ってみると、商品ごとに特徴があり、自社の強みや弱み、そこからなぜその事実が起きているのか仮説をたててみることで明確になった。年齢、性別、流行、人数など自分とは違った視点をもっている先生方もおり、実際に授業でも活用できる内容だったと思った。

### 【先進校から学ぶ～「会計分野」の効果的な指導方法】

県立岐阜商業高校では、学習の3本柱があり、その中に日商簿記検定の取得を掲げている。学校全体で取り組むことで、全員が同じ方向性に向かい、全員で行うことでそれが「当たり前」になっている。また、大学や地域企業との連携により、コミュニケーション能力の育成ややりがいを感じられることで自ら学ぶ力を身につけさせることができている。また、ホームカミングディというOBを招き、キャリアに関する話を聴く機会があることは生徒にとってとても有意義だと思った。

### 【専門家から学ぶ～これからの会計教育】

この講義を受けて感じたことは、会計教育の重要性と教員の熱量がどれだけ大切かが理解できた。現在、商業を学ぶ生徒が減少している。大事なことは、簿記を学ぶ目的を理解させることであると学んだ。世の中で、簿記がどれだけ役立つ知識なのか、どれだけ必要なのか、まずはそれを伝えることが必要だということを知った。また、小島先生の例え話を聞いてとても参考になった。どの例えも、生徒の身近に感じられるような話題になっており、興味関心が惹かれる内容になっていた。この部分がとても重要だと思った。簿記は、高校になって初めて履修する科目であり、社会に出ても役立つ科目であるが、生徒がイメージできる例え話や話題があることで、自分の身近なところでイメージを働かせ、主体的に学習に取り組むのではないかと思った。これからは、常にアンテナをはり、生徒が主体的に学びに向かえるような話題を生徒に提供していきたい。

### 【先進校から学ぶ～中学生に商業教育の魅力を伝える方法】

現在、全国的に見ても、商業高校もしくは、商業を学ぶ生徒が減少している。そのことを改善するために、中学生に商業教育の魅力を伝え、発信する方法を学んだ。中学生や保護者、中学校教員等に、商業科の教育内容、卒業後の進路状況や魅力を伝える必要がある。そのためには自校をマーケティングする必要がある。具体的な取り組みとしては、簿記セミナーを行うことで、中学生に簿記の魅力を伝える。さらに、現行の中学校学習指導要領解説に「企業会計の意味を考察する」という文言が追加されていることは私自身の知識不足で分かっていなかった。どれほど会計教育が重要視されているかが理解できた。他校で行われている広報活動、取組を紹介してもらい、少しずつでも魅力を発信していくことが大切であると学んだ。

### 【先進校から学ぶ～「観光ビジネス」の効果的な指導方法】

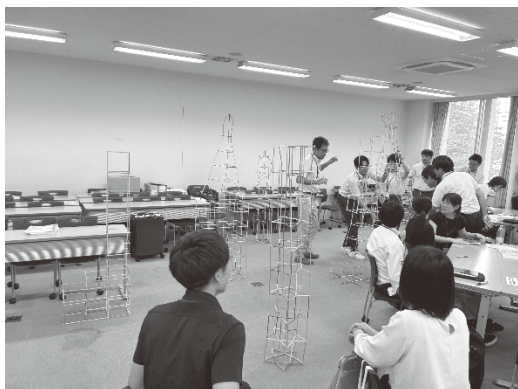
観光ビジネスを活用した実践的な取組について、紹介してもらった。株式会社を設立し、ビジネスとして何が出来るか。というテーマを設け、各グループが同じ目的に向かって取り組んでいる点は、参考にしたいと思った。また、新たなビジネスモデルの構築の考案そして実践を行っていることで職業人としての意識や知識を身につけられるのではないかと思った。やはり、商業は実践を通して、経験することが大切だと再認識した。あらゆる機関と連携し、外部との関わりを強化し、地元の観光資源の活用の仕方にとってもこだわりを感じた。何より、講師の荒木田先生の熱量がとても伝わった。

### 【企業から学ぶ～プログラミング入門講座・アプリ制作実習①②】

Monaca Education を使用したのが初めてだったため、とても勉強になった。初めて使う関数もあったが、実際にソースコードを打ちながら実践させてもらい、とてもわかりやすかった。プログラミングを初めて学習する1年生に、どこから教えるべきか悩んでいたが、岡本さんの説明がとても流れがスムーズで理論からの実践が成り立っていたので、とても参考になった。基礎基本を身に付けた後に応用として、アプリ制作を行った。生徒の身近にあるアプリを自ら制作できることは、生徒の興味関心を惹きつける意味でもとても参考になる事例だった。

### 【専門家から学ぶ～組織マネジメントとチームビルディング①②】

「ランドマークタワー建設プロジェクト」と題してグループワークを行った。見積もりとデザインモックアップの提出のために、発注元のニーズに応えるための設計を考案した。耐久性はもちろん、デザインにもこだわりながら行った。講師の左京さんからは、相互コミュニケーションを取ること、相手を知ることによってチームワークの促進につながるの大切さを学んだ。これに加え、問題解決への行動（言動）も重要で、グループ内で自分の意見をアウトプットし、他者の意見をインプットしあい、進行していくことが大切だと学んだ。チームビルディングの4つの要素としては、①「目的・目標のシェアと動機付け」、②「協働とコミュニケーション」、③「組織貢献と学習する組織」、④「問題への活発な取り組み」と示され、学校で課題解決型のグループワークを行う際に活用していきたいと思った。



### 【商業教育の現状と今後の方向】

「主体的で対話的な深い学び」が授業改善のキーワードになる。学習指導要領の改訂により、授業改善がとても重要視されるようになった。授業改善を進めていくためには、自分の意見をインプットするだけでなく、アウトプットすることが重要だと学んだ。一人一人が意見を持ち、それを全体にアウトプットすることで一人一人の点と点がつながることが深い学びにつながるということが分かった。個人で考える時間、グループでまとめる時間を分けて行い、主体的に自分の考えを出し、グループ内で対話的な活動を行うことで深い学びにつながるのだと感じた。今後の授業の参考になる講義だった。

## 5 まとめ

今回の研修を通して、多くの学びを得ることができた。研修全体のテーマが「授業改善」であったため、自分自身の授業を振り返る機会にもなった。「会計分野」、「ビジネス情報分野」、「マーケティング分野」、「マネジメント分野」どの分野においても実践活動の充実がとても重要であり、実践活動を充実させるためには、理論（座学）を理解させるための工夫が必要不可欠であると感じた。また、商業教育の重要性や意義をさらに理解し、生徒に伝えていくことも重要だ。生徒が何のためにやっているのか、将来どのようなことにつながるのかを理解し、主体的に取り組めるよう私自身がまだまだ成長していく必要がある。講師の方々からの講演や受講者の先生方から学んだことを少しでも生徒へ還元できるようこれからも精進していきたい。このような研修の機会をいただけたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

- 1 研修期間 令和7年8月4日（月）～8月6日（水） 3日間
- 2 研修場所 8月4日・5日 大阪教育大学みらい教育共創館(大阪府大阪市天王寺区)  
8月6日 大阪南港ATC研究施設(大阪府大阪市住之江区)

3 研修日程

日 時	概 要
1日目 8月4日（月） 9:30～17:00	<p>【開 講 式】（一社）デジタル人材共創連盟</p> <p>【講 義】学習指導要領の円滑な実施について 国立教育政策研究所 教育課程調査官 須藤 祥代</p> <p>【講義・実習】「プログラミング」の指導方法について 大阪教育大学 尾崎 拓郎</p> <p>【講義・実習】情報I「情報デザイン」の指導と実践 -理論と制作を通して考える- 大阪教育大学 若杉 祥太</p> <p>情報デザインの指導と実践 大阪教育大学 納庄 聡</p>
2日目 8月5日（火） 9:00～17:00	<p>【講義・実習】学習科学の視点で考える主体的対話的で深い学びの実現 青山学院大学 益川弘如</p> <p>【講義・実習】「データ活用」R及びWolframを活用した グラフの作成と分析 順天堂大学 大橋 真也</p> <p>【協 議】研修の振り返り 京都精華大学 鹿野 利春</p>
3日目 8月6日（水） 11:00～16:30	<p>【見学・実習】産業用ロボットの活用と人材育成 株式会社ブリッジ・ソリューション 代表取締役 一般社団法人 i-RooBO Network Forum 副会長 坂本 俊雄</p> <p>【見学・実習】5G X LAB</p> <p>【閉 講 式】（一社）デジタル人材共創連盟</p>

#### 4 研修成果等

##### 【講義】学習指導要領の円滑な実施について

新学習指導要領では、生徒の興味や適性に応じた「個別最適な学び」と、協力して課題を解決する「協働的な学び」の両立が重視されている。情報科では生成 AI やクラウドツールを活用し、個人探究とグループ活動を融合させることで、深い学びを実現している。商業科でも、マーケティングや商品企画などの課題研究活動に ICT や生成 AI を取り入れることで、実社会に即した課題解決力や表現力を育成できると考える。

##### 【講義・実習】「プログラミング」の指導方法について

教科情報では、アルゴリズムの理解や情報システムの設計・開発を通じて、社会課題の解決力を育むことが求められている。「作りながら学ぶ」実践的な活動への接続が重要となっており、その一例として、micro:bit を用いた実習が紹介された。センサーを活用したプログラム（LED の点灯など）を通じて、身近な生活と情報技術のつながりを体験でき、アイデア創出から実装までのプロセスを学ぶことができた。教科「商業」では、店舗の IoT 化や売上予測のシミュレーションなどに応用でき、プログラミングを通じてマーケティングや経営の実践力を高める教育活動へと展開できると考える。

##### 【講義・実習】情報 I 「情報デザイン」の指導と実践

情報デザインの視点では、デザインを通じて「何を伝えたいか」「どう表現するか」を考える力が求められ、様々なツールを活用したビジュアル表現が有効。自己満足で終わらず、「つたえる」から「つたわる」へ、受け手の理解・解釈・行動を見据えて設計するという観点を重視することが“意味を共有する力”の育成に直結する。また、授業では相互評価や振り返りの活動が重要であり、アイデアソンやハッカソン形式の学習を通じて、生徒同士が意見を交わし、作品を改善するプロセスが深い学びにつながる。教科「商業」では、情報デザインを活かして広告制作や商品紹介アプリの開発などに応用でき、企画力や改善力を高める教育活動へと展開可能であると考えられる。

##### 【講義・実習】学習科学の視点で考える主体的対話的で深い学びの実現

知識構成型ジグソー法で主体的・対話的で深い学びを実現することができる。単なる情報の寄せ集めではなく、問いを立て、他者との対話を通じて納得する答えを構築するプロセスが重視される。生成 AI はこの学びを支援するツールとして有効であり、プロンプトの工夫によって多様な視点や表現を引き出し、学習者の思考を広げることができる。特に、AI との対話結果を生徒同士で深く考える活動は、深い学びに直結する。教科「商業」では、ジグソー法と生成 AI を組み合わせることで、企画力・表現力・協働的な問題解決力を育む教育活動の充実が図れると考える。

### 【講義・実習】「データ活用」R及びWolframを活用したグラフの作成と分析

データサイエンスは、「未来を予測する力」を育む学びとして位置づけられている。特に情報Ⅱでは、機械学習や可視化を通じて、問題発見・解決力を養うことが重視されている。難解な数式よりもノーコード・ローコードツールの活用が推奨され、生徒が自らデータを扱い、意味を読み解く力を育てることが重要とされる。教科「商業」では、売上予測や顧客分析などにデータサイエンスを応用し、実践的なマーケティング力や意思決定力を育成する教育活動が期待できると考える。

### 【協議】研修の振り返り

大学入学共通テスト「情報Ⅰ」では、データ活用とプログラミングの力が問われる。統計指標や散布図、相関係数などを用いた分析・解釈力や配列、条件分岐を活用し、問題解決の手順を論理的に構築する力が求められる。

### 【見学・実習】産業用ロボットの活用と人材育成

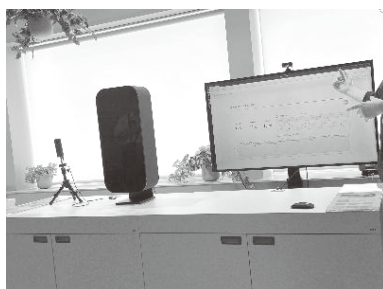
日本のものづくり現場は、現場作業者とロボット技術者の二重の人手不足、技術の高度化によるスキル乖離、そしてIoT・AIの急速な進展に直面している。これに対応するため、DXが求められている。特に協働ロボットは、人と共に作業できる柔軟性を持ち、中小企業や食品産業などへの導入が期待されている。AIとの連携も進み、未活用領域の自動化に貢献する技術として注目されている。

### 【見学・実習】5G X LAB

大阪市とソフトバンクなどが官民連携で運営するオープンラボで、5Gを活用した製品・サービスの開発・検証を支援する施設。展示・体験ルームや検証ラボを備え、遠隔操作やAR・VRなどの最先端技術を体験可能。中小企業やスタートアップが5Gビジネスに参入しやすい環境を整え、万博を契機とした新たなビジネス創出が期待されている。



↑先端技術活用ビジネスサポート拠点



↑広告効果測定祖ソリューション



↑遠隔操作システム

## 5 おわりに

今回の研修では、ICT や生成 AI、情報デザイン、データ活用など、商業教育の新たな可能性を示す多くの学びを得ることができた。今後は、これらの知見を授業に積極的に取り入れ、生徒が主体的に考え、協働し、表現する学びを実現したい。特に、課題研究において、AI やクラウドツールを活用し、実社会に即した課題解決力を育成する授業づくりを進める。また、地域や企業との連携を深め、DX やデータサイエンスを取り入れた実践的な学びを展開し、生徒が未来を切り拓く力を身につけられる環境を整えたい。最後に、このような貴重な研修の機会を与えてくださった関係各位に心より感謝申し上げます。研修で得た学びを原動力に、商業教育の新たな価値創造に挑戦していく。

各 種 大 会 報 告



令和7年度 夏号

R7. 7. 22 発

第72回全国高等学校ビジネス計算競技大会

青森県予選会

日時：令和7年6月7日（土）

会場：青森商業高校

【珠算の部】

- 団体  
第一位 三沢商業高校  
第二位 八戸商業高校

●個人

- 第一位 三沢商業高校 太田 若那  
第二位 三沢商業高校 下田 稜馬  
第三位 三沢商業高校 坂里 優  
第四位 三沢商業高校 沢居 悠希  
第五位 三沢商業高校 鎌本 咲紅  
第六位 青森商業高校 後藤 愛里



【電卓の部】

- 団体  
第一位 三沢商業高校  
第二位 八戸商業高校  
第三位 青森商業高校

●個人

- 第一位 三沢商業高校 根岸 沙耶  
第二位 三沢商業高校 吉田 大晟  
第三位 三沢商業高校 大澤 千夢  
第四位 三沢商業高校 宮部 初音  
第五位 三沢商業高校 能方 永真  
第六位 八戸商業高校 千葉 瑠栞



第37回全国高等学校情報処理競技大会青森県予選会

日時：令和7年6月14日（土）

会場：青森商業高校

●団体

- 第一位 弘前実業高校  
第二位 三沢商業高校  
第三位 八戸商業高校

●個人

- 第一位 弘前実業高校 佐藤 紘也  
第二位 弘前実業高校 工藤 夏樹  
第三位 三沢商業高校 住吉 玲菜  
第四位 弘前実業高校 小嶋 凛香  
第五位 弘前実業高校 奈良 叶多  
第六位 三沢商業高校 藤本 愛音



第41回全国高等学校簿記競技大会青森県予選会

日時：令和7年6月21日（土）

会場：三沢商業高校

●団体

- 第一位 三沢商業高校  
第二位 八戸商業高校  
第三位 弘前実業高校

●個人

- 第一位 三沢商業高校 寺井 瑠貴  
第二位 三沢商業高校 石川 友菜  
第三位 弘前実業高校 田中 真那  
第四位 八戸商業高校 竹井 心輝  
第五位 三沢商業高校 須藤 那那  
第六位 三沢商業高校 佐々木 珠緒



青森県高等学校商業教育研究会

研究誌編集委員会 発行

編集者 青森県立弘前実業高等学校 鈴木 鐘

青森県立大湊高等学校 川口 真史

青森県立三沢商業高等学校 向谷地 史拓

第7262回青森県高等学校ワープロ競技大会兼  
第72回全国高等学校ワープロ競技大会青森県予選会

日時：令和7年6月21日（土）

会場：八戸商業高校

●団体

- 第一位 八戸商業高校  
第二位 三沢商業高校  
第三位 青森商業高校

●個人

- 第一位 三沢商業高校 稲田 悠花  
第二位 八戸商業高校 殿村 悠  
第三位 八戸商業高校 大道 望  
第四位 八戸商業高校 小比類 泉  
第五位 八戸商業高校 永田 優倫  
第六位 三沢商業高校 小山 石花  
正賞 三沢商業高校 稲田 悠花



全国大会に向けての抱負

【ビジネス計算競技 珠算・電卓 団体】  
三沢商業高等学校 太田 若那

私たちは、7月24日に横浜武道館で行われる第72回全国高等学校ビジネス計算競技大会に出場します。全国大会ではかなりレベルの高い問題が出題されます。日頃の練習で基礎問題から応用問題をしっかりと確認し準備していきます。全国大会に出場する十人をはじめ、部員全員で両部門ともに「日本一」に向かって全力で臨みたいと思います。応援してくれている多くの方々の良い報告ができるよう精一杯頑張りますので、応援よろしく願います。



【ビジネス計算競技 珠算 個人】  
青森商業高等学校 後藤 愛里

県予選会にて、全国大会出場選手となりました。全国大会での目標は、三年間で学び、身につけた力で自己ベストを更新することです。今まで継続してきた隙間時間の練習を大切に、苦手な応用計算で解ける問題を一間でも多く増やせるようにしたいです。今までの練習を必ず結果に結び付けられるよう精一杯挑みたいと思います。

【ビジネス計算競技 珠算 個人】  
八戸商業高等学校 清水 心路

先日の県予選会において、全国大会出場という結果を得られたことを誇りに思います。  
この成果は、共に練習を重ねてきた仲間たちの支えがあってこそ得られたものであり、心から感謝しています。7月24日に開催される全国大会に向けて、私は一意専心、日々の練習に励んでいます。憧れの舞台で自分の力を最大限に発揮し、全力で挑みます。

【ビジネス計算競技 電卓 個人】  
八戸商業高等学校 千葉 瑠葉

今までの厳しい練習を仲間と共に乗り越え、夢であった全国大会出場を果たせたことを、大変光栄に思います。日々の練習では、数字の美しさや問題を解く速さにこだわり努力を重ねてきました。予選会で感じた思いや課題を糧に、これまで一緒に練習してきた仲間や支えてくださった顧問の先生への感謝の気持ちを込めて、全国大会では全力を尽くします。

【ビジネス計算競技 電卓 個人】  
八戸商業高等学校 藤谷 和

県予選会にて、全国大会への切符をつかみ取ることで、大変嬉しく思います。この成果は、共に支え合い、切磋琢磨してきた仲間の存在があってこそ得られたものだと感じています。日々の練習では、正確さとスピードの両立を常に意識し、安定した得点が取れるよう努めています。予選会で見つけた課題を克服するため、学校での練習に加え、自宅でも自主的に取り組んでいます。全国大会では、これまでの練習の成果を十分に発揮できるよう全力を尽くしてきたいと思います。

【情報処理競技 団体】  
弘前実業高等学校 小嶋 凛香

私たちは、第37回全国高等学校情報処理競技大会青森県予選会、団体の部で優勝し、全国大会出場を決めました。今までより多くの問題を解けるように様々な問題に取り組み、力を高めてきました。日々の練習で培ってきた知識と経験を力に変え、青森県代表・学校代表として誇りを持ち、全国の舞台でも一人ひとりの目標を達成できるように、全力を尽くします。



【情報処理競技 個人】  
三沢商業高等学校 住吉 玲菜

私たちは、7月26日に千葉商科大学で行われる第37回全国高等学校情報処理競技大会へ出場してきます。予選の結果は、団体二位という結果でしたが、全員が最後まで諦めず取り組むことができたと思います。個人の方では全国大会の出場権をいただけたので、最初で最後の機会として全力で取り組む一方、楽しむことを忘れずいい経験にしたいです。これまで応援して下さった皆さん、先生方、ありがとうございました。そして、これからも一生懸命取り組んでいきますので、応援よろしくお願ひします。

【情報処理競技 個人】  
三沢商業高等学校 藤本 愛音

7月26日に千葉商科大学で行われる第37回全国高等学校情報処理競技大会へ出場してきます。予選の結果は、団体二位という悔しい結果でしたが、目標としていた団体優勝は叶いませんでした。個人では佳良賞となり、全国大会の出場権をいただけたので、これからは本番に向け繰り返し学習し努力を重ね、自己最高得点を出し、悔いのない結果にしたいです。そして、これからも全力で取り組むので、応援よろしくお願ひします。

【簿記競技 団体】  
三沢商業高等学校 寺井 瑠貴

私たちは、第41回全国高等学校簿記競技大会青森県予選会で優勝し、千葉商科大学で行われる全国大会に出場することになりました。この結果を残せたのは、私たちを支えてくださったたくさんの方の存在があったからです。ありがとうございました。私は予選会を万全な体調で迎えることができず、改めて体調管理の大切さを学びました。初めての全国大会となりますが、体調をしっかりと整え、悔いの残らない結果を残せるよう頑張ります。



【簿記競技 個人】  
八戸商業高等学校 石川 友菜

私は、7月25日に千葉商科大学で行われる全国高等学校簿記競技大会に出場します。全国大会への出場が決まったのは、いつも熱心にご指導くださった顧問の佐々木郁子先生と田中純恵先生、県予選までの練習期間に切磋琢磨し、互いに高め合えた仲間のおかげです。全国大会はかなり厳しい戦いになると覚悟していますが、今の自分の弱点を克服し、より成長した姿で、青森県代表として臆することなく大会に臨みたいと思います。

【簿記競技 個人】  
弘前実業高等学校 田中 聖真

私は全国大会出場を目指し、県予選会に臨みました。周りは三年生が多く、最初はとても緊張していましたが、時間が経つにつれ、緊張がほぐれていきました。いつもの自分の力を発揮することができ、三位になり、全国大会出場を果たすことができました。全国大会に向け、今の自分の培ってきた簿記の知識と技術を最大限発揮できるよう、一日一日の積み重ねをもっと大切にしていきます。

【ワープロ競技 団体】  
八戸商業高等学校 殿村 漣

ワープロ部は7月29日に東京都立産業貿易センター台東館・台東区民会館で開催される第72回全国高等学校ワープロ競技大会に出場します。個人・団体ともに全国優勝を目標に掲げ、日々練習を重ねてきました。本番では、これまでの努力を信じ、緊張に負けず、落ち着いて実力を発揮できるよう、全力で臨みます。支えてくださった先生方や仲間、応援してくださる皆様への感謝の気持ちを胸に、全力を尽くします。応援よろしくお願ひいたします。



【ワープロ競技 個人】  
三沢商業高等学校 稲田 悠花

私は、今回個人で全国大会に出場します。予選では惜しくも団体第二位で、団体としての出場は叶いませんでしたが、三年生は私一人、あとは後輩という構成で戦い抜いた結果には誇りを感じており、悔いも後悔もありません。後輩たちが繋いでくれた全国の舞台、個人という厳しい状況でも、皆の思いを胸に全力で挑みます。

【ワープロ競技 個人】  
三沢商業高等学校 小山石 優風

私は全国大会予選会で第六位で入賞することができました。私は今回が初めての全国大会出場なので、緊張せずに打つことはもちろん、これからの練習や遠征等に活かせる良い経験を積むことを目標に頑張りたいと思います。個人で打数を伸ばすことは難しいとは思いますが、自己ベストを出せるように日々の練習にしっかりと一つ一つ丁寧に取り組んでいきたいです。そして、県大会では達成することの出来なかった目標である「エラー0」を次は全国大会で達成することを目指して頑張りたいと思います。

# 各校での取り組み紹介

## 弘前実業高校 学科集会

今年度も商業科、情報処理科の3学年合同集会を行いました。商業科主任より商業の見方・考え方についてお話いただき、その後各学年2名ずつの班を組み、科目について、進路についてなど他学年から情報収集を行い、理解を深めることができました。

## プログラミング特別講座

5月23日（金）に本校情報処理科の1年生を対象に、ITラボ株式会社の代表取締役の新山氏をお招きし、実務に即したプログラミング講座を実施しました。生徒たちは、この講座をとおして、プログラミングへの関心をより一層深めることができました。



## 八戸商業高校 「あおもり創造学」

本校では、2、3学年の課題研究の授業において、「あおもり創造学」を通じた地域の魅力発信や地域課題の解決に取り組んでいます。



今年度も、外部講師による講義やグループワークを随時実施しており、これまでに八戸市役所の職員や地域コーディネーターの方々から、八戸市の課題や地域での実践的な取り組みについてお話を伺いました。



地域の現状や課題を自らの目で見て考察し、若い視点から解決策を提案する力を養っています。

## 三沢商業高校

### 簿記最先端教育「SAH」

本校は「スーパー・アカウンティング・ハイスクール」として、平成27年4月より日本最先端の簿記教育に取り組んでいます。

新入生全員が日商簿記検定2級合格を目指し、ICTを活用した反転授業や公認会計士による指導、質問共有システムなどで理解を深めます。

4月28日には講師を招き、実社会での会計の重要性について学びました。進学や就職にも直結する力を育てる、実践的で先進的な取り組みです。



## 三戸高校

### みらい探究コース、クリエイティ部

三戸町の魅力発信を行うクリエイティ部は、外部と連携しながらポスター制作や商品開発を行っています。大ヒット「ひつつみキーマカレー」に続けと新たな商品を考案中です。これらの活動を商業科でも支援するため、今年度はみらい探究コース3年に「商品開発と流通」を設定、来年度は同コース2年に「観光ビジネス」を設定予定です。



〈昨年度作成したポスターを三戸警察署へ贈呈〉  
三戸町内に貼られているので、三戸町にお越しの際には御覧ください。

これまでの商業科の取組みに観光教育をプラスし、三戸の魅力をさらに高めるため商業科一丸となって支援していきます。



〈ひつつみキーマカレー〉

現在完売中ですが、8月以降再販予定です。

## 黒石高校

### 情報デザイン科の取組

本科では「地域共創・未来創造」をスローガンに掲げ、地域と連携した学習活動を積極的に展開しております。



特に学科を開設して間も無くから取り組んだ「バズる商品開発」を皮切りに、本科が主体となり、かつ学科の特徴を活かした産学、官学、産学官による連携事業に取り組んでいるところです。



3年生での課題研究授業、2年生でのデザイン実習授業を通じて「ここでなければできない実践」にこれからも挑戦していきたいと考えています。



## 青森商業高校

### グローバル人財育成事業

6月13日（金）、台北市立士林高級商業職業学校と第1回オンライン協働探究学習を行いました。お互い学校紹介を行い、それぞれの学校の歴史や特徴を知ることができました。また、グループごとに英語で自己紹介を行い、質問をしました。本校生徒は感動し良い刺激を受けました。大いに盛り上がった協働探究学習は、お互いに貴重な経験となりました。



## 下山学園高校

### 学生ボランティアへの参加

4月19日・20日に行われた「菊が丘公園桜祭り・鶴の舞橋春まつり」の学生ボランティアに参加しました。内容としては、販売実習がメインでしたが、本校のダンス愛好会が鶴の舞橋春祭りにてパフォーマンスを行いました。商業科の授業だけでは学ぶことのできない実際の現場に立つことで、接客や働くことのやりがいを感じることができました。



# 全国大会の感想

青森商研

# NEWS

令和7年度秋号  
R 7 . 1 0 . 2 4

今年度も全国大会において、商業高校生の活躍がありました。日頃の練習の成果を発揮し、目覚ましい活躍してくれた生徒の皆さんお疲れ様でした。今回の商研ニュースでは、全国大会で活躍された部活動の代表生徒に、全国大会の報告をしていただきました。

令和7年度第72回  
全国高等学校ビジネス計算競技大会(7月24日)

## 【珠算】

三沢商業高等学校 3年 太田 若那

私たちは、団体競技両部門での全国優勝を目標に日々練習に取り組んできました。目標達成とはなりませんでしたが全国大会に出場した10人だけでなく、部員全員が同じ目標をもち一丸となり戦うことができました。全国大会という大きな舞台で3年間の練習してきた成果を出し切れたこと、技術も人間性も鍛えることができたのは顧問の先生方をはじめ、多くの方々のおかげです。来年の全国大会で自分たちが成長できたと実感しています。来年の全国大会では後輩たちが日本一を獲ってくれることを願っています。

(結果)  
団体 第5位  
個人 優良賞・佳良賞  
種目別 第3位・佳良賞



青森県高等学校商業教育研究会  
研究誌編集委員会 発行



編集者 鯨ヶ沢高等学校  
八戸商業高等学校  
青森商業高等学校  
奈良 靖宏  
上野 泰聖  
神 晃太

## 【電卓】

三沢商業高等学校 3年 大澤 千夢来

今年度も7月に行われた全国大会に出場しました。結果は、団体競技をはじめ、種目別競技で昨年度より良い成績を残すことができました。全国大会での団体優勝を目標に、部員全員が日々の練習に取り組んできました。全国のレベルに圧倒され、いつも通りの結果を出すことが難しかった中でも、練習の成果を出せたと感じています。後輩の皆さんには、来年以降も県予選で優勝し、全国大会で活躍して行けるよう練習を頑張ってください。

(結果)  
団体 第7位  
個人 佳良賞  
種目別 準優勝・佳良賞

令和7年度第41回

全国高等学校簿記競技大会(7月25日)

三沢商業高等学校 3年 寺井 瑠貴

私は全国高等学校簿記競技大会に出場しました。入賞はできませんでしたが、全力を出し切ることが出来ました。先生や家族、支えてくださった沢山の方に感謝しています。大会では他校の簿記理解力の高さを実感し圧倒されましたが、高校生でこのような経験ができたことをありがたく思います。後輩が来年も団体で全国大会に出場できること、今年大会に出場した2年生が今回の経験を活かしてより良い成績を残せることを願っています。

令和7年度第37回

全国高等学校情報処理競技大会(7月26日)

弘前実業高等学校 3年 小嶋 凜香

私たちは、第37回全国高等学校情報処理競技大会に出場し、団体の部第9位、個人の部では2名が佳良賞に入賞することができました。全国大会での目標は、団体10位以内、個人30位以内を目標にしました。県予選会の後は、全国大会の過去問題に取り組みました。全国大会は完全解答でなければ得点に繋がりません。そのため、ミスを減らし、確実に得点できるように練習しました。本番では時間配分に気を付け、できる問題から積極的に取り組み、今回の結果を得ることができました。



令和7年度第72回

全国高等学校ワープロ競技大会(7月29日)

八戸商業高等学校 3年 殿村 漣

今回の全国大会は2回目でしたが、この大会で「佳良賞」をいただけたことが本当に嬉しかったです。後輩と一緒に大会に臨むことができ、プレッシャーを感じることなく楽な気持ちで参加でき本番もリラックスして臨むことができました。



また、全国大会は錚々たるメンバーが出場すると聞いていましたが、打つ速度や打数が全然違うことを再認識しました。最後の大会で、私が今まで練習してきた成果を全て出し切ることができ、とても有意義な経験ができました。

令和7年度第42回

全国高等学校英語スピーチコンテスト

(9月21日)

三沢商業高等学校 3年 松橋 美麗

全国大会では、自分に順番が来るまでとても緊張していましたが台に上がるとすぐ楽しみながら発表することができました。入賞することは出来ませんでした。ベストを尽くすことができ、自分にとって大きな財産になったと思っています。この経験を活かして、これからの進路活動を一生懸命に取り組みたいと思います。

三沢商業高等学校 2年 坂本 梨々花

全国大会は、とてもレベルが高く入賞はできなかったけど多くのことを学ぶ貴重な機会となりました。私は練習通りに最後まで間違えずに発表することができ、達成感がありました。とても緊張しましたが、自分の力を出し切れたことは大きな自信につながりました。今回の経験を通過して、準備の大切さや表現力の重要性を改めて実感することができたのでこれからの学校生活や将来の活動にも生かしていきたいです。



## 運動部の活躍

令和7年度 全国高等学校総合体育大会

(7月23日～8月20日)

弘前実業高等学校 陸上競技部 3年 鳴海 裕大

全国1位を目指して臨んだインターハイ。急遽メンバーが変更となるイレギュラーな状況でしたが、結果は6位入賞と、弘前実業の強さを全国に示すことができました。これまで支えてくださった先生方の笑顔を見るときは、とても嬉しい気持ちになりました。

最後に、先輩たちには恵まれた環境で練習ができていたことを自覚し、感謝と謙虚な気持ちを忘れずにこれからも頑張りたいと思います。3年生みんなが応援しています。



弘前実業高等学校 ソフトテニス部 3年 小山 颯斗

私は全国大会を終えて、去年同様自分のやってきたことを出しきることが出来ずとても悔しい思いをしました。私は去年も全国大会を経験しているので、心の準備や日頃の練習で1回でも多く勝てるように一日一日を大切に取組んできました。しかし、会場に入ると、緊張や、相手との実力差も感じ、去年と変わらぬ自分に落ち込みました。ソフトテニスで上手いかなかった経験を進路実現に生かして頑張っています。



青森商業高等学校 卓球部 2年 神 和花

私たちは、2大会ぶりに高校総体の学校対抗で優勝し、インターハイに出場しました。初めてでしたが自分なりのプレーで楽しく試合ができました。インターハイというレベルの高い試合を直接見ることができて来年もまたここで試合をしたいという気持ちになりました。来年もインターハイの出場権を獲得できるように、良い環境で練習できていることや周りの支えてくださっている方々への感謝を忘れずに、練習に励みたいです。



## 東北大会の感想

令和7年度第29回

東北六県高等学校生徒商業研究発表大会

(8月23日)



三沢商業高等学校 3年 太田 若那  
私たちは11年ぶりに県大会で優勝し、東北大会に出場することができました。これまで先輩方が開発してきた商品の販路拡大を目指し、ECサイトやふるさと納税、アンテナショップなど宣伝活動を行ったことを発表しました。

発表までの準備はとても大変でしたが、先生方や友人の支えで県大会よりも緊張せず堂々と発表することができました。全国大会への出場は叶いませんでしたが、東北の各学校の発表で多くの学びを得ることができました。この経験を後輩たちに伝え、来年はぜひ県・東北を勝ち抜き、全国大会に出場してくれたらと願っています。

八戸商業高等学校 3年 松家 璃奈

東北大会までの準備期間は、夏休みの進路活動と重なり全員が揃って活動することが難しく、苦勞の多い日々でした。たった10分の発表のために何ヶ月も努力を重ねることに辛さを感じることもありましたが何度も練習を重ね、本番を迎えることができました。発表中に頭が真っ白になる場面もありましたが、最後まで諦めずにやり遂げたことで自信に繋がりました。他校の発表を見て、原稿を見ずに伝える姿勢や身振り手振りの使い方、スライドの構成など、多くの点で学ぶことができました。この経験と努力の過程を今後の自分の成長に活かしていきたいです。

# インターンシップ・職場体験

## 三沢商業高等学校 1年 堀内 優夏

今回のインターンシップを通して、信用金庫の職場の雰囲気や役割について学ぶことができました。インターンシップに行く前までは、金融機関は少し堅いイメージを持っていましたが、実際に行ってみると、職員の方々が明るい笑顔で対応してくださりととても温かい職場だったことに驚きました。お客様にとって相談しやすい雰囲気を作っていることが信頼につながっているのだと思いました。また、信用金庫が地域密着型の金融機関であることも強く印象に残りました。二日目の午後に渉外担当の方々と一緒に外回りをしました。渉外担当の方々は契約を取る以外の時にも地域の企業などへ行き、直接お話をすることで企業のことを知り、自分のことも知ってもらうことで信頼されていることがわかりました。地元の人々や企業との繋がりを大切にし、地域の発展に貢献していると思います。金融の仕事は、数字だけでなく、人との関わりや、信頼関係が何より重要だということ学びました。

今後は信用金庫で働くことも視野に入れていきたいと思いました。信用金庫で働かないとしても、将来は地域の方々や、周りの方々に信頼され、役に立てるような働き方をしていきたいと思いました。

## 八戸商業高等学校 2年 菊池 優歌

株式会社アイテイクワークさんでの職場体験実習では、様々な世代の方との会話や、初対面の方との名刺交換をすることで、社会での礼儀や接し方を学ぶことができました。普段は限られた人とししか関わらないため、この経験はとても新鮮でした。慣れない環境で緊張もありましたが、笑顔で声をかけてくださる方々のおかげで楽しく過ごせました。名刺の扱い方や丁寧な仕事の姿勢など多くのことを学び、今後社会に出た際にこの経験を活かしていきたいと思っています。

## 青森商業高等学校 1年 鈴木 美波

インターンシップを通して、保育の現場で子供達と関わる難しさや楽しさを学ぶことができました。初めは子供達にどう声をかければいいのか迷うこともありましたが、積極的に一緒に遊び、子供の視線に合わせて話しかけたりすることで、距離を縮めることができました。子供と協力しながら遊ぶ楽しさを感じました。食事では子供の様子をよく観察することの大切さを学びました。保育士は個性や気持ちを理解し、安心できる環境を作る存在だとわかりました。声かけや対応に迷うことも多くありますが、実習で学んだ経験を今後活かしたいです。

## 大間高等学校 2年 荒木 陽向

私は、津軽海峡フェリー株式会社でインターンシップを行いました。

この期間に、船内の清掃や消毒を徹底することで、お客様にきれいと安心・安全を提供すること、わからないことがあればすぐに聞き、メモをとることが大切だと学びました。

今回の体験を通して、接客業に興味を持ちました。今後は、様々な人と積極的にコミュニケーションを取り、誰に対しても平等に接しながら生活していきたいです。

## 鱈ヶ沢高等学校 2年 黒滝 蒼明

私は、水軍の宿にインターンシップに行き、部屋や廊下の清掃、窓ふき、部屋の準備、片付け、エアコンのフィルターの掃除などをしました。従業員の方も言っていたようにおもてなしの心を持ってやっていると感じました。

おもてなしの心を持って接客をすること、お客様のことを考えて行動すること、報連相の大切さなど沢山のことを学ばせていただきました。また、初めてで、おどおどしていた私たちに親切、丁寧に教えていただきました。今回の実習で学んだことを今後活かしたいと思っています。

# 商品開発紹介

## 弘前実業高等学校 商品名「キミペロ」

商品内容「嶽きみの廃棄物を使ったペットフード」  
テーマ「農作物の廃棄物を使ってペットフードをつくる」  
協力企業「青い森工房」

農作物の廃棄物を減らすため、昨年度からの継続研究として活動しています。話題性があり、興味を持ってもらうためにどの農作物に着目すれば良いか考えることが大変でした。企業の方に協力してもらったため、こちらのやりたいことやお金の話などのやり取りをすることは難しかったですが良い経験となりました。



## 弘前実業高等学校 商品名「ねぶた絵キーホルダー」

商品内容「捨てられるねぶた絵を再利用したキーホルダー」  
テーマ「ねぶた絵を再利用して広めよう」  
協力者「黒岩さん」

販売活動を行うまでの準備も大変でしたが、販売時も素通りされることなくもあり、販売するという価値は大変だと分かりました。高めの値段でも購入してくれるということが分かりました。キーホルダーの制作過程を説明したことや、宣伝活動を行うことが大事だと感じました。



## 三沢商業高等学校

私たちは課題研究の授業で、東北ファームと連携し、常温・長期保存が可能な2種類のプリンや、三沢商業高校のキャラクターを使用したおとりくんどーナツや、三沢商業高校のキャラクターを使用したおとりくんどーナツやたまごボーロを開発しました。また、令和6年度に高蔵ホークと共同開発したニンニク塩麴ノンオイルドレッシングが完成しました。地元食材を使い、サラダや肉、魚に合う万能調味料です。これらの商品は空港やイベントで販売しており、今後も地元企業と連携しながら、三沢市の特色を生かした商品づくりを通じて地域活性化に貢献していきたいと考えています。

「全卵・卵黄プリン」



「おとりくんどーナツ」



「たまごボーロ」



「ニンニク塩麴ノンオイルドレッシング」



# 東北大会の感想

青森商研

# NEWS

令和7年度冬号  
R. 1. 21

青森県高等学校商業教育研究会  
研究誌編集委員会 発行

編集

三沢商業高等学校 向谷地 史拓  
弘前実業高等学校 鈴木 瞳  
下山学園高等学校 半田 莉玖斗



令和七年度第五十二回

東北六県高等学校ビジネス計算競技大会

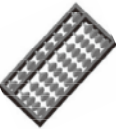
十一月一日

## 三沢商業 珠算・電卓 W優勝

三沢商業高等学校 二年 坂澤 里優  
私は団体メンバーの一人として「絶対に足を引っ張りたくない」という責任感、そして個人・団体ともに「優勝したい」という強い気持ちをもって大会に臨みました。七月の全国大会で力の差を痛感して以来、負けず嫌いな性格に火が付き、部活だけではなく家でも毎日問題に向き合い、苦手種目から逃げずに練習を重ねました。目標通りどちらも優勝することができて嬉しかったです。来年の全国大会までに部活全体でもっと実力をあげて団体優勝を目標にこれからも努力し続けたいです。

三沢商業高等学校 二年 宮部 初音  
東北大会で二連覇を達成した嬉しさもありますが、課題が残った大会でもありました。短時間で正確な計算を行うという競技の特性上、集中力と冷静さが強く求められ、改めて基礎の大切さを実感しました。また、他の参加者の取り組み姿勢や計算のスピードを間近で見、自分に不足している点も明確になりました。全国大会優勝に向けて、今回学んだ事を生かし、部員全員が団体優勝を目標にできるようにこれからも日々の練習を大事にして頑張っていきたいです。

令和7年度第52回東北六県高等学校ビジネス計算競技大会



八戸商業高等学校 二年 千葉 翔葉  
私たちは、十一月一日に開催された第五十二回東北六県高等学校ビジネス計算競技大会に出場しました。青森県予選を全員で突破した後は、さらに練習に力を入れ、大会本番に臨みました。結果は、珠算競技の部で団体第二位、電卓競技の部では個人で読上算競技と応用計算競技に入賞することができました。  
大会を通じて、悔しい思いもありましたが、それ以上に今後の練習や大会に向けた課題や目標を各自が明確にすることができました。次は、六月に全国大会予選が控えています。部員全員で心を一つにし、日々の練習に励んでいきます。

第52回東北六県高等学校ビジネス



下山学園高等学校 二年 澁谷 妃鞠  
岩手県立水沢商業高等学校で行われた東北六県高等学校ビジネス計算競技大会の珠算の部で、読上算と読上暗算の両方の競技で二位に入賞することができました。練習してきたことが発揮でき、とても嬉しいです。しかし、集中が足りない部分もあり、悔しい気持ちも残っています。この結果で満足することなく、次は一位を取れるように練習を頑張っていきたいと思います。

令和七年度第六十三回

東北六県高等学校ワープロ競技大会

十月二十七日

八戸商業高等学校 二年 永田 倫

私たちは、十月二十七日に秋田県大館市で行われた東北大会に出場しました。東北大会への出場は、部活動に取り組みうえて掲げていた目標の一つだったためとても嬉しく感じました。当日は、出場選手だけでなく、他の部員のサポートのおかげもあり、団体二位、個人では三位・四位に入賞することができました。  
次の目標は、来年度六月に行われる県大会で入賞し、全国大会への出場権を獲得することです。これからも、日々の練習に精一杯取り組んでいきたいと思っています。

令和7年度 第63回東北六県高等学校ワープロ競技大会



三沢商業高等学校 二年 北向 陽太

私は十月に秋田県で行われた東北大会に出場しました。前日練習では緊張することなく、自己ベストを更新するほど打ち、会場にも素早く慣れることができました。しかし、本番当日は緊張に負け、今まで通りの実力を出すことができませんでした。結果は団体四位と悔しい結果になってしまいました。が、打ち方や、どう工夫すればもっと打てるようになるのかなど改めて見直すことができました。

今回の東北大会では団体入賞を逃しましたが、次の大会は自分にとって最後になる大会です。悔しい結果に落ち込むことで終わらず、団体一位を獲得しよう日々の練習を大切に、部活動に取り組んでいきたいです。

令和7年度 第63回東北六県高等学校ワープロ競技大会





# 令和7年度 各種大会結果報告



## 第 57 回青森県高等学校ワープロ新人競技大会

兼 第 63 回東北六県高等学校ワープロ競技大会県予選会

《ワープロの部》

◎団体

第1位	八戸商業高等学校	3,735 点
第2位	三沢商業高等学校	3,708 点
第3位	青森商業高等学校	2,027 点

◎個人

第1位	八戸商業高等学校	永田 倫	1,422 打数
第2位	八戸商業高等学校	小比類巻 泉望	1,388 打数
第3位	三沢商業高等学校	小山石 優風	1,346 打数
第4位	三沢商業高等学校	北向 陽太	1,236 打数
第5位	三沢商業高等学校	土橋 虎太郎	1,209 打数
第6位	三沢商業高等学校	中 岫 彩乃	1,126 打数

◎1年生の部・個人

第1位	三沢商業高等学校	土橋 虎太郎	1,209 打数
第2位	八戸商業高等学校	成田 愛翔	869 打数
第3位	三沢商業高等学校	千葉 穂乃花	834 打数
第4位	三沢商業高等学校	鶴ヶ崎 桃月	824 打数
第5位	三沢商業高等学校	横浜 心音	791 打数
第6位	青森商業高等学校	白川 智依	677 打数



## 第 57 回青森県高等学校ビジネス計算新人競技大会

兼 第 52 回東北六県高等学校ビジネス計算競技大会青森県予選会

《珠算競技の部》

◎団体競技

第1位	三沢商業高等学校	1,100 点
第2位	八戸商業高等学校	900 点

■読上暗算競技

第1位	三沢商業高等学校	坂澤 里優
第2位	三沢商業高等学校	沢居 悠希
第3位	三沢商業高等学校	小野寺 星七

■読上算競技

第1位	三沢商業高等学校	坂澤 里優
第2位	下山学園高等学校	澁谷 妃鞠
第3位	下山学園高等学校	安田 李菜

◎個人総合競技

第1位	三沢商業高等学校	坂澤 里優	450 点
第2位	下山学園高等学校	澁谷 妃鞠	380 点
第3位	八戸商業高等学校	田村 美都姫	350 点

■応用計算競技

第1位	三沢商業高等学校	坂澤 里優
第2位	下山学園高等学校	澁谷 妃鞠
第3位	三沢商業高等学校	坂本 梨々花
第3位	三沢商業高等学校	小笠原 逞



《電卓競技の部》

◎団体競技

第1位	三沢商業高等学校	1,440 点
第2位	八戸商業高等学校	1,190 点

■読上算競技

第1位	八戸商業高等学校	千葉 瑠栞
第2位	三沢商業高等学校	能方 永真
第3位	三沢商業高等学校	宮部 初音
第4位	三沢商業高等学校	太田 梨南
第5位	八戸商業高等学校	佐藤 柑奈

◎個人総合競技

第1位	八戸商業高等学校	千葉 瑠栞	500 点
第2位	三沢商業高等学校	宮部 初音	490 点
第3位	三沢商業高等学校	新田 優希斗	480 点
第4位	三沢商業高等学校	能方 永真	470 点
第5位	三沢商業高等学校	太田 梨南	460 点
第6位	三沢商業高等学校	石川 悠玖	430 点

■応用計算競技

第1位	八戸商業高等学校	千葉 瑠栞
第2位	三沢商業高等学校	宮部 初音
第3位	三沢商業高等学校	能方 永真
第4位	三沢商業高等学校	新田 優希斗
第5位	三沢商業高等学校	太田 梨南
第6位	三沢商業高等学校	石川 悠玖

## 第 30 回青森県高等学校簿記競技大会

応用部門

◎団体の部

第1位	三沢商業高等学校	379 点
第2位	弘前実業高等学校	354 点
第3位	青森商業高等学校	268 点

基礎部門

◎団体の部

第1位	三沢商業高等学校	254 点
第2位	弘前実業高等学校	212 点

◎個人の部

第1位	弘前実業高等学校	田中 聖真	174 点
第2位	三沢商業高等学校	須藤 輝	151 点
第3位	青森商業高等学校	佐川 依央湊	137 点
第4位	三沢商業高等学校	大滝 泰斗	122 点
第5位	三沢商業高等学校	村田 凌汰朗	106 点
第6位	弘前実業高等学校	石黒 想宇	91 点

◎個人の部

第1位	三沢商業高等学校	遠藤 陽斗	88 点
第2位	三沢商業高等学校	和田 心音	86 点
第3位	弘前実業高等学校	石戸谷 和花	80 点
第4位	三沢商業高等学校	高橋 莉杏	80 点
第5位	三沢商業高等学校	芋田 葵	76 点
第6位	三沢商業高等学校	三村 文也	76 点

※同点は第2審査で順位を決定



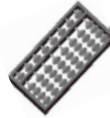


大会参加人数が減少する中、自分と向き合いたくさんの学びを得られた大会になったと思います。来年度の全国大会予選に向けて頑張つてほしいです。

令和七年度第五十七回

青森県高等学校ビジネス計算新人競技大会

九月二十日



三沢商業高等学校 一年 沢居 悠希

三沢商業高校の珠算部は全国でも有数の強豪校であり、そのプレッシャーから、すぐ緊張しました。その名に恥じぬよう練習した結果、団体優勝することができましたが、いつもより点数が低く自分がすぐ足を引つ張つたと思います。次は先輩の足を引つ張らないように日ごろの練習にしっかりと取り組み、わからない問題があつてもすぐあきらめずに先生や先輩に聞いたりしてわからない問題をなくします。そして、来年度入ってくる後輩にかっこいい姿を見せられるようにしていきたいです。

三沢商業高等学校 二年 能方 永真

新人チームになってから初めての大会であり、部員全員が不安と緊張でいっぱいでした。ですが、一人ひとりがこの大会のために全力で練習に取り組んできたことで団体優勝という結果につなげることができたと思います。また、たくさんの方々の応援が自信と励みになり頑張ることができました。今回の大会で、それぞれの課題や成果を把握することができ、それを今後の練習に生かし、部活動全体としてより一層成長していくことができるよう頑張っていきます。



令和七年度第五十七回

青森県高等学校ワープロ新人競技大会

九月十三日

八戸商業高等学校 二年 小比類巻 泉望

ワープロ新人大会に向けた練習では、思うように記録が伸びず、焦りや不安を感じる苦しい時期もありました。ミスが続く、自分の力不足を痛感することもありましたが、基本に立ち返り、正確さと安定性を意識して練習を重ねてきました。仲間と励まし合い、課題を共有しながら取り組めたことが団体優勝につながつたと思います。この経験で得た自信を胸に、東北大会でもこれまでの努力を発揮し、全力で挑戦したいです。



三沢商業高等学校 一年 土橋 虎太郎

今回の新人戦は八戸商業で行いました。以前行つた合同練習会によって、環境に慣れた状態で大会に臨むことができました。前日練習では、会場の雰囲気をつかむことを意識したり、自分が打ちやすい環境が作れるように事前に確認しておいたりすることができました。大会本番にはいつもの実力を出すことができ、結果として一年生の部個人優勝をすることができました。



令和七年度第三十回

青森県高等学校簿記競技大会

十月二十五日

三沢商業高等学校 二年 須藤 輝

結果としては、基礎・応用部門ともに団体一位を取ることができたが、個人では一位を逃してしまいました。個人的には本番に弱いということもあり、ケアレスミスが目立ちました。これは日商簿記一級を勉強しているという自身の慢心が原因だつたと思います。これからはもっと謙虚に、自分はまだ未熟だということを確認して、来年の全国予選では団体・個人とも一位を取ることが目標にして、簿記部一丸となつて日々学習に励んでいきたいです。



弘前実業高等学校 二年 田中 聖真

私は全国大会出場を経て新人戦では団体と個人での優勝を目指して頑張っていました。新人戦前までは一位を取る自信がありませんでしたが、いざ他の学校の生徒たちを見ると段々と不安なくなつていきました。しかし、これまで頑張ってきた日々や全国大会のことを思い出すことで自信を取り戻し、大会に挑むことができました。結果は基礎・応用部門ともに団体二位、個人一位を取ることができました。初めて一位を取ることができてとても嬉しかったです。夏の県予選では団体と個人どちらでも優勝を取れるようにみんなで頑張ります。





## 各校の取り組み

各校では新商品の開発やビジネス教育が進められています。

カシスピーチソース



ベアリーモナカ



タルタルソース



とりさんのおやつばこ



### 青森商業

商品名「カシスピーチソース」  
商品内容「青森県産のカシスとピーチを使用したフルーツソース」

協力者「DINING BAL So-Na 富田やま」  
青森県の特産品の魅力を発信するために、県産食材を原材料としたソースの開発を行いました。作成した様々な商品企画書をもとに富田さんとの打ち合わせを重ね、カシスピーチソースの開発がスタートしました。考案したレシピの試作を企業に依頼し、試作品の改良を経て青商オリジナルのカシスピーチソースが完成しました。今年、青商祭のみの販売となりましたが、今後は販路を拡大してより多くの方々に特産品の魅力を届けられるように活動していきたいと考えています。

### 三沢商業

商品名「ベアリーモナカ」  
商品内容「カシスを餡にした最中」  
テーマ「和菓子で青森県の魅力を発信する」  
協力企業「松栄堂」

日本の文化である和菓子の魅力を再発見するとともに、青森県の名産品を使った和菓子を開発して青森県の魅力を発信しようという試みから課題研究で取り組んでいます。松栄堂に協力を依頼し、いくつかのアイデアを考えブレゼンしました。日持ちの問題であったり、原価の問題であったり、最初からうまくはいきませんが、職員と話し合いをしてようやく完成させることができました。商品を開発するまでの過程と苦労を学ぶことができました。文化祭で販売したところ好評で完売することができました。商品を開発して販売するという貴重な体験をすることができました。

商品名「とりさんのおやつばこ」

協力企業「東北ファーム」  
私たちは東北ファームと共に四代目「愛を込めて届け隊」として活動しています。今年青森県で行われる国スポを応援するための新商品開発と、四代目の新商品開発のラベル製作を行いました。お土産品は、5種類のバームクーヘンを使用した「とりさんのおやつばこ」と名付け、パッケージには職員が描いたイラストの入ったかわいらしいデザインになるよう工夫しました。新商品のタルタルソースは「計算された完璧な味」という商業らしいユニークなキャラクターフレーズにしました。自分たちで作り上げたものが完成し、とても嬉しく思っています。



### 弘前実業

ビジネス基礎における高大連携  
一学年商業科二クラスと情報処理科一クラスが、ビジネス基礎の情報の収集と活用の分野において学習内容をより深めるため、弘前大学の図書館を利用していただきました。図書館の利用方法や、これから情報を収集する際の検索方法などを始め、大学生の学習方法を身近で見ることができ生徒にとって様々な学びに繋がったと感じています。



ヘリナンシエ



青森ブラックサクヘリ



### 八戸商業

商品名「ベリナンシエ」  
商品内容「青森ブラックザクベリ」  
協力企業「4c'sfactory」

私たちは「ブラックベリーの知名度を高めたい」というテーマのもと、商品開発に取り組みました。ブラックベリーは生活習慣病予防に効果が期待できる果物ですが、知名度が低く、味や存在があまり知られていないという課題があります。そこで、多くの人にブラックベリーの魅力を知ってもらうため、ブラックベリーを使用した商品を開発しました。  
開発した商品は、フィンナンシエやくずアイスなど、年齢を問わず食べやすく、親しみやすいものを選びました。商品開発の過程ではさまざまな課題がありました。商品開発の難しさと楽しさを実感するとともに、商品の魅力を伝える工夫の大切さを学ぶことができました。



## 中堅教諭等資質向上前期研修を終えて

青森県立青森商業高等学校

教諭 伊藤 大貴

採用を頂いてから間もなく5年が過ぎようとしています。新卒1年目に勤務した弘前実業高校、その後の青森商業高校の勤務は私にとって大きな財産となりました。生徒への関わり方、仕事への姿勢、「わかる」授業デザインを追究し続ける沢山の先生方の背中を見続け、一步ずつでも近づいていけるように努力し探究し続ける毎日であったと思います。私自身沢山の失敗をしてしまい、多大なるご迷惑をおかけしてしまいましたが、皆様のフォローがあり、なんとか一人の教員として仕事ができています。誠にありがとうございます。

共通講座Ⅰでは、「生徒指導」「保護者との関わり方」「ICT活用事例」「アップデートとリセットを念頭に置いた授業デザイン」を行いました。その中でも深く印象に残っているのは「生徒指導」「授業デザイン」です。「生徒指導」では私自身、今年一年は考えるべき瞬間が何度も訪れました。やっておいてくださいでは通用しないこと。最初は自分以外に原因を探すこと。苦手に向き合うことが苦手なこと。全体への指示＝後で誰かに聞こうということ。以上はあくまで一例ですが、社会で活躍する職業人を育成する商業高校で勤務する上でどのように教え、育てるべきなのかの壁に悩んでいました。ただ、研修を受講したことにより、私自身の考えが「個人」から家庭も含めた「チーム学校」での対応へと少しずつ変わっていきました。保護者との電話等での日常的なやりとり、生徒指導は担任だけの仕事や責任ではないこと。意識が少し変容するだけで、少しずつではありますが生徒の成長を感じる余裕が自分自身に生まれてきました。

次に「授業改善」についてです。初任の年は、ICTが続々と導入され始めた年でした。試行錯誤しながら、ICTを活用した授業の実施が目的となっていました。今回、協力校研修において研究授業を行う機会を頂き、慣れからのリセット、ICTを目的から教育効果を見据えた手段にアップデートした「わかる」授業のデザインを目的に行いました。私の中でタブレット等のICTは板書時間を削減し、データを自由に保存することが出来る上、調べ物や自らの思考の組み合わせで知りたいを無限に増幅、追究できるツールだと思っています。今回の研究授業では、一般的なデジタルデータに記入して提出する形式のみではなく、学びに対して自ら疑問を持ち、調べて情報を取捨選択するという本来あるべきICTの活用方法が私の中で見えてきたように思います。しかしながら、時間配分や想定外への対応等、これからも自己研鑽を怠ることが出来ないとも同時に感じることで、リセットとアップデートを肌で体感することができました。これからも多くの先生方や生徒の反応から様々なことを吸収し、常に伊藤大貴 Ver 2.0 → 3.0 と進化していきます。

最後に今年度は山形県で開催された東北六県商業教育研究大会において、本県ビジネス情報分野研究委員会を代表して、三橋先生と発表をさせていただきました。まだまだ未熟で力不足である為、沢山の方々から貴重なご意見を頂戴し、分からないというクエスチョンに対し、アンサーを飛ばして頂けるという恵まれた環境にあることを改めて実感し、何度も助けられました。その経験から、今回の中堅教諭等資質向上前期研修のようにこれからも様々な研修や勉強会を受講し、自身の知見を深め、次は私が誰かを支えられるようになりたいと強く感じました。加えて、我々が生徒へ何かを還元するためには、何かを蓄えなければなりません。ビジネスの世界ではその蓄えのことを利益と言いますが、私達は知識と経験であると思います。知識と経験はネットワーク管理の教科書では暗黙知といい、他人に伝達することが難しいが、可視化し、ナレッジマネジメントすることで、育成に大きな効果が期待できるとされています。これから先も、知識と経験を生徒に還元する上で多くの課題に直面し、思い悩むときも必ずあります。しかし、私は皆様と共に働くことが出来る環境という武器を持って、日々精進していきたいと思っています。拙い文章にはなってしまいましたが、これからも青森県商業界を微力ながら支え、商業科目の面白さを伝え、商業を学びたいという生徒が増加するように、自己研鑽と努力をして参りたいと思います。これからもご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いたします。



## 中堅教諭等資質向上前期研修を終えて

青森県立三沢商業高等学校

教諭 附田 真菜

三沢商業高校に勤務して5年が経過しました。商業教育部に2年間所属し、その後1学年担任、2学年担任を務め、今年度は3学年担任を担当しました。今年度は進路指導に関して多くの不安を抱える中、進路指導部の先生方や学年団をはじめ、さまざまな先生方の助言を受けながら校務に取り組むことができました。また、この5年間で三沢商業高校のみならず、高教研や専門委員会等を通して、多くの商業科の先生方にも支えていただきました。力不足で至らない点も多かったことと思いますが、多方面からご指導、ご支援を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。

振り返ると、この5年間は瞬く間に過ぎ去ったように感じます。最初の2年間は商業教育部に所属し、右も左も分からない状態で戸惑う場面もありましたが、商業科教員として必要な基礎的な知識や姿勢を数多く学ばせていただきました。その後の3年間は担任として生徒と向き合い、日々の関わりの中で担任業務のやりがいと責任の重さを実感しました。学習や部活動に懸命に取り組む姿、仲間と協力して学校行事を成し遂げる姿、友人と語り合う何気ない時間、悩みながらも前に進もうとする姿、進路決定を喜ぶ姿など、その一つ一つがかけがえのない時間であり、クラス36名の成長の過程に関われたことに大きな喜びを感じています。

一方で、生徒への声掛けや資格取得に向けた学習支援など、学級経営において中長期的な見通しをもった指導が十分であったかという点については、課題も残りました。これらの反省を踏まえ、今後の指導に生かしていきたいと考えています。

中堅教諭等資質向上前期研修の共通講座Ⅰでは、「生徒指導提要」の改訂を踏まえ、これからの生徒指導の在り方について理解を深めました。中でも強く印象に残ったのは、発達支持的生徒指導の考え方です。自己理解力や自己効力感、コミュニケーション能力、他者理解力、思いやり、共感性、人間関係形成力、協調性、目標達成力、課題解決力といった力を、生徒が主体的に伸ばしていくことを尊重し、その過程を学校や教師が後方から支援していくという姿勢に大きな学びを得ました。教師の価値観を一方向的に押し付けるのではなく、生徒一人一人に応じた関わりを大切にする必要性を改めて認識しました。今年度は特に生徒指導の難しさを感じる場面が多くありましたが、教員間の連携や外部専門機関との協働、家庭との連絡を通して、チーム学校として対応する重要性を学ぶことができました。

共通講座Ⅱでは、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善について、他教科の先生方の実践から多くの示唆を得ました。生徒が学習に意欲的に取り組むためには、教師自身が授業内容や方法を見直し続けることが不可欠であると再認識しました。

商業教育講座では、「データに基づいたマーケティング意思決定」や「世界一楽しい決算書の読み方」について学びました。ビジネスの視点を取り入れた簿記会計の指導では、身近な企業事例を活用することで、生徒の関心を引き出しやすくすることを実感しました。研修で得た知見を授業に取り入れることで、生徒の主体的な学びを促すことができると考えています。商業科目において、学習内容と実社会とのつながりを生徒自身が理解できる授業づくりの重要性を、改めて意識するようになりました。これらの研修を通し、教師としての姿勢や商業科教員としての役割を見つめ直すとともに、自身に不足していた知識を補うことができたと感じています。

この5年間を通して、教師という仕事の魅力と、同時にその責任の重さや難しさも実感してきました。順調なことばかりではなく、立ち止まりそうになることもありましたが、周囲の先生方や生徒の存在に支えられ、ここまで歩んでくることができました。今後も学び続ける姿勢を忘れず、青森県の商業科教員として教育の充実に寄与できるよう努めてまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いたします。



## 中堅教諭等資質向上前期研修を終えて

青森県立大間高等学校

教諭 三橋 壮大

採用から、5年目を迎え、中堅教諭等資質向上前期研修を受講させていただきました。改めて5年間を振り返ってみると、生徒たちや保護者の皆様、そして同僚の先生方に支えられ、多くの学びと成長の機会をいただきました。八戸商業高校で新採用から4年、今年度から大間高校で勤務させていただいております。八戸商業高校では、4年間担任を務めさせていただき、初めての卒業生を出すことができました。今まで勤務させていただいた、黒石商業高校、八戸商業高校、現在勤務させていただいている大間高校の先生方には感謝の気持ちしかありません。ありがとうございます。

以下に研修より学んだことを述べたいと思います。共通講座Ⅰでは、「保護者とのよりよい関係づくり」について学ぶことができました。私自身、担任をしていた際、とても苦慮していた部分でした。教員が保護者と良好な関係を構築するためには、まず「双方向のコミュニケーション」を意識することが欠かせません。保護者の思いや不安を丁寧に受け止め、保護者と教員は生徒を一緒に育てると同じ目標をもったパートナーとして協力していかなければいけないと感じました。そのためには、保護者に対して日頃から生徒の学校での様子や学習状況を分かりやすく伝え、保護者が相談しやすい雰囲気をつくることが求められます。また、何かあった際には早めに共有し、本当の問題がどこにあるのか把握することが重要であり、日頃から生徒の様子、保護者とのやりとりを記録することの必要性を感じました。

共通講座Ⅱでは、「キャリア教育の充実」について理解を深めることができました。あおもり未来教育ビジョンで掲げられたウェルビーイング向上、青森県の目指す教育で掲げられた未来を創る人財育成というキーワードをもとに研修を行いました。各学校での取組や先生方の意見を参考に、キャリアパスポートの活用、学校外の教育資源との連携、協力により、効果的なキャリア教育を推進していく必要があると感じました。

商業教育指導者講座、共通講座の分科会では、学習指導要領、授業改善について学ぶことができました。学習指導要領については、「経済産業省 未来人財ビジョン」より、2050年に社会から求められる力は、現在に比べ大きく変化することが分かりました。社会の変化に対応するためには、新しい時代に求められる力の育成を目指す資質・能力の三つの柱が重要であると再認識しました。簡単にまとめてみると、学びを人生に活かすための「学びに向かう力・人間性等」、生きて働くための「知識及び技術」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力、表現力等」の育成を目指し、「理論」と「実践」を往還させる学びが商業教育では重要です。授業改善については、「主体的・対話的で深い学び」の視点で自らの授業を振り返る良い機会となりました。目線あわせとして、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の3つに分けて、授業改善アクションプラン・リフレクションシートを用いてまとめ、それを踏まえて演習、協議を行いました。多くの先生方と意見共有しながら、自分の授業を見つめ直すことができました。

最後になりますが、勤務校の先生方のご協力により、充実した毎日をご過ごすことができ、このような有意義な研修に参加することができております。学生時代を含めると、約10年間、教科「商業」を学ばせていただいておりますが、この教科にしかない奥深さ、面白さ、難しさを最大限、生徒に伝えていくために、今まで以上に私自身が学ぶ姿勢を持ち続けていきたいと思っております。初心を忘れず、これからも青森県の商業教育のために尽力していきます。今後とも、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



## 中堅教諭等資質向上後期研修を終えて

青森県立八戸商業高等学校

教諭 榎 祥吾

採用から12年が経過し、弘前実業高校で4年間、三沢商業高校で7年間、そして現在の八戸商業高校で1年目を迎えています。この間、多くの先生方や生徒に支えられながら、教員としての経験を積み重ねていくことができました。改めて、これまで関わってくださった皆様に心より感謝申し上げます。

今年度、中堅教諭等資質向上後期研修を受講し、自分自身の役割や責任について深く考える機会をいただきました。研修の中で特に印象に残ったのは、「ミドルリーダーとしての自覚を持つこと」です。学校組織の中で中核的な役割を担う立場として、単に自分のクラスや授業だけでなく、学校全体の方向性や職場環境づくりに関わっていく必要があることを強く感じました。これまで以上に、同僚と協働し、チームとして学校を支えていく姿勢が求められていると実感しています。もちろん、会議での発言回数も増えそうですが、そこは笑顔で乗り切りたいと思います。

また、研修では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について学びました。従来の知識伝達型の授業から、生徒が自ら考え、対話し、探究する授業への転換が求められています。そのためには、指導と評価の一体化が不可欠です。評価を単なる結果の確認にとどめず、学習過程を見取り、次の学びにつなげる仕組みを整えることが重要であると理解しました。さらに、不登校対応に関する講座も非常に有意義でした。生徒一人ひとりの背景や状況に応じた柔軟な対応が求められる中で、学校全体で支援体制を構築することの重要性を再認識しました。

今年度、「探究スタートアップラボ」という研修会に参加し、商業高校のあり方や育てたい生徒像について改めて考える機会をいただきました。普通科志向が強まる中で、商業高校に求められる役割や、今後の社会で生徒が活躍するために必要な力について議論する中で、商業教育の価値を見つめ直す必要性を感じました。特に、地域や企業と連携した実践的な学びを提供することが重要だと考えています。専門科目を通じて、生徒が学びを「自分事」として捉えられる授業を工夫していきたいと思います。例えば、地域課題をテーマにしたプロジェクト学習や、データ活用・マーケティング戦略を実際のビジネスに結びつける授業など、社会とつながる学びを少しずつ取り入れていければと考えています。また、地域企業との連携を強化し、インターンシップや課題解決型の学習を通じて、生徒が社会で活躍する力を育むことも、今後の大きな課題です。こうした取り組みを通じて、生徒が将来、地域や社会に貢献できる人材へと成長することが、商業高校の使命の一つだと思います。もちろん、授業準備には時間がかかる場面もあると思いますが、「自分自身も学び続ける」という気持ちで取り組んでいきたいです。これからも、現場でできることを一歩ずつ試しながら、商業教育の可能性を広げていければと考えています。

今後の抱負として、第一に授業改善に力を入れたいと思います。社会に出て活躍できる生徒を育てるために、「学ぶことの楽しさ」を実感できる授業を目指し、主体的・対話的な学びを取り入れる工夫を重ねていきます。第二に、職場づくりです。教員同士が支え合い、協働できる環境を整えることで、学校全体の力を高めたいと思います。第三に、地域に求められる学校づくりです。地域と連携し、生徒が社会で活躍できる力を育む教育活動を推進していきたいと考えています。

最後になりますが、今回の研修を通じて得た学びを、日々の実践に生かしながら、教員としてさらに成長していきたいと思っています。これからも多くの先生方のご指導をいただきながら、目の前の生徒のため、そして地域社会のために尽力してまいります。時には笑顔で、時には深呼吸で、これからも挑戦を楽しんでいきたいと思っています。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



## 中堅教諭等資質向上後期研修を終えて

青森県立弘前実業高等学校

教諭 柴崎 健太郎

私は今年度、中堅教諭等資質向上後期研修を受講させていただき、教科では「指導と評価の一体化」というテーマのもと、単元計画から授業計画、評価について実践を交えながら学ばせていただきました。また、生徒指導に関することや保護者対応、教職員の服務規律など初任者研修を思い起こさせる内容の講義を受講することができ、初心を振り返り、これからも努力を積み重ね、教員としての資質や能力の向上に努めていかなければならないと感じることもできました。その中でも、中堅教諭等資質向上後期研修で特に印象に残っている内容として、私たち「向上・発展期」のキャリアステージにある教員は、ミドルリーダーとしての役割を果たしていかなければならないと講義の中で言われたことが挙げられます。私は臨時講師からこれまで、まずは自分のことをしっかりとやれるようになってはならないという考えのもと、学校で仕事をしてきました。それがいつしか自分のことだけやっていればよいという考えになっていることを最近感じていたこともあり、中堅教諭等資質向上後期研修でミドルリーダーについて話を聞いたときには、これまでの自分について反省しなければいけないところがあると振り返ることができました。

私はこれまで、若葉養護学校（1年）、中里高校（5年）、黒石商業高校（1年）、青森商業高校（5年）、弘前実業高校（8年）と20年間、臨時事務職員や臨時講師、教諭として仕事をさせていただきました。この20年間のうち、15年間担任をしていたこともあり、私の役割は基本的には自分のクラスの生徒を指導し、成長を促し、次の進路へつなげることであると考えます。そのため、隣のクラスの生徒や他学年の生徒について、「どんな生徒なのか」、「どんな良いところがあるのか」、「どんな問題を抱えているのか」などそういったところまで目が向くことがほとんどありませんでした。今回の研修で、私自身、教員としてまたは担任としてまだまだ力不足な面は多々あると認識しながらも、学校が生徒にとってよりよい場所となるよう、今後は他クラスや他学年の生徒とのコミュニケーションを増やしたり、そして学校課題や学年課題を認識し、その解決や改善に向けた取り組みを学年や分掌内で計画実施できるよう精進していきたい、そう思える研修を過ごすことができました。

日々の業務に追われ、なかなか自分自身について振り返ることがない中、中堅教諭等資質向上後期研修の機会をいただけたことを大変ありがたく思っております。各分野において、新しい内容が取り入れられ、日々、勉強の毎日です。教材研究に充てる時間がどうしても後回しになりがちな日常をなんとか改善できないものかと思うこともあります。世の中の風潮や生徒の変化に戸惑うことや悩むこともないわけではありません。それでも目の前の生徒のためになんとか踏ん張って頑張ろうと思えるのは、支えてくださる先生方のおかげであると日々感じております。生徒のために教員が支え合って仕事ができる職場となるよう、その一員となれるよう努力していきたいと考えています。生徒たちに分かる授業をし、学ぶ意欲を育むために努力していきたいと思っております。そして、これからの20年間を何か新しいことや苦手なこと、これまで後回しにしてきたことなどできなかったことに取り組んでいきたいと思っております。今後ともご指導のほどよろしく願いいたします。



## 黒高といえば「情報デザイン科」

青森県立黒石高等学校  
校長 木立 徹

私は、黒石高校に校長として赴任して2年間、情報デザイン科の活動を体験してきた。黒石商業高校との統合により令和2年度設置の新しい青森県立黒石高等学校が6年目を迎え、ようやく黒石高校といえば「情報デザイン科」という位置が確立してきたと感じている。それだけ地域とのつながりが強くなり、中南地区だけではなく青森県全域に情報デザイン科が知られるようになってきた。中南地区では産学官連携事業も行われ、高い評価を頂いている。本校の活動が信頼されてきている証と考えている。3年有志による弘前地区消防事務組合消防本部との連携事業で、弘前消防エンブレム・被服文字、車両文字デザインの制作が行われ、これら等の活動を通して、情報デザイン科の活動が地域に愛され、さらに輪が広がっていくことを願っている。

さて、黒石高校情報デザイン科の令和7年度の活動を紹介したい。

### A 3学年デザイン授業（課題研究）

- (1) 「全国高校生1億円プロジェクト」参加による地域活性化（三沢市）
- (2) 「導水管路耐震化（二重化）事業PRのためのデザイン」
- (3) 「防災紙芝居のRe:デザイン」（弘前地区消防事業組合）こども園にて「読み聞かせ」を実施
- (4) 「Spa×Camp・『おてつたび』プロジェクトのためのデザイン」
- (5) 「原子力発電の印象と事実のギャップを精査するための広告媒体物の制作」
- (6) 「黒石の水をPRするための各種デザイン」（津軽広域水道事業団、弘前大学）
- (7) 「青森の偉人・名景等の魅力を発信する新しいゲーム開発」

### B 2学年デザイン授業（デザイン実習Ⅱ、コンピュータグラフィックス）

- (8) 「依頼事業に学ぶⅠ ～Orbray株式会社/社員食堂のデザイン～」
- (9) 「依頼事業に学ぶⅡ ～五代農産加工りんごジュースラベルの制作～」
- (10) 「産学官連携による地域デザイン」事業（中南地域県民局ほか）

### C 有志による課外活動

- (11) 黒石りんご祭りイメージキャラクター「二代目/宮美あかね」の開発

### D 1～3学年情報デザイン授業

- (12) 「第4回情報デザイン科展」 Where Diverse Perspectives Meet ～異なる視点が会える場所～

その他にも情報デザイン科の活動は多岐にわたっており、有志による授業以外での活動も地域の課題解決、活性化につながっていると考えている。

さらに、今年度の第35回全国産業教育フェア福島大会では、弘南鉄道応援商品「バズる商品開発」から「広告をつくる」事業への変遷など、黒石高校情報デザイン科のこれまでの活動の歩を発表することができた。大会当日には、風張教育長もお見えになり、発表生徒を激励して頂いた。

「デザイン」を通して地域の課題を解決していくというテーマのもと、私の母校である黒石高校情報デザイン科のこれからの活躍を応援すると共に、青森県の商業教育の発展を祈念している。





## 「商業教育、すべてに感謝！」

青森県立三戸高等学校  
教頭 土岐 一行

高校1年生から簿記会計や商業一般(今で言うビジネス基礎)、情報処理で商業の学びの楽しさを知り、日々の学校生活のなかで自分の成長が実感でき、進路面だけではなく、絶対将来役に立つという確信を持ちながら三戸高校の商業科で3年間を過ごし、自分も商業科の教員になりたいとの思いで大学へ進学しました。

昭和63年に関東地方の私立大学を卒業し、同年4月から商業の臨時講師として教員の第1歩を踏み出しました。スタートは母校である三戸高校で2年間、新採用で平成2年度から教諭として大間高校に7年、それから三戸高校14年(2度勤務)、百石高校3年、田子高校6年、途中で情報の免許を取得したものの、基本的には商業科の教員一筋でやってまいりました。そして、令和2年度より教頭として田子高校2年、三戸高校4年の38年間勤務させていただきました。

特に母校の三戸高校では、臨時講師として2年、教諭として14年、教頭として4年、通算すると20年の勤務で、幸せな教員生活を過ごせたことに大きな喜びと機会をいただいたすべての方々に感謝をしております。

教員になり、思い出深いのは、2度目の三戸高校赴任の時に、商業科の生徒を盛り上げ、1年生から3年生までの商業を学ぶ生徒が、共通したイベントをとおして、生徒に自信を付けさせることについて何かできないものか、という当時の教科主任の問題提起があり、そこから校内電卓競技大会が考え出され実施したことです。1年生から3年生までの商業科の生徒が、教室で使用している自分の机と椅子を体育館に移動させ、段位レベルの問題の乗算、除算、見取算を各8分で行い、競い合うもので、学年順位と総合順位で表彰するものです。これが起爆剤となってか「電卓ならやればできる、ワープロなら自信が持てる」など、商業科目に対する生徒の目の色が徐々に変わり、ワープロ実務検定や簿記実務検定、情報処理検定の資格取得を目指し合格する生徒も増えはじめ、日本電卓検定協会主催の検定試験では、初段から十段までの生徒や更に上の名人位が数名輩出するようになっていきました。それが就職や進学の目標の向上に繋がり、国公立大学へ進学する生徒も出てきました。

二つ目は、青森県商業教育研究会主催の第3回青森県商業高校生海外研修「簿記発祥の地・サンセポルクロを訪ねて」に県商研加盟校の生徒と本校生徒を引率したことです。この海外研修会は、イタリアのコロッセオやバチカンなどを見学するだけではなく、イタリアのサンセポルクロにあるルカ・パチョーリ商業専門学校やフランスのパリ国立商業専門学校で、商業を学ぶ生徒が現地で商業を学ぶ学生達と交流会をすることも目的の一つとなっております。そこで、海外研修で参加者数(7名)が多い三戸高校が、交流会の先駆を切って学校行事の体育祭などで行ってきた「三高音頭」を披露することになりました。生徒たちは学校から法被を持参し、イタリアの学生や先生方を輪で囲み、堂々と「三高音頭」を披露してくれました。帰国後すんなりと「三高音頭」を引き受けてくれた生徒たちに感謝をし、生徒たちが逞しく見えたことも、いい思い出として記憶に残っています。

三つ目は、商業科閉科に伴い、ビジネスマネジメントコース(BMC)が開設され、起業家教育を柱として、三戸町内の空き店舗を利用してチャレンジショップが行われてきたことです。このチャレンジショップが高く評価され、令和5年にキャリア教育推進校文部科学大臣賞をいただくことができました。三戸町の方々をはじめとして、多くの方々の支えがあったチャレンジショップでしたので、このような評価をいただけることに対し感慨深いものとなりました。改めまして感謝申し上げます。

最後に、これまで、総合的科目研究委員会と会計分野研究委員会の2つの委員長の委嘱を受け、皆様に支えられ、ここまでやってくることができました。先生方に感謝の気持ちです。また、青森県商業部会の皆様にはいろいろとアドバイスなどいただき有り難うございました。

出会った先生方に感謝の気持ちで一杯です。皆様の今後一層の御活躍をお祈り申し上げます。



### 新採用となって

青森県立三沢商業高等学校

教諭 鶴ヶ崎 礼奈

採用をいただいてからの1年間を振り返ると、関係各所にご迷惑をおかけする場面も多くありましたが、その都度、様々な先生方に助けていただき、支えられながら過ごした毎日だったと改めて実感しております。この場をお借りして、深く御礼申し上げます。

臨時講師としては、青森商業高校1年、八戸商業高校1年、三沢商業高校にて4年勤務し、新採用として三沢商業高校で5年目を迎えることとなりました。青森商業高校での勤務は、年号が平成から令和へと変わった年であり、私にとって社会人として初めて働いた年でもありました。当時の強い緊張感は、今でも鮮明に覚えています。分からないことをすぐに相談できる環境が整っており、日頃から温かく声を掛けてくださった先生方、そして何も分からない私に対し、一つ一つ丁寧に、時には厳しくご指導してくださった指導教諭の先生には、心から感謝しております。八戸商業高校では、自分の専門である部活動を初めて持たせていただきました。高校時代、お世話になった顧問の先生と共に部活動を担当できたことは、私にとって大きな学びの機会となりました。また、教科指導では初めて情報処理を担当し、自分の知識や指導力の不足を痛感する1年となりました。三沢商業高校では、教員を志すきっかけを与えてくださった恩師と共に勤務することとなり、現在は専門である部活動も一緒に担当しております。仕事で失敗した際にも温かく励ましていただき、失敗を成長につなげることのできる環境の中で、未熟な私を見守っていただいていると感じております。また、年齢の近い先生方も多く、日々の会話を通して互いに支え合いながら、生徒と向き合うことができます。このように、多くの方々に支えられた恵まれた環境の中で、現在の自分があることに、改めて感謝の思いを強くしております。

初任者研修では、商業科の同期がいなかったこともあり、心細さを感じることもありましたが、新堂指導主事より一対一で丁寧に指導していただけたことは大変ありがたい経験でした。講義に加え、他教科の模擬授業を見学する機会にも恵まれ、視野を広げる貴重な学びとなりました。また、協力校研修においてお世話になった青森商業高校の皆様にも深く感謝申し上げます。4月から担任業務と並行して初任者研修や研究授業の準備に取り組む日々が続く、非常に慌ただしい毎日でした。研究授業の直前にインフルエンザに罹患し、十分な準備ができなかったこと、さらに前日に地震の影響により休校となるなど、想定外の状況が重なり、大きな不安を抱えながら授業に臨みました。ICTの活用にも挑戦しましたが、当日に機器トラブルが発生し、日頃から積極的に使用し、失敗を恐れずに挑戦する姿勢の重要性を学びました。

今後は、学校現場や初任者研修での学びを生かし、教科指導に関しては、生徒が主体的に学びに向かえるような授業づくりに取り組んでいきたいと考えています。単に教科書の内容を伝えるのではなく、生徒にどのような力を身につけてほしいのかを意識しながら、生徒のやる気を引き出すきっかけづくりができるような授業を展開できるように励んでいきます。生徒指導や進路指導に関しても一人一人の思いに寄り添い、高校時代という限られた時間の中で、生徒が将来、自分の力で生きていく力をつけられるように、尽力していきたいと思っております。

最後になりますが、生徒と共に学び続けることのできる教師となれるよう、日々研鑽を重ねていきます。挑戦することは得意ではありませんが、生徒のために何ができるのかを模索し、これからも青森県の商業教育の発展に貢献できるよう、努力してまいります。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

## I 研究会の概要

### 1. 名称

青森県高等学校教育研究会商業部会  
 青森県高等学校商業教育研究会（昭和63年5月10日設立）

### 2. 組織

会長 田中正也（青森県立青森商業高等学校）  
 副会長 中川伸吾（青森県立弘前実業高等学校）  
           田村滝子（青森県立八戸商業高等学校）  
           豊川武伸（青森県立三沢商業高等学校）  
 参与 木立徹（青森県立黒石高等学校）  
           木下保樹（下山学園高等学校）  
 運営委員 14名  
 監査委員 2名  
 庶務会計 3名  
 委員長 谷村学  
 検定委員長 ビジネス計算・商業経済 岩間由香子  
                   簿記・会計 3 長谷川善弘  
                   情報処理 太田菜穂子  
                   ビジネス文書 須藤慎二  
                   英語・ビジネスコミュニケーション 谷村学  
 研究誌編纂委員長 吉岡香織  
 研究委員会 マーケティング・マネジメント研究委員会（八戸商業高等学校）  
                   会計研究委員会（弘前実業高等学校）  
                   ビジネス情報研究委員会（三沢商業高等学校）  
                   教育課程等研究委員会（青森商業高等学校）  
                   総合的科目研究委員会（青森商業高等学校）

### 3. 会員校 14校

### 4. 会員数 104名

### 5. 刊行物

「君の未来をひらく 商業教育（中学校向けパンフレット）」	令和7年 7月11日発行
「青森商研NEWS夏号」	令和7年 7月22日発行
「青森商研NEWS秋号」	令和7年10月24日発行
「青森商研NEWS冬号」	令和8年 1月21日発行
「2025 青森商業教育 MERCURY」	令和8年 3月31日発行

6. 年間行事一覧

年	月	日	行 事	会 場
7	4	1	令和6年度 会計監査	青森商業高等学校
	4	10	第1回商業部会・県商研運営委員会	青森商業高等学校
		21	第1回総合的科目研究委員会	青森商業高等学校
		22	第1回ビジネス情報分野専門委員会	総合社会教育センター
		24	第1回会計分野専門委員会	総合社会教育センター
		25	第1回マーケティング・マネジメント分野専門委員会	総合社会教育センター
	5	8	第1回商業部会・県商研役員会・総会・全商検定説明会	アピオあおもり
		15・16	第1回東北六県商研連絡委員協議会	仙台商業高等学校
		26・27	全商春季総会・研究協議会	東京・ティアラこうとう
	6	7	全国高等学校ビジネス計算競技大会県予選会	青森商業高等学校
9		第1回研究誌編纂委員会	青森商業高等学校	
12・13		第1回東北六県商研理事会	仙台商業高等学校	
14		全国高等学校情報処理競技大会県予選会	青森商業高等学校	
16		第2回総合的科目研究委員会	青森商業高等学校	
17		第2回会計分野専門委員会	総合社会教育センター	
17		第2回ビジネス情報分野専門委員会	総合社会教育センター	
21		県高校ワープロ競技大会・全国高校ワープロ競技大会県予選会	八戸商業高等学校	
21		全国高等学校簿記競技大会県予選会	三沢商業高等学校	
24	第2回マーケティング・マネジメント分野専門委員会	総合社会教育センター		
7	2	第2回ビジネス情報分野専門委員会	総合社会教育センター	
	4	第2回商業部会・県商研運営委員会	青森商業高等学校	
	8	全国商業高等学校英語スピーチコンテスト県予選会	三沢市公会堂	
	11	青森県高等学校生徒商業研究発表大会	総合社会教育センター	
	17	第3回ビジネス情報分野専門委員会	総合社会教育センター	
	22	商研ニュース夏号発行	青森商業高等学校	
	24	第72回全国高等学校ビジネス計算競技大会	神奈川・横浜武道館	
	25	第41回全国高等学校簿記競技大会	千葉商科大学	
	26	第37回全国高等学校情報処理競技大会	千葉商科大学	
	29	第72回全国高等学校ワープロ競技大会	東京・産業貿易センター	
	30-8/1	第17回全国商業教育指導者研修会（教員対象）	東京・全商会館	
8	5-7	第73回全国商業教育研究大会	東京・日本大学商学部	
	6-8	Webシステム開発入門	東京・全商会館	
	19-20	第70回青森県高等学校商業教育研究大会	三沢・グランヒルつたや	
	23	第29回東北六県高等学校生徒商業研究発表大会	山形・酒田市総合文化センター	
	30	津軽地区情報処理技術者試験対策講座	弘前実業高等学校	
9	4-5	第73回東北六県商業教育研究大会	山形・ホテルメトロポリタン山形	
	8	第3回マーケティング・マネジメント分野専門委員会	総合社会教育センター	
	13	青森県高等学校ワープロ新人競技大会・東北六県県予選会	青森商業高等学校	
	21	第42回全国商業高等学校英語スピーチコンテスト	東京・全商会館	
	20	青森県高等学校ビジネス計算新人競技大会・東北六県予選会	三沢商業高等学校	
	25	会計分野研究委員会（教員対象研修会）	総合社会教育センター	
10	1	ビジネス情報分野専門委員会（教員研修会）	青森商業高等学校	
	2・3	全商秋季総会・研究協議会	山口・かめ福オンプレイズ	
	9・10	第2回東北六県商研連絡委員協議会	福島・福島商業高等学校	
	24	商研ニュース秋号発行	青森商業高等学校	
	25	第62回東北六県高等学校ワープロ競技大会	秋田・大館国際情報学院高等学校	

	25	青森県高等学校簿記競技大会	弘前実業高等学校	
11	1	第52回東北六県高等学校ビジネス計算競技大会	岩手・水沢商業高等学校	
	10	第2回研究誌編纂委員会	青森商業高等学校 (Web)	
	12	第4回ビジネス情報分野専門委員会	総合社会教育センター	
	13・14	第2回東北六県商研理事会	福島・福島商業	
	19	第3回会計分野専門委員会	総合社会教育センター	
	20	第4回マーケティング・マネジメント分野専門委員会	総合社会教育センター	
	26	高大連携推進協議会	青森商業高等学校	
	27	第3回総合的科目研究委員会・第1回教育課程等研究委員会	三沢商業高等学校	
	12	3	第3回商業部会・県商研運営委員会	青森商業高等学校
8	1	21	商研ニュース冬号発行	青森商業高等学校
	2	2	第2回商業部会・県商研役員会	青森商業高等学校
		7・8	津軽地区高等学校日商簿記2級直前対策講座	弘前実業高等学校
		21	情報処理技術者試験対策講座 (県南地区・オンライン)	三沢商業高等学校
3	31	‘25青森商業教育 (マーキュリー) 発行	青森商業高等学校	

## ○ 研究活動の概要

### 1. 総 会 青森県高等学校教育研究会商業部会総会

- (1) 期 日 令和7年5月8日 (木)
- (2) 議 題
- ・令和6年度庶務報告・事業報告
  - ・令和6年度監査報告
  - ・令和6年度決算報告
  - ・役員改選
  - ・令和7年度事業計画 (案)
  - ・令和7年度予算 (案)

### 2. 研究大会 令和7年度 第70青森県高等学校商業教育研究大会

### 3. 研究委員会

#### (1) マーケティング・マネジメント分野研究委員会・専門委員会 (事務局：八戸商業高等学校)

##### ○ 第1回

日 時 令和7年4月25日 (金) 10:00～15:30

会 場 青森県総合社会教育センター (第3研修室)

内 容

- (1) 令和7年度年間計画について
- (2) 令和7年度教員対象研修会について
- (3) 令和8年度高教研・東北商研大会の発表等について

##### ○ 第2回

日 時 令和7年6月24日 (火) 10:00～15:30

会 場 青森県総合社会教育センター (第3研修室)

内 容

- (1) 令和7年度教員対象研修会 (高教研分科会) について
- (2) 令和7年度研究活動進捗状況について
- (3) 令和8年度高教研・東北商研大会の発表について

- 令和7年度 教員対象研修会「起業家による講演会及び座談会」  
期 日 令和7年8月19日(火) ※高教研第1分科会  
会 場 ホテルグランヒルつたや  
参加者 25名(うち専門委員10名)  
内 容 演題「青森県から全国・世界を取りに行くマーケティング 実践編」  
講 師 タグボート株式会社 代表取締役 水口 清人 氏

- 第3回  
日 時 令和7年9月8日(月) 10:00~15:30  
会 場 青森県総合社会教育センター(第3研修室)  
内 容  
(1) 令和7年度教員対象研修会(高教研分科会)の総括について  
(2) 令和7年度研究活動進捗状況について  
(3) 令和8年度高教研・東北商研大会の発表について

- 第4回  
日 時 令和7年11月20日(木) 10:00~15:30  
会 場 青森県総合社会教育センター(第3研修室)  
内 容  
(1) 令和7年度の活動について(総括)  
(2) 令和8年度の活動について(計画)  
(3) 令和8年度の研修会について(計画)  
(4) 令和8年度高教研・東北商研大会の発表について

(2) 会計分野研究委員会・専門委員会(事務局:弘前実業高等学校)

- 第1回  
日 時 令和7年4月24日(木) 13:30~15:30  
会 場 青森県総合社会教育センター(第2多目的研修室)  
内 容  
(1) 令和7年度年間計画について  
(2) 令和7年度研修会について  
(3) 令和7年度高教研・東北商研大会の発表等について

- 第2回  
日 時 令和7年6月17日(火) 13:30~15:30  
会 場 青森県総合社会教育センター(第2多目的研修室)  
内 容  
(1) 令和7年度高教研・東北商研大会の発表等について  
(2) 県高教研分科会について  
(3) 教員対象研修会について

- 青森県高等学校商業教育研究大会 第2分科会  
期 日 令和7年8月19日(火) 15:00~16:30  
会 場 ホテルグランヒルつたや(三沢市)  
参加者 24名(うち専門委員13名)  
内 容 演題「最新会計基準から見える重要なカギ」  
講 師 学校法人高橋学園 専門学校東京CPA会計学院  
学園理事 教務主任 山内 樹 氏

- 令和7年度 教員対象研修会「財務会計の指導力強化セミナー」  
日 時 令和7年9月25日(木) 10:00～15:45  
会 場 青森県総合社会教育センター(第2多目的研修室)  
参加者 19名(うち専門委員11名)  
内 容 外部講師による講義  
・財務分析と経営分析の違い  
・財務諸表から見える企業戦略  
・実際に財務分析をしてみよう!  
・見えないものを視る力こそ思考力  
講 師 学校法人高橋学園 専門学校東京 CPA 会計学院  
学園理事 教務主任 山内 樹 氏

- 第3回  
日 時 令和7年11月19日(水) 13:30～15:30  
会 場 青森県総合社会教育センター(第2研修室)  
内 容  
(1) 令和7年度の活動について  
(2) 令和8年度の活動計画について  
(3) 令和8年度の教員対象研修会について  
(4) 令和8年度の高教研分科会について  
(5) 令和8年度の研究内容について

(3) ビジネス情報分野研究委員会・専門委員会 (事務局:三沢商業高等学校)

- 第1回  
日 時 平成7年4月22日(火) 13:00～15:30  
会 場 青森県総合社会教育センター(第3研修室)  
内 容  
(1) 令和7年度年間活動計画について  
(2) 教職員対象研修会の研修内容について  
(3) 地区別情報処理技術者試験対策講座について  
(4) 令和7年度商研大会発表等について
- 第2回  
日 時 令和7年6月17日(火) 13:00～15:30  
会 場 青森県総合社会教育センター(第3研修室)  
内 容  
(1) 令和7年度 県・東北商業教育研究大会の発表等について  
(2) 地区別情報処理技術者試験対策講座について
- 第3回  
日 時 令和7年7月2日(木) 13:00～15:30  
会 場 青森県総合社会教育センター(第6研修室)  
内 容  
(1) 令和7年度 県・東北商業教育研究大会の発表等について  
(2) 教職員対象研修会の研修内容について  
(3) 地区別情報処理技術者試験対策講座について

- 青森県高等学校商業教育研究大会 第3分科会
  - 日 時 令和7年8月19日(火)
  - 会 場 ホテルグランヒルつたや(三沢市)
  - 参加者 31名(うち専門委員12名)
  - 内 容 生成AIを活用した授業づくり  
～AI時代を主体的に生き抜く生徒の育成～
  - 講 師 ITラボ株式会社 代表取締役 新山 則和 氏
  
- 令和7年度ビジネス情報分野科目指導法研修会
  - 日 時 令和7年10月1日(水)
  - 会 場 青森商業高校 「情報処理実習室3」
  - 内 容 (1) 生成AIについて  
(2) IT活用全般について
  - 参加者 19名(うち専門委員10名)
  - 講 師 青森大学 ソフトウェア情報学部 教授 角田 均 氏
  
- 第4回
  - 日 時 令和7年11月12日(水) 13:00～15:30
  - 会 場 青森県総合社会教育センター(第3研修室)
  - 内 容  
(1) 令和7年度の振り返りについて  
(2) 令和8年度の活動内容について
  
- (4) 総合的科目研究委員会(事務局:青森商業高等学校)
  - 第1回
    - 日 時 令和7年4月21日(月) 13:30～15:30
    - 会 場 青森県立青森商業高等学校(視聴覚室)
    - 内 容  
(1) 研究テーマについて  
(2) 令和7年度の活動について  
(3) 生徒実行委員会について  
(4) 令和8年度発表に向けて
  
  - 第2回
    - 日 時 令和7年6月16日(月) 13:30～15:30
    - 会 場 青森県立青森商業高等学校(会議室)
    - 内 容  
(1) 今年度の活動について  
(2) 県生徒商業研究発表大会について  
(3) 次回委員会について
  
  - 第3回
    - 日 時 令和7年11月27日(木) 13:30～15:30
    - 会 場 青森県立三沢商業高等学校(総合実践室)
    - 内 容  
※生徒による活動報告  
(1) 各校文化祭における開発商品販売について  
(2) 次年度の各校における課題研究について  
(3) 令和8年度委員会活動計画について

(5) 教育課程等研究委員会（事務局：青森商業高等学校）

○ 第1回

日 時 令和7年11月27日（木）10:00～12:00

会 場 青森県立三沢商業高等学校（総合実践室）

内 容

(1) 年間計画について

(2) 情報交換 ①令和8年度教育課程表について

②校内規程（観点別評価）について

③県外学校視察報告について

(3) 指導・助言 青森県総合学校教育センター産業教育課 指導主事 新堂 満香 氏

4. 主 催 事 業

(1) 高大連携推進事業

青森県の商業教育における高大連携推進協議会

期 日 令和7年11月26日（水）

会 場 青森県立青森商業高等学校 視聴覚室

内 容

(1) 令和7年度各校における高大連携の取組状況について

(2) 高大連携から高大接続への取組状況について

(3) 協議（高大接続における生成AIの活用と指導の在り方について）

(2) 地区別日商簿記直前対策講座

津軽地区

期 間 令和8年2月7日（土）～8日（日）

会 場 青森県立弘前実業高等学校（参加者はリモート配信で講義を視聴）

内 容 直前対策

講 師 仙台大原簿記情報公務員専門学校 中島 京哉 氏

参加者 八戸商業5名 弘前実業35名 青森商業4名 計44名

(3) 情報処理技術者試験直前対策講座

津軽地区

日 時 令和7年8月30日（土）9:00～15:00

場 所 青森県立弘前実業高等学校（他校の参加者はリモート配信で講義を視聴）

内 容 高度試験対策（ITパスポート・基本情報処理）

講 師 専門学校アレック情報ビジネス学院 山 舘 誠 氏

参加者 弘前実業30名 八戸商業13名 三沢商業14名 青森商業29名 計86名

県南地区

日 時 令和8年2月21日（土）9:00～15:00

場 所 青森県立三沢商業高等学校（他校の参加者はリモート配信で講義を視聴）

内 容 高度試験対策（ITパスポート・基本情報処理）

講 師 専門学校アレック情報ビジネス学院 山 舘 誠 氏

参加者 弘前実業30名 八戸商業13名 三沢商業14名 青森商業29名 計86名

(4) 各種研修会参加

第17回全国商業教育指導者研修会

期 間 令和7年7月30日（水）～8月1日（金）

会 場 全商会館（東京都）

参加者 青森県立弘前実業高等学校 西舘 大輔

※高大・地域連携商業教育活性化事業（往復交通費）

産業・情報技術等指導者養成研修（商業）

期 間 令和7年7月29日（月）～8月2日（金）

会 場 千葉商科大学

参加者 大間高等学校 教諭 三橋 壮大

※高大・地域連携商業教育活性化事業（受講費）

産業・情報技術等指導者養成研修（情報）

期 間 令和7年8月5日（月）～8月7日（水）

会 場 大阪教育大学 みらい教育共創館

参加者 八戸商業高等学校 教諭 榊 祥吾

※高大・地域連携商業教育活性化事業（受講費）

### Ⅲ 各種競技大会

#### 1. ビジネス計算

(1) 第72回全国高等学校ビジネス計算競技大会青森県予選会(令和7年6月7日 青森商業高等学校)

##### ■珠算

###### 【団体競技】

順位	学校名	得点
1	三沢商業高等学校	1,390
2	八戸商業高等学校	960

###### 【個人総合競技】

順位	氏名	学校名	得点
1	太田 若那	三沢商業高等学校	490
2	下田 稜馬	三沢商業高等学校	460
3	坂澤 里優	三沢商業高等学校	440
4	沢居 悠希	三沢商業高等学校	380
5	鎌本 咲紅	三沢商業高等学校	360
6	後藤 愛里	青森商業高等学校	340

###### 【種目別競技】

順位	読上暗算		順位	応用計算		順位	読上算	
1	坂澤 里優	三沢商業	1	下田 稜馬	三沢商業	1	坂澤 里優	三沢商業
2	沢居 悠希	三沢商業	2	鎌本 咲紅	三沢商業	2	下田 稜馬	三沢商業
3	太田 若那	三沢商業	3	坂澤 里優	三沢商業	3	太田 若那	三沢商業
4	小野寺星七	三沢商業	4	太田 若那	三沢商業	4	鎌本 咲紅	三沢商業
5	下田 稜馬	三沢商業	5	越野 晴日	三沢商業	5	清水 心路	八戸商業
6	清水 心路	八戸商業	6	沢居 悠希	三沢商業	6	後藤 愛里	青森商業

##### ■電卓

###### 【団体競技】

順位	学校名	得点
1	三沢商業高等学校	1,630
2	八戸商業高等学校	1,410
3	青森商業高等学校	1,020

###### 【個人総合競技】

順位	氏名	学校名	得点
1	根岸 沙耶	三沢商業高等学校	550
2	吉田 大晟	三沢商業高等学校	540
3	大澤 千夢来	三沢商業高等学校	540
4	宮部 初音	三沢商業高等学校	500
5	能方 永真	三沢商業高等学校	500
6	千葉 瑠栞	八戸商業高等学校	480

順位	応用計算		順位	読上算	
1	内城 夏月	八戸商業	1	大澤千夢来	三沢商業
2	根岸 沙耶	三沢商業	2	川畑 潤弥	八戸商業
3	大澤千夢来	三沢商業	3	関 凜太郎	青森商業
4	高橋 凌昊	八戸商業	4	千葉 瑠栞	八戸商業
5	川畑 潤弥	八戸商業	5	能方 永真	三沢商業
6	太田 梨南	三沢商業	6	吉田 大晟	三沢商業
			6	藤谷 和	八戸商業

(2) 第57回青森県高等学校ビジネス計算新人競技大会（令和7年9月20日 三沢商業高等学校）

■珠算

【団体競技】

順位	学校名	得点
1	三沢商業高等学校	1,100
2	八戸商業高等学校	900

【個人総合競技】

順位	氏名	学校名	得点
1	坂澤里優	三沢商業高等学校	450
2	澁谷妃鞠	下山学園高等学校	380
3	田村美都姫	八戸商業高等学校	350

【種目別競技】

順位	読上暗算		順位	応用計算		順位	読上算	
1	坂澤里優	三沢商業	1	坂澤里優	三沢商業	1	坂澤里優	三沢商業
2	沢居悠希	三沢商業	2	澁谷妃鞠	下山学園	2	澁谷妃鞠	下山学園
3	小野寺星七	三沢商業	3	坂本梨々花	三沢商業	3	安田李菜	下山学園
			3	小笠原逞	三沢商業			

■電卓

【団体競技】

順位	学校名	得点
1	三沢商業高等学校	1,440
2	八戸商業高等学校	1,190

【個人総合競技】

順位	氏名	学校名	得点
1	千葉瑠栞	八戸商業高等学校	500
2	宮部初音	三沢商業高等学校	490
3	新田優希斗	三沢商業高等学校	480
4	能方永真	三沢商業高等学校	470
5	太田梨南	三沢商業高等学校	460
6	石川悠玖	三沢商業高等学校	430

【種目別競技】

順位	応用計算		順位	読上算	
1	千葉瑠栞	八戸商業	1	千葉瑠栞	八戸商業
2	宮部初音	三沢商業	2	能方永真	三沢商業
3	能方永真	三沢商業	3	宮部初音	三沢商業
4	新田優希斗	三沢商業	4	太田梨南	三沢商業
5	太田梨南	三沢商業	4	佐藤柑奈	八戸商業
6	石川悠玖	三沢商業			

## 2. ワープロ

(1) 第72回全国高等学校ワープロ競技大会青森県予選会 (令和7年6月21日 八戸商業高等学校)

### ■ワープロの部

#### 【団体競技】

順位	学校名	打数
1	八戸商業高等学校	4,981
2	三沢商業高等学校	4,623
3	青森商業高等学校	3,501

#### 【正確賞】

氏名	学校名
稲田 悠花	三沢商業高等学校

#### 【個人競技】

順位	氏名	学校名	打数
1	稲田 悠花	三沢商業高等学校	1,929
2	殿村 漣	八戸商業高等学校	1,798
3	大道 悠桜	八戸商業高等学校	1,623
4	小比類巻泉 望	八戸商業高等学校	1,564
5	永田 倫	八戸商業高等学校	1,560
6	小山石 優風	三沢商業高等学校	1,365

(2) 第57回青森県高等学校ワープロ新人競技大会 (令和7年9月13日 青森商業高等学校)

#### 【団体競技】

順位	学校名	打数
1	八戸商業高等学校	3,735
2	三沢商業高等学校	3,708
3	青森商業高等学校	2,027

#### 【個人競技】

順位	氏名	学校名	打数
1	永田 倫	八戸商業高等学校	1,422
2	小比類巻 泉望	八戸商業高等学校	1,388
3	小山石 優風	三沢商業高等学校	1,346
4	北向 陽太	三沢商業高等学校	1,236
5	土橋 虎太郎	三沢商業高等学校	1,209
6	中 岫 彩乃	三沢商業高等学校	1,126

#### 【1年生の部・個人】

順位	氏名	学校名	打数
1	土橋 虎太郎	三沢商業高等学校	1,209
2	成田 愛翔	八戸商業高等学校	869
3	千葉 穂乃花	三沢商業高等学校	834
4	鶴ヶ崎 桃月	三沢商業高等学校	824
5	横浜 心音	三沢商業高等学校	791
6	白川 智依	青森商業高等学校	677

#### 【正確賞】

該当者なし

## 3. 情報処理

第37回全国高等学校情報処理競技大会青森県予選会 (令和7年6月14日 青森商業高等学校)

#### 【団体競技】

順位	学校名	得点
1	弘前実業高等学校	419
2	三沢商業高等学校	345
3	八戸商業高等学校	288

#### 【個人競技】

順位	氏名	学校名	得点
1	佐藤 紘也	弘前実業高等学校	153
2	工藤 夏樹	弘前実業高等学校	141
3	住吉 玲菜	三沢商業高等学校	129
4	小嶋 凜香	弘前実業高等学校	125
5	奈良 叶多	弘前実業高等学校	123
6	佐藤 ひかり	弘前実業高等学校	118
佳良賞	藤本 愛音	三沢商業高等学校	114

#### 4. 簿記

(1) 第41回全国高等学校簿記競技大会青森県予選会（令和7年6月21日 三沢商業高等学校）

【団体の部】

順位	学校名	得点
1	三沢商業高等学校	309
2	八戸商業高等学校	279
3	弘前実業高等学校	204

【個人の部】

順位	氏名	学校名	得点
1	寺井 瑤貴	三沢商業高等学校	130
2	石川 友菜	八戸商業高等学校	107
3	田中 聖真	弘前実業高等学校	100
4	竹井 心那	八戸商業高等学校	93
5	須藤 輝	三沢商業高等学校	91
6	佐々木 珠緒	三沢商業高等学校	88

(2) 第30回青森県高等学校簿記競技大会（令和7年10月25日 弘前実業高等学校）

応用部門

【団体の部】

順位	学校名	得点
1	三沢商業高等学校	379
2	弘前実業高等学校	354
3	青森商業高等学校	268

【個人の部】

順位	氏名	学校名	得点
1	田中 聖真	弘前実業高等学校	174
2	須藤 輝	三沢商業高等学校	151
3	佐川 依央湊	青森商業高等学校	137
4	大滝 泰斗	三沢商業高等学校	122
5	村田 凌汰朗	三沢商業高等学校	106
6	石黒 想宇	弘前実業高等学校	91

基礎部門

【団体の部】

順位	学校名	得点
1	三沢商業高等学校	254
2	弘前実業高等学校	212

【個人の部】

順位	氏名	学校名	得点
1	遠藤 陽斗	三沢商業高等学校	88
2	和田 心音	三沢商業高等学校	86
3	石戸谷 和花	弘前実業高等学校	80
4	高橋 莉杏	三沢商業高等学校	80
5	芋田 葵	三沢商業高等学校	76
6	三村 文也	三沢商業高等学校	76

#### 5. 英語

第42回全国商業高等学校英語スピーチコンテスト青森県予選会（令和7年7月8日 三沢市公会堂）

レシテーションの部（暗唱の部）

順位	氏名	学校名
1	松橋 美麗	三沢商業高等学校
2	関野 はるな	八戸商業高等学校
3	関 凜太郎	青森商業高等学校

スピーチの部（創作の部）

順位	氏名	学校名
1	坂本 梨々花	三沢商業高等学校
2	小坂 羽純	八戸商業高等学校
3	後藤 愛里	青森商業高等学校

#### 6. 生徒商業研究発表

青森県高等学校生徒商業研究発表大会（令和7年7月11日 アピオあおもり）

順位	学校名	テーマ
1	三沢商業高等学校 A	笑顔をつなぐ愛の架け橋 ～販売チャネルの大革命！～
2	八戸商業高等学校 B	つながるまち、ひろがるバス
3	下山学園高等学校 A	津鉄を救え ～津軽鉄道復興策プラン～

## IV 各種検定試験

### 1. ビジネス計算実務検定

第150回 全商ビジネス計算実務検定試験 R7.6.15									
	1級			2級			3級		
	珠算	電卓	ビジネス	珠算	電卓	ビジネス	珠算	電卓	ビジネス
申込者数	6	291	178	0	212	128	0	274	57
受験者数	6	283	172	0	202	119	0	260	55
部門合格者数	1	171	6	0	79	8	0	189	5
部門合格率	16.7%	60.4%	3.5%	0%	39.1%	6.7%	0%	72.7%	9.1%
級合格者数	73			71			45		

第151回 全商ビジネス計算実務検定試験 R7.11.9									
	1級			2級			3級		
	珠算	電卓	ビジネス	珠算	電卓	ビジネス	珠算	電卓	ビジネス
申込者数	8	138	165	0	304	273	0	136	258
受験者数	7	127	144	0	227	248	0	122	239
部門合格者数	1	81	0	0	82	30	0	22	13
部門合格率	14.3%	82.7%	0.0%	0%	29.6%	12.1%	0%	18.0%	5.4%
級合格者数	40			129			152		

### 2. 簿記実務検定

第100回 全商簿記実務検定試験 R7.6.22				
	1級(会計)	1級(原計)	2級	3級
申込者数	131	116	143	84
受験者数	117	105	134	73
合格者数	19	13	26	25
合格率	16.2%	12.4%	19.4%	34.2%
級合格者数	23			

第101回 全商簿記実務検定試験 R8.1.25				
	1級(会計)	1級(原計)	2級	3級
申込者数	260	297	344	346
受験者数	245	279	336	329
合格者数	108	110	122	174
合格率	44.1%	39.4%	36.3%	52.9%
級合格者数	77			

### 3. ビジネス文書実務検定

第74回 全商ビジネス文書実務検定試験 R7.6.29						
	1級		2級		3級	
	ビジネス	速度	ビジネス	速度	ビジネス	速度
申込者数	70	82	176	233	170	285
受験者数	67	77	164	217	157	272
部門合格者数	26	27	104	172	127	239
部門合格率	38.8%	35.1%	63.4%	79.3%	80.9%	87.9%
級合格者数	16		98		110	

第75回 全商ビジネス文書実務検定試験 R7.11.23						
	1級		2級		3級	
	ビジネス	速度	ビジネス	速度	ビジネス	速度
申込者数	60	81	200	227	340	338
受験者数	58	78	184	211	326	322
部門合格者数	35	36	140	136	258	293
部門合格率	60.3%	46.2%	76.1%	64.5%	79.1%	91.0%
級合格者数	24		103		256	

#### 4. 英語検定

第74回 全商英語検定試験 R7.9.7			
	1級	2級	3級
申込者数	16	58	107
受験者数	16	57	100
合格者数	2	9	82
合格率	12.5%	15.8%	82.0%

第75回 全商英語検定試験 R7.12.21			
	1級	2級	3級
申込者数	28	54	48
受験者数	28	48	48
合格者数	1	6	31
合格率	3.6%	12.5%	64.6%

#### 5. 情報処理検定

第73回 全商情報処理検定試験 R7.9.28					
	1級		2級		3級
	プログラミング	ビジネス情報	プログラミング	ビジネス情報	
申込者数	100	160	130	295	338
受験者数	94	144	124	285	313
合格者数	24	33	70	123	169
合格率	25.5%	22.9%	56.5%	43.2%	54.0%

第74回 全商情報処理検定試験 R8.1.18					
	1級		2級		3級
	プログラミング	ビジネス情報	プログラミング	ビジネス情報	
申込者数	96	267	99	488	469
受験者数	93	253	95	478	439
合格者数	21	65	47	349	274
合格率	22.6%	25.7%	49.5%	73.0%	62.4%

6. 商業経済検定

第40回 全商商業経済検定試験 R8.2.1							
	1 級	2 級				3 級	
		マーケ テ ィ ン グ	商 品 開 発 と 流 通	ビジネス法規	ビ ジ ネ ス マ ネ ジ メ ン ト	ビ ジ ネ ス 基 礎	
申 込 者 数		415	167	86	45	129	
受 験 者 数		369	163	60	41	125	
合 格 者 数		194	121	30	40	97	
合 格 率		52.6%	74.2%	50.0%	97.6%	77.6%	
級合格者数	149					137	97

7. 会計実務3検定試験

第17回 全商財務諸表分析検定・財務会計検定・管理会計検定 R7.12.14			
	財務諸表分析検定試験	財務会計検定試験	管理会計検定試験
申 込 者 数	141	1	7
受 験 者 数	131	1	6
合 格 者 数	87	0	1
合 格 率	66.4%	0%	16.7%

8. ビジネスコミュニケーション検定

CBT方式	ビジネスコミュニケーション検定試験		ビジネスコミュニケーション検定試験	
	1回目	R7.6.7~7.27	2回目	R7.11.1~12.21
申 込 者 数		14		106
受 験 者 数		14		99
合 格 者 数		12		60
合 格 率		85.7%		60.6%

9. 1級合格者の数

	ビジネス計算 珠 算	ビジネス計算 電 卓	簿 記	ビ ジ ネ ス 文 書	英 語	情 処 プ ロ グ ラ	情 処 ビ ジ ネ ス	商 経	会計実務 分 析 ・ 財 務 ・ 管 理	合 計
人 数	8	108	100	40	3	45	98	149	88	639

※会計実務3検定は延べ人数を表記

10. 3種目以上1級合格者数

学 校 名	3種目	4種目	5種目	6種目	7種目	8種目	9種目	合計
青 森 商 業 高 等 学 校	14	4	2	1	1		1	23
弘 前 実 業 高 等 学 校	21	10	4	1				36
八 戸 商 業 高 等 学 校	14	7	1	3	1			26
三 沢 商 業 高 等 学 校	6	1	6	1	1	1		16
三 戸 高 等 学 校	1							1
青 森 中 央 高 等 学 校	3							3
青 森 山 田 高 等 学 校		1						1
計	59	23	13	6	3	1	1	106

## 編 集 後 記

今年度も原稿の依頼に快くご承諾いただき、貴重な原稿をお寄せくださった諸先生方や会員の皆様方のご協力により、「2025青森商業教育マーキュリー」をお届けすることができました。心よりお礼申し上げます。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が数年前に落ち着いたことを受け、学校現場においても完全に日常を取り戻しました。各種行事や研修、大会等も安定して開催され、教育活動はコロナ禍以前の活気を取り戻しています。その一方で、ICTの活用や学びの多様化など、これまでに培われてきた新たな教育の形が定着しつつあります。

学校教育においては、学習指導要領のもと、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた取組が一層求められていますが、商業教育においても、地域や企業との連携、起業家精神の育成など、社会の変化を的確に捉えた実践や研究が、各校及び研究委員会で進められており、本研究誌にも掲載されています。学校での学びが、生徒一人一人の将来につながり、地域や社会を支える力となるよう、今後も商業教育のさらなる推進に向けて、関係者が連携しながら取り組んでいくことが重要だと思います。

終わりに、本研究誌の充実と発展のため、今後とも皆様の変わらぬご指導ならびにご叱正を賜りますようお願い申し上げますとともに、本県の商業教育が一層の発展を遂げることを心より祈念いたします。

(編纂委員)

### 研究誌編纂委員会

吉岡香織	県立青森商業高等学校	(委員長)
榑晃太	〃	(東青)
鈴木瞳	県立弘前実業高等学校	(中南)
上野泰聖	県立八戸商業高等学校	(三八)
向谷地史拓	県立三沢商業高等学校	(上十三)
鶴ヶ崎礼奈	〃	(会場校)
佐々木萌	〃	(会場校)
奈良靖宏	県立鯹ヶ沢高等学校	(西北五)
川口真史	県立大湊高等学校	(下北)
半田莉玖斗	下山学園高等学校	(私学)